

---

# ちょっと背伸びなk i s s

夜斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ちよつと背伸びなkiss

### 【Nコード】

N5507T

### 【作者名】

夜斗

### 【あらすじ】

白玉楼の大掃除の日

主である西行寺幽々子は侍女達の目を盗み、こっそり庭の蔵へと忍び込んでいた

古ぼけた物品が散らばる中、ふと幽々子は小さな写真を見つけた  
セピア色に染まる小さな写真

そこには幽々子と妖夢と、それから一人の少年が写っていた  
名を『夕風千花』

それは十年前の記憶

彼は妖夢の、淡い初恋の相手だった……

## 序章 へ セピアに染まる記憶 へ

「あら、これは……」

冥界に存在する巨大な屋敷、白玉楼。はくぎょくろう

その白玉楼が誇る広大な庭の隅に位置する蔵の中で、主である西行さいぎ寺幽々子よこしげはそれを手に取ると、口元でそっと笑みを浮かべた。手にしたそれは一枚の写真だった。

相当年季の入った物らしく、写真はセピア色に滲んで何とも味気ない写真となっていた。

写真には、白玉楼の屋敷をバックに三人の人物が写っていた。

一人は今と変わらぬ姿の幽々子自身。そして、

「幽々子様！」

「あら、妖夢じゃない」

パンツ、と蔵の戸を派手な音を立てながら開けて現れた一人の少女。銀の髪に薄緑色のワンピース姿。そして背と腰には長さの異なる二本の刀を帯刀していた。

幽々子が手にしていた写真に写る二人目の人物、魂魄妖夢こんぱくようむだった。妖夢は頬を紅潮させながら幽々子の元へと駆け寄って、

「どうして幽々子様がこのようなところに。本日の大掃除は私たちに任せて、幽々子様はお部屋に……む」

「お屋敷の大掃除って退屈なんですよ。それで、せっかくだから宝探してもしようかと思って」

そう言いながら幽々子は妖夢の唇を指で制した。それから、今しがた見つけた写真を取り出して妖夢の目の前で見せ

つけるように揺らした。

「そ、それは……！」

すると妖夢の表情が微かに紅くなる。

「ふふ。何だか懐かしいものを見つけちゃったわね。えっと、何方どなただったかしら？ この写真に写ってる妖夢の初恋の」

「へえ！？ ……わ、あわわわ！？」

顔を真っ赤にさせながら妖夢は写真を取ろうと手を伸ばす。

そんな様子を楽しむように、妖夢には届かないよう腕を上げて悪戯もてあそつぽく写真を弄もてあそぶ幽々子。

「あらあら、どうしたの妖夢？ そんなに恥ずかしい？」

「そ、その写真探してたんですッ！ か、返し……て……ッ！」

「あ……」

「そこですッ！ ……って、うわあわわ！？」

不意に幽々子の手からはらりと落ちた小さな写真に勢いよく飛び込んで、妖夢はそのまま蔵の壁に突っ込んでしまった。

ゴン、という鈍い音の後、蔵の棚からありとあらゆる骨董品が妖夢に向かってこぼれ落ちる。

そんな情けない様を、幽々子はクスクス笑いながら見ていて、

「妖夢、大丈夫？ 金ダライとか落ちてこなかった？」

「この蔵に金ダライなんてありませんよ！ ……はあ、でもよかったです」

妖夢は適当に物を退けてその場から出ると、大事そうに写真を抱き

しめた。

「いつだったかしら……？ あの人がこの白玉楼に来たのって」

「えと、十年くらい前……ですね」

「月日なんてあつという間ねえ。……彼、今頃どこで何をしているのかしら？」

「あ、幽々子様だって気になってるじゃないですか」

「まあ、多少は……ね。ふふ」

妖夢の握る写真を覗きこむようにしながら、幽々子は微笑んだ。

「千花<sup>ちか</sup>さん……元気にしてるかな」

写真に写る三人目の人物を見つめながら、妖夢は十年前のあの日思い出していた。

## 序章 へ セピアに染まる記憶 へ（後書き）

お待たせしました

新作、『ちよつと背伸びなkiss』スタートです。

今回は妖夢と幽々子、そしてオリジナルの主人公を中心にお話を書いていきます。

はたして妖夢の初恋とは？

写真に写る『千花』とはいったいどんな人物なのか？

これから紡がれるお話に乞うご期待……ッ！

前作同様、1日1話のペースで頑張って執筆していくので、どうぞよろしく願います。

感想、ご意見も自由にどうぞ。

## 第一話 へ 蒼刃狂乱 へ

その日、妖夢は幽々子の言いつけにより里まで菓子を買いに出かけていた。

頼まれていたのは金平糖。別段珍しい物ではないのだが、幽々子は侍女を頼らず直接妖夢に頼んだ。

出かける間際、戸口まで見送りに来た幽々子が笑顔で一言告げた。

「帰ってきたら、一緒に食べましょうね」

その一言が嬉しくて、妖夢は疾風のような早さで白玉楼を後にした。里里まで多少距離はあるが全速力で走って駄菓子屋に飛び込む。

息を切らせる妖夢に、店主のおじいちゃんはホッホッと大らかに笑いながら色とりどりの金平糖の入った包みを手渡した。

小さな紙の袋を抱えながら妖夢は冥界へと続く道を歩いていた。

「それにしても、突然金平糖が食べたくなっただなんて、幽々子様も案外子供っぽいところあるんだなあ」

主が金平糖をにこにこしながら食べる様を浮かべると妖夢は小さく微笑んだ。

やがて冥界の境界に一步踏み込むと、いつもの冷たい空気が頬を撫でる。

死と静寂だけが支配する冥界。

生氣など、微塵も感じられないこの空間。

最初はやはり躊躇したものだ。

いくら自分が半人半霊であるとはいえ、この不気味な雰囲気はどうにも慣れない。

剣の達人だというのに、妖夢はお化けの類がてんでダメだった。



幽々子はそれが可愛いと言ってはくれるが……

「私もまだまだ未熟で……ん？」

ため息混じりに歩いていると、妖夢の前方に複数の人影を見つけた。目を凝らしてみると、そこには一人の少年が複数の妖怪に取り囲まれていた。

囲んでいる妖怪の数は四人。各々手には刀などの武器を手にしていた。

「多勢に無勢とは何と卑怯な……これは助太刀しないと！」

妖夢が背の楼観剣に手を伸ばしたと同時に、前方の妖怪達が一斉に少年に向かって飛びかかった。

まずい。

地を蹴って駆け出そうと姿勢を低くしたとき、目の前で異変が起った。

「え……？」

突然少年の体から、青白いオーラのようなものが爆発するように吹きだしたかと思うと、腰からやや長めの蒼い太刀を抜き払い、襲いかかる妖怪たちを一薙ぎで消し去ってしまった。

たったの一撃、まさに刹那。

妖夢が瞬きするよりも早く、少年は数体の妖怪を一刀の下に伏せてしまったのだ。

「え、えッ……？」

完全に出鼻をくじかれてしまった妖夢は目を白黒させながら少年の

姿を遠目で見つめていた。

青と白を基調とした、袖口のゆったりとした道着。

凜と輝く蒼髪は肩ほどまで伸びていて、ちょうどうなじの辺りでくくっている。

太刀を握ったままの少年は肩を大きく上下させながらその場に立ち尽くしていた。

返り血一つ、浴びていなかった。

ふと、妖夢の存在に気づいたのか少年は首を少し傾けた。

鋭く光る蒼の双眸が妖夢を一瞥する。

妖夢は手にかけていた楼観剣の柄から手を離し、少年の方へと歩いていった。

「助太刀しようかと、思ったのですが……いらぬ心配でしたね」

ハハハと軽く妖夢が笑いかけた瞬間、少年の姿が霞んで消えた。と同時に、妖夢の首筋に向かって光速の刃が踊りかかって、

「ツツ!? 何を!？」

目にも止まらぬ速さで楼観剣を抜き、すんでのところで刃を受け止める。

甲高い音と共に妖夢は大きくバックステップして少年を睨み見据えた。

「いきなり斬りつけるとは、どういった見ですか!」

「……………」

少年は答えなかった。

ただ、大袈裟なほどに肩を上下させ息を吐き、虚ろな青の瞳で妖夢を見つめていた。

明らかに様子がおかしい。

じりじりと間合いを計りながら妖夢は次の一手に備え楼観剣を強く握りしめた。

そして、再び少年の姿が霞む。

ヒュンツと風を切る音に反応し軽く身を屈め、再び首筋を狙って振り払われた横薙ぎを回避。

と同時に妖夢はくると身体を捻りその勢いを乗せた一閃を放つ。が、刃が少年の衣服をかすめただけで避けられてしまった。

「速さは、相当なものですな。……しかし」

妖夢は違和感を覚えていた。

少年の太刀に、心が乗っていない。

その太刀筋はまるで、何か大きな力に翻弄されがむしゃらに暴れているようだった。

だから、何処から斬るのか、何処へ斬るのか、めちやくちゃで正確性がまるでない。

この程度の腕で、この少年は私に挑んでくるというのか。

「……笑止」

襲いかかる剣戟を流し、あるいは受け止め、妖夢はその一瞬を待った。

相手の攻撃が大降りになるその一瞬だけを狙い、そして時が来た。少年の太刀が上段を向き、そのまま大きく振り上がった。

振り下ろす速度は速い。だが、

「一気に踏み込めばッ！」

ガラ空きになった胴を目がけ強く踏み込み、妖夢が手にした刀を薙

「ごうとしたその瞬間、

「…………リ…………リ…………ッ」

「ッ？」

妖夢はギリギリのところで刃を返し、刀の峰<sup>みね</sup>で少年の胸を打った。

「がッ！」

ぐらり、と少年の体が揺らぎ、やがてあっさりその場に崩れ落ちた。妖夢は微かに眉をひそめた。

「今、この人『リン』って言ったような……？」

剣を収め少年の元へと近づいた時、突然少年から蒼いオーラが消え去り、蒼髪が一瞬の内に黒髪へと変わった。その様子を見て妖夢は驚き目を見張った。

「こ、これはいったい……」

しかし倒れこむ少年をこのままにしておく訳にもいかず、妖夢はや躊躇いつつも少年を背負った。

そして再び驚いた。

少年はまるで羽のようにとても軽く、小柄な妖夢でも簡単に背負うことが出来たのだ。

「……と、とりあえず、お屋敷に帰らないと。幽々子様も心配してるだろうし」

そして、妖夢は再び白玉楼へと続く道を足早に歩きだした。

第一話 へ 蒼刃狂乱 へ (後書き)

ううん、いまいち反応が薄い感じ

まだ最初だししょうがないか；

というか、もう少し地の文どうにかならないものか……

単純に読書量が足りないんだろうなあ；

## 第二話 へ 犬耳と尻尾 へ

・  
・  
・

い様。

兄様ツ。

呼んでいる、誰かが僕を。

……誰が？

目の前が真っ赤で、何も見えない。

耳鳴りがひどくて、何も聞こえない。

だけど、僕はこの声を知っている。  
知っているんだ。

とても、身近な人で。  
とても、大切な人で。

この世でたった一人の……

そうだ。

たった一人の……妹だ。

そして突然、目の前の赤が消える。  
耳鳴りが収まる。

だけど、僕はどうしてこんなに恐れている？

赤い世界から解放されるのに。  
澄んだ世界の音が聞こえるのに。

どうして、恐れる。

クリアになった視界の向こう。

そこにはいくつもの、いくつもの……

・  
・  
・

そして目を覚ますと、少年は見覚えのない天井と対面した。

「い、いっつ……」

と、同時に腹部に鈍い痛みを感じて少年は身を掬った。  
身体を起こして服をめくって見る。……ちょうど腹の真ん中あたり  
が少し青くなっていた。

何かにぶつかったのか、それとも誰かに殴られたのか……

「……ここは、何処だ？」

見覚えのない天井の次は、見覚えのない部屋。

もちろん今横たわっている布団も自分の物ではないし、目の前の掛  
け軸や生け花などもまったく知らない。

そもそも自分の知っている部屋と趣が違おもむきう。

少年はそんな雅な生まれでもないし、そんな趣味も窺たしなめてはいない。  
しばらくして、ここが自分の知らない場所だと理解した。

「何で僕、こんな場所に？ さっきまで僕は……ッ」

記憶を巡らせようとすると、それを拒むように鋭い痛みが少年を襲う。

思い出せない。これは、記憶喪失というものののだろうか。少年がどうにか記憶を思い起こそうとしていると、戸の先に誰かの気配を感じて軽く身構えた。

そしてスツと戸が開くと、少年の目が軽く見開かれた。

そこには銀の髪の少女がちゃんと座していた。

薄緑色のワンピース姿で、背と腰には刀を帯剣していた。

ただ、それよりも少年が気になったのは彼女の、

「……………」

「……？ 私の顔、何かついてますか？」

「あ、いやそういう訳じゃないんだ。ただ」

「ただ？」

「見覚えがあるような、気がして……」

「……先ほどの件、覚えていらっしやらないのですか？」

「先ほど、って？」

すると少女は眉をひそめながらも、一礼してから少年の部屋へと入った。

そのまま歩いて少年の斜め前辺りに座すと事の顛末を話した。

「先ほど、貴方は妖怪に襲われていたんです。そしてその妖怪達を一撃で倒した後、私に斬りかかってきたんですよ」

「斬りかかって……！？ 僕が、まさか……！？」

少年はまったく身に覚えがないと首を振った。

すると少女は軽く首を傾げ、怪訝そうな表情を作ってから、

「目を、合わせてください」



「え……？ ああ、わかった」

言われた通り、少年は少女の瞳をまっすぐ見据えた。  
淀みの無い漆黒の双眸が少女を見つめる。やがて少女はふうと軽く  
吐息した。

「……嘘は、ついてないみたいです。そもそも先ほどと眼の色が  
違いますし」

「眼の色が違う？」

「ええ。先ほどの貴方は貴方の太刀と同じ蒼い色をしていました」

「太刀……？」

少年は首を傾げた。

「……僕、太刀なんか持ってないよ？」

「え？ そんなはずは……」

言って、少女は少年の回りを一瞥した。

太刀はおろか、少年の傍には鞘すらなかった。

「え、さっきまでは確かに太刀を、蒼い太刀を持っていたのに？  
あれ、どうして……」

「妖夢？ あの人気づいたの？」

戸の外から何とも間の抜けた声が聞こえてきた。  
振り向いてみると、戸の端から桃色の髪がゆらゆらと姿をのぞかせ  
ていた。

それを見た少女は飛び跳ねて、

「ゆ、幽々子様！？」

「ゆゆこさま……?」

やがて現れたのは、何とも可愛らしい少女だった。  
その出で立ちは、たつぷりとした和風のドレスに身を包んだお嬢様、  
と言ったところだろうか。

クスクスと微笑を浮かべながら、少女はゆったりとした動作で少女  
の傍へと近づいた。

「幽々子様はお部屋に待っていてくださいと」

「だって退屈なんですもの。それに、殿方と二人つきりにさせるつ  
てのもちよつとねえ?」

同意を求めるかのように少女は少年に微笑んだ。

意味が分からず、少年と少女は二人して頭に疑問符を浮かべた。

「あら、ちよつと早かったかしら? あ、私はこの白玉楼の主の」

「そ、そういうことは私がご説明しますから!」

「え? 自己紹介くらいいいでしょう?」

「……では、とりあえず私から」

コホンと咳払いを一つして、少女は凜とした声音で言った。

「名乗るのが遅れて申し訳ございません。私、この白玉楼で剣術指  
南、そして幽々子様の護衛を務めさせていただいております、魂魄  
妖夢と申します。そして、この方はこの白玉楼の主の」

「西行寺幽々子よ。よろしく」

「よ、よろしく……」

にこやかに名乗った幽々子に対して、少年はややうつむきながら答  
えた。

今の少年の心は、今しがた妖夢から聞いた身に覚えのない出来事で一杯だった。

「……貴方のお名前、訊ねてもいいかしら？」

「え……あ、はい。すみません。まだ名乗ってませんでしたね」

幽々子の言葉に、少年は幽々子と妖夢を交互に一瞥してから答えた。

「千花と、夕凧千花と申します。その、迷惑をかけてすみません」

申し訳なさそうに首を垂れる千花。その姿に、二人は顔を見合わせた。

そして首を振って答えたのは妖夢だった。

「いえ、別に迷惑などお考えにならなくてもいいですよ。あれは明らかに様子が変でしたから」

「本当にすみません……あ、いや、ならこの場合はありがとう……なのかな」

「ふふ。本当に可愛いお方ねえ。その耳に尻尾も可愛いわ」

幽々子の言葉に、妖夢がプツと小さく吹きだして、

「やだなあ幽々子様ったら、冗談が過ぎますよ。この人に尻尾なんて」

すると少年は少し頬を染めながらうつむいて、

「その、尻尾なんて褒められたのは初めてですね……」

「……ふへ？」

妖夢が滅多に上げないような素っ頓狂な声を上げた。

「あらあら。妖夢こそ何を言ってるのよ。彼、狼さんみたいな可愛いお耳と尻尾があるじゃない」

そう。

千花の頭には三角形の耳がパタパタと、そして腰の下にはふさふさの尻尾が揺れていたのだ。

妖夢は目を点にしながら交互に見て、

「え、え、ええええええええええッ!? 犬耳と尻尾おおッ!?」

妖夢の絶叫が白玉楼に響き渡る。

少年は何とも恥ずかしそうにしゅんとうつむいてしまった。

## 第二話 へ 犬耳と尻尾 へ (後書き)

すごく関係無いんですけど、マーマイドとかハーピイっていいですよね！

出来たらあんな彼女が欲しい……w

さて、主人公はどうやら獣耳に尻尾だそうですよ！

椀と一緒にですね！

……いや、だからと言って椀は出演予定ありませんけど；

### 第三話 〱 白玉楼の使用人 〰

「す、すすすみません。突然声を上げてしまつて……」

「いや、気にしてないからいいよ。……だから顔を上げた方が」

千花と幽々子の目の前で、妖夢は地にへばり付くようにべつたりと土下座していた。

幽々子はくすくす笑うだけで咎めもしないし、千花はただただ呆然としていた。

少しやり過ぎなんじゃ、と口を開きかけたところで幽々子が言った。

「もう、別に叫ぶくらいで謝らなくてもいいじゃない。大袈裟よ」

「しかし幽々子様の御前で、しかも千花さんにまで無礼な……」

微かに声が震えている。

それはもう真面目、の一言で片づけられるようなレベルじゃなかった。

彼女にとって、この幽々子様という人物はそれほどまでに恐れ多い人物なのだろうか。

千花の目にはただにこやかに微笑むお嬢様にしかみえないのだが……やがて、幽々子は千花の方へと首を傾げて、

「それで、千花さん？ これからどうするの？」

「これから……ですか。えと……」

答えようとして千花は言葉に詰まった。

これから何も、今までの記憶が無いのだ。

唯一覚えていることはこの名前だけで、それ以外はほとんど何も覚えていない。

視線を反らしながら口を噤んでいると、幽々子が優しく微笑みかけてきて、

「もしかして、行く当てがないのかしら？」

「……すみません。でも、すぐ出ていくので、お二人に迷惑は」

「あら、だったらしばらくここにいたらどうかしら？」

「え……？」

予想外の言葉に千花は顔を上げた。

相変わらず幽々子は優しくそこに微笑んだままだ。

「もちろん、タダで住ませるのも妖夢や他の侍女たちにも失礼だし、この白玉楼の使用人として雇うってカタチになるけどいい？」

「そんなこと、勝手に決めてよろしいのですか？」

すると幽々子は自慢げに胸を張って、

「私が主ですもの。私が決めたらそれでいいのよ。ね、妖夢？」

「幽々子様がそう仰るなら、私は異論ありません」

「ふふ、決まり。じゃあとりあえず、妖夢」

「は、何でしょうか」

「この人のお世話、お願いできるかしら？」

「お、お世話……ですか？」

「そ。使用人として働くならあなたの方が先輩で、彼は後輩でしょう？ 先輩は後輩の面倒を見るものだって言うじゃない」

「はあ……わかりました」

「じゃ、私は部屋に戻るわね。あとはよろしく」

そして幽々子はふわふわとした足取りで部屋を出て行ってしまった。残された二人の間に、やや沈黙が流れて、

「……変わった人ですね」

千花が至極正直な意見を言った。

「……ひ、否定はしません。ですが、守るべき主に変わりありません」

妖夢は凜とした眼差しで答えた。

……その姿、やはり似ている。

ただ、誰に似ているのかはまったく思い出せなかった。

自分に近い存在なのか、それとも恋焦がれていた相手なのか。記憶を失った今の千花にはまったく見当すら付かなかった。

「さて、それではこの白玉楼を案内しましょうか。こちらへどうぞ」

妖夢の声にハッと我に返った千花は頷き、その後ろ姿を追いかけた。

・

「ところで、使用人って何をするんですか？」

屋敷の長い廊下を歩きながら千花は妖夢に訊ねた。

ちょうど庭に面した廊下に差しかった辺りで妖夢が答えた。

「そ、そうですね……えと」

「……？」

妖夢は歩きながら口を濁した。

千花は記憶が無くても、多少の常識は覚えている。



使用人と言えば、専ら召使いや下働きをする人のことを指すものだ。恐らく千花は雑用を請け負うはずであろう。

しかし、何故か妖夢はもごもごするだけでなかなか返事が返ってこなかった。

やがて妖夢が千花に振り返った。やや目を伏せがちにしながら小さく言った。

「恐らく、千花さんは必要ないんじゃないかと……思っんです」

「……えっと、それはどういうコト？」

妖夢は申し訳なさそうな顔で続ける。

「この白玉楼には、数多くの侍女が働いています。炊事、洗濯、掃除、ありとあらゆることを侍女達が全てこなしてしまうんですよ」

「でも、数多くって言うてもそんなにたくさんはいないんじゃない？それに疲れて交代することだってあるでしょう？」

「う、ううん……」

妖夢は上手く説明できないのがもどかしいといった表情になって、

「千花さん、ここがどこだが分かってますよね？」

「え？ 白玉楼……だっけ？」

「そうじゃなくて、ここ、です」

「……？ 地名とかまではさすがに分らないけど……？」

素直に答えた千花の表情を見て妖夢は理解した。

たぶん、彼はここがどういう場所なのか知らないのだ。

と、そこでちょうどいいところに侍女の一人が廊下の向こう側からやってきた。

「あら、妖夢様」

「あ、ちょうどいい所に。千花さん、彼女も侍女の一人ですよ」

「妖夢様、この方は？」

「千花さんと言う者で、今日から使用人になると幽々子様が」

すると侍女は声高らかに笑いだした。

「使用人？　このお屋敷にこれ以上そう言った方は要りませんよ。幽々子様ったらお戯れが過ぎますね。ほほほ」

そして一礼してまた廊下の奥へと行ってしまった。

千花は若干冷や汗をかきながらその姿を目で追っていた。

「……理解、していただきましたか？」

「あ、あああの人、足が無い！？ え、いや、あの！ こ、ここ何処なんですか！？」

「やっぱり……」

「はあ、と軽く息を吐いて、妖夢はこの場所を説明した。」

「ここは冥界です。もちろん侍女達はすべて霊ですので、疲れることもないですし、交代する必要もないんですよ」

「……え、ええええええええええ！？」

今度は千花の悲鳴が白玉楼に響き渡った。

妖夢は驚き戸惑う千花を見てこれからどうしようかと思案して、

「……そうだ、あの場所なら」

ふと、ある場所を思い出した。

### 第三話 へ 白玉楼の使用人 へ (後書き)

台風が近づいてますね；

皆様のところは大丈夫でしょうか？

無理に外出したりして怪我とかしないように気をつけてくださいね。

……でも、台風とか雷とかくるとテンション上がりますよね？w

#### 第四話 へ 悪戦苦闘の差し入れ へ

妖夢の案内で屋敷の外に出て庭の道を抜けると、やがて目の前に小さな道場が見えてきた。

外見はボロボロで相当古い建物らしい。

いざ中へ入って見るとがらんとした空間が広がっていた。最近使った形跡はなく、ほこりだらけでカビ臭い。

「ここが……道場？」

「そうです。昔、私のおじい様が建てた道場なんです」

「おじい様？」

すると妖夢は道場の奥の壁を指差した。

そこには写真が掛けられていた。

写真には髭をたくわえた鋭い眼光を放つ老人が写っていた。

その眼差しは妙な気迫があり、背筋がスツと冷えるような気がした。

「魂魄妖忌<sup>こんぱくようき</sup>。私の祖父であり、剣の師匠なんです」

「魂魄、妖忌……」

千花は不意にその名を口にした。

何故か、この名前に微かな引っかかりを感じたからだ。

どうしてだろうか。もちろん、会ったこともなければ見覚えもない。

ただ、あの鋭い眼差しを見ていると胸の奥底から……

「……千花さん？」

「……あ！ え、えっと、何の話だっけ？」

その一瞬、妖夢の声が消えた。

千花は慌てて返事をする。妖夢は道場内を指でさして、

「お屋敷の中はとも他の使用人が入る隙はありませんので、代わりと言ってはなんですが、ここを掃除していただけませんか？ それと、千花さんの部屋はこの道場の個室を使ってくださって結構です。」

「こんな立派な道場で泊るのか。……何かすごいな。よし」

千花は早速道場の中に入って、奥の小部屋から掃除用具を取り出した。

ほうきや雑巾、それからバケツ。外の井戸から水を汲み、道着の袖をまくって用意をすると雑巾を湿らせ千花は道場の床を拭き始めた。端から端へと何度も往復し、床を綺麗に拭いていく。

道場はかなりの広さなのだが千花の速度もかなりのもので、あっという間に道場の床の半分がピカピカになっていた。

「……千花さん、真面目な方だな」

差し入れとか、した方がいいのだろうか。

妖夢は床磨きに励む千花を残してこっそり屋敷の方へと戻っていった。

「侍女に頼んでおにぎりくらい作ってもらおうか。私も、ちょっとお腹空いたし」

調理場へ向かって歩いていくと、やがて戸の奥から美味しそうな香りが漂ってきた。

ちょうど昼食の時間だから何か作っている最中なのかもしれない。

「失礼します」

律儀に声をかけてから入ると、先ほど会った侍女と目があつた。

「妖夢様、ご昼食ですか？」

「うん。少しお腹が空いてて。何かいただけますか？」

すると侍女は申し訳なさそうな顔をして、

「すみません……今しがた幽々子様の昼食を出したら材料がほとんど底をついてしまつて」

「……いえ、いつものことなのでお気になさらず」

すっかり忘れていた。

白玉楼の主は恐ろしいほどの大食漢だった。

普通の人間の、恐らく一カ月分相当の食糧を、彼女は一人であつさり平らげてしまうのだった。

いったいあの華奢な体のどこに収まるのかまったく分からない。

「……そうだ、お米は残ってますか？」

「米ですか？ んん」と

侍女は棚の奥から米の入った容器を取り出した。

「……一合と半分、つてとこですかね」

「それ、いただけませんか？ 千花さんの差し入れにおにぎりでも持つていつてあげたいのですけど」

「千花さん……ああ、あの誠実そうな使用人さんね。それぐらいならお安い御用よ」

侍女は取り出した米をさつそく研いで釜戸へ入れた。

慎重に火力を調整しながら待つことおよそ三十分程度。

焚き立ての白いご飯が釜戸の中から顔をのぞかせた。

湯気と共に立ち込めるほんのり甘い香りに、妖夢のお腹がくう、と小さく鳴いた。

「さて、あとは握るだけなんだけど……妖夢様、お願いしてもいいかい？」

「へ？ 作ってくれるんじゃないんですか？」

すると侍女は再び申し訳なさそうな顔をしながらちよいちよいと指で調理場の外を指差した。

「幽々子様からお呼び出しでね。すぐに戻るけど、どうせなら焚き立てで出してあげたいだろう？ だから妖夢様が作っておやり」

「え、あいや、でも私お料理なんて」

すると侍女はカツカと笑って、

「おにぎりは料理なんて立派なもんじゃないさ。ただ丸く握るだけなんだから簡単だよ。さて、それじゃ失礼するよ」

「ああ、ち、ちよつと待って……！」

しかし妖夢の願い虚しく、侍女はペコリと頭を下げて調理場を出て行ってしまった。

今更気づいたのだが、この調理場には他の侍女が一人も見当たらなかった。

一人、白いご飯と見つめあう妖夢。

「わ、私だって一人で作れます！ た、たぶん……」

意を決した妖夢は洗い場で手を洗い、棚から調味料を取り出して戦闘態勢を整えた。

頭の中でイメージを浮かべながら、手の調子確かめるかのように握ったり開いたりを繰り返して、

「よ……よしッ！」

妖夢は焚き立てのご飯に一気に手を突っ込んだ。

何度も言っが、焚き立てである。そんなご飯の中に手を突っ込めば当然、

「あちゅ、わ！？　ち、あちッ、うわっちちッ!？」

ご飯が炊きあがって、それからまた三十分が経過して……



#### 第四話 へ 悪戦苦闘の差し入れ へ (後書き)

ちよこちよこつとアクセス数が戻ってきた感じかな？

嬉しいです。

さて、水曜日辺りに出来たらもう一つお話を公開できたらといま考察中です。

こっちはギャグ全開で行きたい、というかギャグが書きたくてw  
相変わらずオリキャラはいますけど、まあ、出来たら、公開しますね。

## 第五話 へ 甘いおにぎり へ

妖夢が道場を去ったのに気づかないまま、千花は一生懸命に床を磨いていた。

あれほどほこりまみれだった道場は、今ではまるで新築のように綺麗になっていた。

床は磨き立てで光り輝いているし、部屋にたまっていたほこりはすべて拭き取った。

後は、と千花は閉め切っていた戸を全開にした。

「うわあ……」

屋敷側の戸を開くと、優雅な庭園が広がっていた。

石と木々だけで表現する枯山水や、鹿威しの音が響く広大な池。それはとても幻想的で、美しかった。

とても死に満ち溢れた世界の光景とは思えない。

ある種の楽園、もしくは天国なのではないだろうか。

「もしかして、僕死んでたりして。はは……まさかね」

半ば笑えない独り言をつぶやきつつ、今度は反対側の戸を開け放った。

そして目の前の広がる光景に軽く目を見開いた。

「へえ、弓道場か」

そこには道場の半分ほどの広さの弓道場があった。

使い古された弓の的、弓道場の脇には長弓と矢の束が壁に掛けてある。

妖夢の祖父は剣の師匠だけでなく、一人の武人だったのだろうか。休憩がてら足を運んでみると、凜とした風が千花を通り過ぎていく。戸を開け放っているせいか、心地よい風がするりと抜けていく。軽く深呼吸してみると、何とも言えない冷たい空気が体中を巡る。……何となく身体に悪いような気もしたが。

「これ、少しぐらい借りてもいいよな」

千花は掛けてあった長弓と矢を一本借りて、目の前の的に向かって構えた。

グツ、と弓を握りしめ矢尻を掴む手をスウッと軽く引いて止める。そして目標の中心点だけに意識を集中させ息を吸い込む、

「ッ！」

息を吐くのと同時に矢尻を放す。

まっすぐ放たれた矢は寸分の狂いもなく赤い中心点に命中した。スカン！ という小気味のいい音が道場の中を響いて消えていった。

「……何だか弓道って落ち着く。この張りつめた緊張感がいいんだよな」

弓を片づけ道場に戻ると、戸口に妖夢の姿が見えた。手には小さな包みを抱えていた。

「あれ、妖夢さん。……それは？」

千花が何気なく訊ねると、何故か妖夢は顔を赤くしながら

「さ、差し入れです。道場の掃除、頑張っているようでしたから作

「つたんです」

ずい、と手にしていた包みを差し出した。

千花が受け取り開けてみると、そこには奇妙な白い塊が数個並んでいた。

「…………おにぎり？」

「そ、そうですね！　って、今の微妙な間は何ですか！？」

「いや、こんな歪いびつな形のおにぎりは初めてで……」

苦笑交じりに千花は答えた。

包みの中のおにぎりは、三角と丸のちょうど間のような、何とも言い難いでこぼこな形のおにぎりだった。

もしこれを坂道で転がしたら、それはそれは奇妙な軌跡を描いて転がっていくのではないだろうか。

しかし、ちょうど小腹が空いていたので助かる。

あの広い道場を一人でピカピカにしたのだ。腹が減るのは当然の道理だ。

「じゃあ、一つもらうよ」

「はい、どうぞ」

おにぎりに手を伸ばして、そのおにぎり意外と温かいことに気が付いた。

もしかして、妖夢が作ってくれたのだろうか。

「いただきます」

ちょっと誇らしげな表情の妖夢に見守られながら、千花は出来たてであろうおにぎりにかぶりつく。

ほんのり温かく、そして噛みしめることで生じる米の甘さが……、  
甘さ……が？

……これ、妙に甘すぎないか？

具のないおにぎりのはずなのに、何でかシャリシャリとした歯ごたえが返ってくるのだが……

「……あれ、どうかしましたか？」

「へ？ あ、いや……なんでもない」

「……？」

一瞬不安そうな顔をした妖夢を見て、千花はそのままおにぎりを咀嚼して一気に飲み込んだ。

不味くはないのだが、何というか……いや、やっぱり不味いかもしれない。

とはいえ、せつかく作ってくれたおにぎりを残すのは人としてどうだろうか。

それはそれで大変申し訳ない気がするが、と考えていると妖夢もそのおにぎりに手を伸ばして、

「では、私も一ついただきますね」

「あ！ ちょ、ちよつとま！」

時既に遅し。

妖夢は何の疑いも持たずにおにぎりを頬張るとすぐさま顔が青ざめていった。

そして気まずそうな顔してこちらを向いた。

「こ、これ、砂糖と塩間違えて……」

「で、でも甘いおにぎりってのも美味しかったよ？」

「……あう、うう」

妖夢がうめき声をもらした。

そ、そこまで不味かっただろうか。別に千花の味覚がおかしいわけではないのだが、それでもうめくほど不味かった覚えはない。

妖夢はそのまま俯いてしまつて、その顔を千花が覗きこもつとして、

「……………よ、妖夢さん？」

「……………つす、ひつく……………」

小さな嗚咽が漏れたかと思うと、妖夢は泣きべそをかきながら叫んだ。

「ご、ごめんなさい！！！」

起きた時に見たあのべつたりとした土下座を千花の目の前で再び披露してくれた。

千花は苦笑しながら妖夢を見つめて、それからぼんと頭を撫でた。

「そ、そこまで謝らなくてもいいつて。僕は気にしてないから」

「でも……………でも、ひつく……………」

それにしても、千花は不謹慎だと思いながら妖夢の泣き顔を見つめていた。

幽々子の前だとあんなに凛々しく振舞っていたのに、その実は見た目通りの少女らしい。

ぼろぼろと涙を流すさまを見ていたら、自然とその銀の髪を優しく撫でていた。

ふと、昔同じような事をしていたような気がした。相手は、誰なのだろうか。

思い出そうとしても、記憶が霞んで思い出せない。

「……ほら、もう泣き止んで」  
「は、はい……っぐす」

まだうつすらと涙を浮かべてはいたが、とりあえず泣き止んだようだ。

千花は残っていたおにぎりを掴んで頼張った。  
別に、そこまで不味いわけじゃない。

「そ、そんな無理して食べなくても！」

「せっかく作ってもらったものだからさ。ちゃんと残さず食べるよ。  
……んぐ、ん。さてと」

千花は包みを丁寧にあたんでから妖夢に手渡すと大きく伸びをして、

「道場の掃除は終わったから、次は部屋の掃除をやるよ。差し入れ、  
ありがとね」

道場の戸を開けて離れにある別室へと歩きだした。  
その後ろ姿を、妖夢はちよつと赤くなつた目で追いかけていた。

「……………」

次は、頑張ろう。

ほんのり頬を朱に染めた妖夢は腕でゴシゴシ目を擦ると、一礼してから道場を静かに立ち去った。

## 第五話 へ 甘いおにぎり へ (後書き)

このネタ、どうかで見たような気がするなあと思ったら、ワンピースのかなり最初の方でこんなおにぎりありましたっけねw  
しかし、尾田っちの絵もずいぶん変わりましたよねえ……

もう最近のワンピースは話が付いていけなくなったから見てないけど；

あ、でもアニメはしっかり見てます。

ついにワンピースに竹内順子さんが来た！

この人は何となくジャンプ系のアニメと相性が良い気がする。



## 第六話 小さな夜会

その夜、屋敷で豪華な夕食を振るまってもらった千花は、道場の離れの一室でごろんと横になっていた。

夜も更け、屋敷はシンと静まりかえっている。

いくら侍女の霊でも寝るときは寝るらしい。

千花もしばらくしたら寝ようと布団は敷いてあるのだが、

「……どうも、寝れないな」

何となく目が冴えてしまつてなかなか寝付けなかった。

かと言つて、勝手に屋敷を歩くのも悪い気がする。

しかし部屋でボーっとしていても眠気は全然やつてこない。

「ちょっとだけ夜風に当たつてくるか」

弓道場辺りでのんびりしていればそのうち眠気が訪れるだろう。

そう思つて千花は自室を出て弓道場へと向かった。

道場へと続く廊下を歩いていると、屋敷の縁側に人影を見つけた。

「あれは……」

人影が月明かりに照らされてその姿を露にする。

この屋敷の主の、幽々子だった。

寝巻姿の彼女は縁側に腰掛けながら、首を少し傾げて夜空を見上げていた。

月光に照らされた横顔は、先刻見ていたあの少女とは思えないほど大人びていて美しかった。

そんな姿を見たせいか、千花の胸の鼓動が少し早くなつて思わず目

を反らした。

……その、あまり女性を凝視するのはよくない気がしたからだ。気を取り直して弓道場へ向かうと、やがて冷たい空気が千花を包んだ。

スツ、とゆつくりと胸の鼓動が落ち着いていくのが分かる。

千花は弓と矢の束を抱えて適度な位置で弓を構えた。

的は用意せず、砂でできた山に向かって適当な場所に狙いを定めた。もちろん、的を用意しないのは大きな音を立てないためだ。

自分と幽々子以外の人は全員眠っているのだ。変な物音を立てて起こしてしまつたら申し訳ない。

「……ハッ！」

息を吐くのと同時に矢を射る。

砂山にザツ、と刺さるだけで味気ないが、それでも多少の気分転換にはなった。

それからしばらく千花は無言で矢を放っていた。

手元の矢が切れたので砂山に取りに行こうとした時、

「ふふふ。こんな夜更けに弓の練習？」

「……ッ？」

振り返ると、いつの間にか幽々子が戸口に腰掛けていた。

扇子で口元を隠しながら、ニコニコと微笑んでいた。

「ゆ、幽々子様……」

「あら、貴方まで様づけなの？ それはちょっと残念ねえ」

「え、えつと……じゃあ、幽々子さん？」

「んゝ、もう一声」

「ゆ、幽々……子」

「なあに？」

満面の笑みで答えられて、千花はどきまぎしながら唾を飲んだ。もしかして、さっき見ていたことに気づかれたのだろうか。どう弁明しようかと考えていると幽々子の方から口を開いた。

「貴方も、眠れないのでしょうか？　だったら少し一緒に居てもいいかしら？」

「あなたも、って、幽々子も眠れないんですか？」

「あ、敬語もダメね」

「注文が多いなあ……」

そして、二人して小さく笑った。

「ちょっと食べ過ぎちゃったのかしら？　ゼーぜん眠れなくて困ってたところよ」

「僕もなかなか寝れなくて。だから軽く身体を動かそうかと思って弓道場に」

「弓のお手前、見せてくれる？」

「そんな、見せるほど上手くは」

「いいじゃない。ほら、的なら私が持つてきてあげるから」

「ああいや、そこまでしなくても」

千花の制止も聞かず、幽々子はゆったりとした足取りで丸い大きな的を持ち上げようとして、

「わ、はわわわ……」

「あ、危ない！」

的の重さに耐えられず倒れそうになった幽々子の下へ千花は一気に

駈け出した。

そして、千花はちょうど幽々子の後ろから支えるような形で抱きかえた。

「あらあら、失敗しちゃった」

「あ、危ないじゃないか。これ意外と重いんだよ？」

「そうみたいねえ……でも、今は楽よ？」

「今は……ッ!？」

そして千花は今の状態を思い出して慌てて幽々子から飛び退いた。

「ご、ごごごゴメンなさい！ いや、あの、悪気があってやったわけじゃ、あの……!」

「あら、貴方が謝ることなんてないわよ。むしろ私が貴方に御礼を言わなきゃ。ありがと」

「ど、どういたしまして……」

「……もうちょっとだけ、あのままが良かったかな」

「え？ 今何か言った？」

「ふふふ、なんでもないわ。さ、貴方の弓のお手前、披露していただけかしら？」

幽々子が落とした的を砂山の上に固定して、千花は所定の位置まで下がって弓を構えた。

……幽々子に見られているせいか、少し、ほんの少しだけ緊張していた。

千花は一度深呼吸をして心を落ち着かせると、弦を引き絞って狙いを定めた。

的の、赤い中心点だけを見据えて、

「……ッ!」

まっすぐに矢を放つ。

加速した矢はそのままの勢いで赤い中心点に命中した。  
我ながら、よくまあ外さないものだと感じる。

すると、後ろからパチパチと小さな拍手が聞こえてきた。

「すごいじゃない！ 百発百中ね」

「いや、まだ一発しか撃ってないけど……」

ふと、千花はあることを思いついて的を複数用意して並べてみた。  
そして矢の束を自分の傍へと置いておく。

連射、というほど早くはないが、連続して撃ってみたらどうなのだろう、と小さな好奇心が生まれた。

幽々子の方を振り返ってみると、瞳を輝かせながらこちらを見ていた。

……ちょっと恥ずかしい。

「試しに、五つの的を一気に射ってみるよ。当たるかどうかは分からないけど……」

「じゃあ、何か賭けでもしましょうか？」

「賭け、って？」

幽々子は悪戯っぽい笑みを浮かべたまま言った。

「そうねえ……もし、全部命中したら」

「命中したら？」

「私と、デートしましょうか」

「デート……って、で、ででデート!？」

ええ、ただし、と幽々子が付け加える。

「もしも一発でも外したら、遠い、とおゝい里までお菓子を買いに行ってもらうわよ。さ、これで如何かしら？」

「……が、頑張ります」

「ふふ、頑張って」

烈火の如く全身を火照らせながら、千花は振り返つて的を見据えた。的は五つ。全てに命中させれば幽々子とで、でデート。  
一発でも外したら、どこか遠い里までお菓子を買いに行かされるらしい。

「……外したら大変だな」

これは絶対に当てなくては。千花はもう一度大きく深呼吸して息を整える。

的を見据えると、不思議と心が静まった。  
スウ、と小さく息を吸って、

「ッ！」

短くりズムを取りながら吐く。矢は赤い中心点に難なく命中。

これでまず一本目はクリアだ。

さて、と別の矢を番えようとして、

「あと四つよ。頑張って」

緊張感とは無縁のゆるゝい声に応援され、思わず矢を落としかけた。  
危ない危ない。

「……ッ！……ッ！」

気を取り直して二発目、三発目と難なく命中させる。  
残りはあと二つ。

ここまで当てていると不思議と外す気がなくなるな。

……つと、意識を反らしちゃダメだ。次いで四つ目の的を、

「……ハッ！」

スカン、と小気味よく音が響く。

これでリーチだ。

ふと、幽々子が気になって振り返ってみると、相変わらずニコニコしながら千花を見つめていた。

この人、いつも笑っているような気がするんだけど、とそこまで考えて首を振った。

だから余計なこと考えてる場合じゃない。

あと一発で幽々子とデート……って、違う違う。いや、違わないけど。

千花は最後の的を見据えて息を吸う。

絶対に、当てて見せる。

そして矢尻を離そうとした瞬間、

「あ、そうそう。もちろんデートには妖夢も一緒よ」

「へ？ ……ッあ、しまった!？」

意識が反れた瞬間、矢尻を掴む力が緩んでしまい矢が放たれてしまった。

もう手遅れだ。

すると矢は的から少し右にずれた軌跡を描き、そして突然クンツ、と急に軌道を修正して中心点を貫いた。

小気味いい音が再び響くと同時に、二人の間に沈黙が走った。

千花も、笑みっぱなしだった幽々子ですら、その光景にポカンと口をあけて呆然としていた。

「……あ、あら。すごいねえ貴方<sup>ちから</sup>つて。それが、貴方の能力なのかしら？」

「い、いや……僕にも何が何だか分からなくて……」

確かに、今日の前で矢の軌道が変わって的に吸い寄せられるようにして命中した。

風が吹いて軌道が変わったのか。いや、違う。風の力なんかで動いたようには見えなかった。

それは矢自身が意思を持つて的へ向かったというか……

「『狙いを外さない程度の能力』」

「え……？」

幽々子が千花の手にしていた弓を指差しながらこう言った。

「貴方の能力は、さしずめそんなところかしら？」

「狙いを、外さない程度の……」

千花は自分自身に言い聞かせるように復唱した。

違和感はない。むしろ、その能力が自分のものであるような気がして嬉しかった。

「ふわ……はふう。それじゃ、そろそろ眠くなってきたから部屋に戻るわねえ。おやすみい……」

「あ、はい。おやすみなさい……」

幽々子は目を擦りながらふらふらとした足取りで道場を出ていった。



……途中で転んだりしないだろうか、と考えかけて大事なことを思い出した。

「って、デートの話は……」

どうやら、千花はからかわれただけだったらしい。

ちょっと期待した自分にも情けないと落胆しつつ、千花は自室へと戻っていった。

## 第六話 へ 小さな夜会 へ (後書き)

第一章、終了です。

ちよつと短めですけど、最初はこんな感じで。

お気に入り登録、ユーザー登録等、ありがとうございます。

追記

明日、もう一つお話を公開します。

詳しいことは明日そちらで書きますね。

## 第七話 自主鍛錬

それからしばらく、千花は白玉楼の使用人として立派に務めていた。ある時は幽々子に、

「あ、千花さん？ 今週発売の週刊誌買ってきてほしいのだけれど」と言われ近所の本屋へ買いに行き。またある時は幽々子に、

「急に焼きそばパンが食べたくなったのだけれど、ちょっと買ってきてくれない？」

と言われ、結局店が分からず調理場の侍女に頼みこんで作ってもらったり。

「……最近の千花さん、使用人というか完全にお嬢様のパシリなんじゃ」

「そ、そんなことない……と、信じたいけど」

あの笑顔で頼まれると断りきれなくて、と傍にいた侍女の一人に言う。彼女はニヤニヤとやらしい笑みを浮かべた。

「もしかして千花さん、お嬢様にほの字なのかい？」

「ほ、ほの字ってことはないですけど。でも、幽々子様は俺にとつては恩人だし」

「そうかいそうかい。ま、ああ見えて寂しがり屋なところもあるから、千花さんが守っておやりよ」

「だから違うってのに……」

そう言い残して、侍女はどこかへと消えていつてしまった。

千花はため息をついてから、道場の方へと足を運んだ。

白玉楼の隅に位置する、妖夢の祖父、妖忌が建てたという道場。今ではほとんど千花が自由に使っている。

道場の戸を全開にして、隣接する弓道場へと向かう。

「……また妖怪に襲われたらたまらないからな」

千花は壁に掛けていた、弓道の弓とは少し形状の違う弓を取り出した。

それは折り畳み式のやや小型の弓だった。

弦の強度、フレームの安定性などを独自で調整、改良を加えた千花専用の弓。

千花は何となく『<sup>びゃっか</sup>白花』と名付けた。

白玉楼の『白』と、自分の名の『花』を足しただけ、ただそれだけだ。

千花は折り畳まれた『白花』を握りしめたまま所定の位置に着くと、フレームを展開して弦を張った。

そして矢を番えると、眼前の目標に向けて狙いを絞る。

赤い中心点だけを見据えて息を吐いた。

「……ッ！」

カン、と軽い音を響かせて矢が中心点を貫く。

千花は幽々子に命名された『狙いを外さない程度の能力』というものを自分なりに考え、現在修行中だった。

この能力、どうやら自分がそこだと決めた場所に対して絶対にその攻撃が当たるようだ。

そしてこの能力は必然的に投擲系の武器と絶対的な相性を誇る。

例えば、今千花が手にしている弓だ。

あれから何度も練習したが、千花が赤い中心点だけを狙おうとする  
と、やはり寸分の狂いもなく命中する。

そのままもう一度赤い中心点を狙おうとすれば、今しがた中心に刺  
さっていた矢の中心、つまりその赤い中心点をそのまま目がけて命  
中するのだ。

真つ二つに裂かれた矢を見た時は自分でも驚いた。

それと、この能力は千花の意思も強く反映されるらしい。

当てようと意気込めば必ず当たるし、逆に千花自身が狙いたくない  
と思うと本当に当たらなくなる、と言った具合だ。

理解するのに多少の時間を有したが、今ではある程度コントロール  
出来ている。

しかしながら、何ともいい加減な能力だと千花は苦笑した。

「……さて、次は二本まとめて射るか」

自作した弓の先端には、矢が複数番えられるよう少しくぼみを削つ  
て工夫してある。

普通こんな改造をしたところで、矢はでたらめな方向に適当に飛ぶ  
だけだ。

しかし、そこに千花の能力が加われば、

「……せいッ！」

通常より深く弦を振り絞って矢を放つ。

本来、別々の方向へと飛ぶはずの矢は中心点に目がけて軽く湾曲し  
て飛んでいった。

もちろん、二本とものに命中する。

「これで二本撃ちは大丈夫だな。次は三本か……。流石にこれは大

変そうだな」

「あ、千花さん。よろしいですか？」

三本まとめて番えようとしていると、後ろから侍女に呼ばれて振り返った。

「何かお仕事ですか？」

「ええ、今日は幽々子様のご友人方が来客するとのことで、千花さんに使いを頼みたいのですが」

「幽々子様の友人……？ はい、わかりました。じゃあ、近くの商店まで行つて」

「あ、いえ。今回は人里の方まで行つてもらえないでしょうか？」

「人里……？ それつてこの冥界の外の？」

話には聞いたことがある。

冥界を出てしばらく行くと、普通の人間が集い暮らしている小さな里があるんだそうだ。

しかしながら、千花はまだ一度も行つたことが無い。

「……ああ、ご心配なさらずに。妖夢様もお付き合いしてくれるそうですよ」

「そうなんですか。なら安心かな」

妖夢が道案内してくれるなら大丈夫だろう。

侍女がでは、と頭を下げて出ていったのを見送ると、千花は手にしていた弓を折り畳んで背負った。

一応、これは護身用だ。

「それじゃ、支度して妖夢のところにっこうか」

……それにしても、幽々子の友人とはいったいどんな人物なのだろう。  
う。  
後で妖夢に訊いてみようか。

## 第七話 へ 自主鍛錬 へ (後書き)

日本語、大丈夫かなあ……? ;  
能力説明のところ、ちょっと心配です ;

それと、この後もう一つ別のお話を投稿します！  
よかったらそちらもチェックしてくださると嬉しいです。



## 第八話 へ 寄り道と巫女と へ

「ああ、それは紫さんのことですよ」

「紫さん？」

里へと向かう途中、千花は幽々子の友人について妖夢に訊ねた。

「『やくもゆかり八雲紫』。私も詳しく素性を知っている訳ではありませんが、幽々子様の古い友人なんです。時々白玉楼に遊びに来たりするんですよ。と言つても、ほとんど他愛のないおしゃべりをしているだけですけど」

幽々子の古い友人？

千花はその紫という人物に興味を抱いた。

「ふうん……そうなんだ。どんな人なの？」

「うーん、一言で言えば……」

「一言で言えば？」

「……胡散臭い方ですかね」

「胡散臭い？」

それはいったいどういう意味だろうと訊ねると、

「そのまんまな意味なんですけど……掴みどころがないといえますか、私もイマイチ分かりません。会えばすぐに分かると思いますよ」  
「そっか。それはちよつと楽しみ」

そして千花は侍女から手渡された小さなメモを開く。

「……さて、頼まれてたものってのはお酒みたいだ。じゃあ酒屋さんを探せばいいんだね」

「でしたら、あちらになりますね」

妖夢の指差した方向に小さな酒屋が見えた。

店の軒先には酒樽であると思われる大きな茶色い樽がいくつか並んでいた。

千花が店主にメモに書かれた酒を注文すると、店主はちょっと待つてな、と言って奥からやたらデカイ瓶を二本持ち出してきた。

千花でも両手で一本持つのがやっとだ。

こんなにデカイお酒だったのかコレ。

そして千花は勘定を払って店を出た。

「これ、幽々子様も飲むの？ あの人お酒も嗜んでるんだ」

「胃袋同様、底無しですよ。それに紫さんも相当な酒豪ですし……」

「さ、酒臭いおしゃべりになりそうだね」

苦笑混じりに歩いていると、ふと壁に張り付いた張り紙に目を奪われた。

「……縁日？」

「近々、この近くの博麗神社で縁日をやるそうですね。幽々子様も楽しみにしてました」

「博麗神社？」

「ああ……そうでした。千花さんはこの辺りのこと知らないんですかね」

「白玉楼と冥界の地理しか頭にないよ」

「ん……少しお時間もありますし、行ってみますか？」

「え？ でもいいの？ もし幽々子様の友人が来ちゃったら」

「予定の時刻まで多少余裕があるから大丈夫ですよ。それに、千花

さんも、この辺りのこと興味ありませんか？」

「それは……もちろんあるけど」

「なら決まりです。じゃ、行きましようか」

そして千花と妖夢は里の外へと向かって歩き出した。

道沿いに歩いていると、やがて小さな山が見えてきた。

道はそのまま山へと延びており、大きな鳥居と石段が見えてきた。

「ここを上げばすぐですよ」

「よし、それじゃ行ってみようか」

木漏れ日に照らされた石段を一步步上っていると、ちょうど本殿の正面に辿り着いた。

綺麗に正方形に切り取られたような境内はどことなく神聖な空気を感じさせた。

社に続く道の終着点には、小さな賽銭箱が設えられていた。

一言で言うならば、とてもシンプルな神社だった。

「ここが博麗神社……か」

「そうです。自称ですけど、素敵な巫女さんがいるんですよ」

「せっかくだし、お賽銭でも入れていこうかな。お金お金……と」

「あ、千花さんダメですって！」

懷から銅銭を取り出した千花は怪訝そうな表情で妖夢に振り返った。

「……？ お賽銭ぐらい入れたっていいんじゃない」

「ろ、ろくに働かない巫女にはお賽銭は必要ないと、幽々子様が仰つてたんです！ だからダメです！」

「でも、入れないと逆に罰が当たりそうな」

「そうねえ。目の前に素敵なお賽銭箱があったら有り金全部叩きこ

むのが常識よね」

「……遅かった」

千花が声の方へ振り返ってみると、いつの間にか目の前に赤と白の巫女服姿の少女が腕を組んで仁王立ちしていた。

精悍な顔立ちに、頭には大きな赤いリボンが巻いてあった。

少女は無言で千花の前に手をずいと差し伸べると、ちょいちょいと手を招く。

「……えつと？」

「お賽銭よお賽銭。入れないと罰が当たるわよ」

「あ……うん？ わ、わかったよ」

千花は取り出しにかけていた銅銭を少女の手に乗せると、少女は満面の笑みを浮かべた。

「ふふん。毎度あり。今度はもつとお賽銭持ってきていいのよ」

「ちよつと霊夢さん！ いくらなんでも失礼ですよ！」

「そうかしら。神社にお賽銭入れずに帰る方がよっぽど失礼だと思うけど……で、コイツは誰？」

霊夢と呼ばれた巫女は驚き戸惑っている千花を指差した。

指先が千花の鼻先に触れそうなほど近づいた。

「えと、千花って言います。初めまして」

「千花……ね。何だか女の子みたいだな名前ね。私は霊夢<sup>れいむ</sup>。この幻想郷の素敵な巫女、博麗<sup>はくれいれいむ</sup>霊夢よ」

それから霊夢は千花と妖夢を交互に見比べて、

「……それで？　こんな男と一緒にここに来て何の用かしら？」  
「用と言うほどの事ではありません。ただ千花さんにこの辺りの案内をしているだけです」

すると霊夢はなんだ、とつまらなそうに言った。

「それでこんなとこまで来たの。それはそれはご苦労なこと……」  
「ここで縁日をするって張り紙を見て、そしたら妖夢さんがここを案内してくれたんです」

「確かに、もう少ししたら縁日を開く予定だけど……って、ははあ、なるほどなるほど」

すると、何故か霊夢はニヤニヤしながら妖夢の頭をペシペシ叩いた。

「妖夢もついにそういうオトシゴロって訳かあ。バカ真面目な子かと思ってたけど、意外と手が早いのねえ」

「……？　どういう意味ですか？」

「しかもこんなイイ男を捕まえちゃってさ。誤魔化そうたってそうはいかないわよこのこの」

今度は霊夢に肘で小突かれた。

何を考えているんだこの巫女はと妖夢は顔をしかめた。

「……そろそろ行きましょうか、千花さん」

「うん。そうだね。お使いの途中なんだし」

「では、失礼します」

妖夢は一応霊夢に一礼してから鳥居を背に歩きだした。  
千花も真似して軽く会釈してからその後を追いかけた。  
そして残された霊夢は、

「ん？ 私の勘違いか？ まあ、あの妖夢だし……けど」

一瞬鋭く瞳を細め妖夢たちの後ろ姿、いや、正確には千花の後ろ姿を見つめた。

「妙な妖気を感じた気がするんだけど、気のせいかしら……？」

やがて首を振ってその考えを振り払うと、霊夢は鼻歌交じりに社へと戻っていった。

## 第八話 へ 寄り道と巫女と へ (後書き)

アクセス数が少しずつ上がってきました

読んでくれている方々、ありがとうございます。

言い忘れてたんですが、このお話は妖夢の過去のお話ですが、ちゃんと他の東方キャラも出るんでご安心ください。

ああ、そろそろ戦闘シーンが書きたいなあ……w

誰かを無理やりけしかけてみようかしら？w

## 第九話 へ 賢者の酒盛り へ

千花と妖夢が白玉楼へと戻ってくると、屋敷内は何やら騒々しい音であふれていた。

目の前を走り去る侍女の焦燥しきった表情を見て二人に緊張が走る。

「もしかして、寄り道し過ぎた……とか？」

「わわわ……！？　ち、千花さんすぐに幽々子様の下へ急ぎましょう！」

「わ、わかった！」

屋敷の玄関を抜け、廊下を駆け、最奥にある幽々子の自室へと走って向かう二人。

幽々子の部屋に続く廊下まで辿り着くとその足を一度止め、再びゆっくりと歩きだした。

そして、部屋の前まで辿り着くと、

「ゆ、幽々子様！　失礼しま」

戸口に手をかけた瞬間、戸の方から一人でに開いて妖夢は前のめりにつんのめってしまった。

結局耐えきれず、そのままばかりと畳に倒れこんでしまった。

「あらら、妖夢ったらあわてんぼさんねえ。そんなに急いでどうしたの？」

「も、申し訳ございません！　少々道草を食ってしまい、このような時刻に……あれ？」

「どうしたの、妖夢さん？」



顔を上げた妖夢の目には、やんわりと微笑む幽々子の姿しか見受けられなかった。

まだ、紫は来ていないのだろうか。

「幽々子様、その、紫さんはまだ……？」

「ええ、まだよ。ちよつと遅れるってさっき連絡があつたの。そして何だかお腹が空いちやってね」

「……じゃあ、侍女が慌てふためいてたのは？」

「ああ、それはたぶんさっき私がプリンが食べたいって言ったからじゃないかしら？」

「どこまでも、自由奔放な方だな……」

千花は苦笑を浮かべながら頼まれていた酒を取り出した。すると、幽々子はパチンと両手を合わせて笑顔になった。

「あゝ！ そのお酒！ 私大好きなのよ。これで紫が来ても退屈せずにすむわ」

「そ、それはよかった。……では、僕はこれで失礼しまわわわ！？」

退出しようとした千花の袖を突然幽々子が引つ張った。

思わず派手に尻もちをついてしまいそうになったが、寸でのところで踏ん張った。

「せっかくだし、一緒に飲まない？ 紫にも貴方のこと紹介してあげたいし」

「あ、いやあの僕はお酒とか苦手で、あの……だからそんな笑顔で目の前まで来ない……で」

「ゆ、幽々子様ッ！？」

キス一步手前ぐらいまで近づく幽々子に、妖夢が頬を深紅に染めな

がら叫んだ。

「そ、それは流石に、は、破廉恥ですよ!？」

「ん〜？ もしかして、ヤキモチ？」

「違いますッ！」

「……断言されたよ」

そんなこんなで騒いでいると、部屋の奥の空間が突然歪んで小さなすき間が開いた。

そしてその奥から妖艶な姿の少女が現れたかと思うと、部屋の真ん中に堂々と着地した。

「こんにちは、幽々子……って、これはどういう状況かしら？」

「あら、紫ったら遅いわよ。もう待ちくたびれてお酒飲んじやうところだったのよ？」

「この人が、八雲紫？」

目の前で千花を見降ろす少女は、その姿を見るなり紫紺の瞳をやや細めた。

「……こちらは？」

「うちの新しい使用人さんよ。千花さんっていうの」

「……………」

紫紺の瞳になめられ、千花は全身を硬直させながらたどたどしい口調で言った。

「は、初めまして。夕風、千花と申します」

「……そう。八雲紫<sup>やくもゆかり</sup>よ。紫で構わないわ」

千花は紫の姿をと見つめた。

名と同じく紫紺のローブに、艶やかな金の髪。

一見妖艶な雰囲気なのだが、妖夢の言ったとおりどこか信用ならないような空気が漂っていた。

これを胡散臭いと言うのなら、恐らく間違いはない。

ただ、何故か紫は突き刺さるような鋭い視線で千花を睨みつけているような気がした。

「じゃ、じゃあ僕は失礼します！」

「わ、私も失礼します！ ぐ、ごゆつくり！」

千花と妖夢は脱兎の如く部屋を出ていくと、一目散に走り去ってしまった。

「ふふふ、千花さんは恥ずかしがり屋なのねえ」

「……………」

「あら、貴方がだんまりなんて珍しいわね。どうかした？」

「……………いえ。ただちよつと、変わった人だなあって思ってたね」

「そうでしょ。狼のお耳に尻尾まであるのよ。可愛いわよねえ」

「狼……………か」

紫は小さく、唱えるようにつぶやいた。

そのつぶやきに幽々子は気づいたのか気づかなかったのか、用意した杯に透き通った清酒を注いだ。

## 第九話 へ 賢者の酒盛り へ (後書き)

酒盛りとか言って全然酒盛りしてねえ……w

そういえば、前作の空想夢ってけっこう読んでくれてる人がいるみたいで嬉しいです。

俺もあのお話はけっこう気に入って時々自分でも読んでるんですが、でも、自分のお話を改めて読むってのは、ちょっとくすぐったい気分になりますね。

海鳴譚の方はまだ一話しか更新してないけど、また水曜日に更新したら読んでみてくださいね。

## 第十話 へ スキャンダル? へ

「……何とか間に合ってよかったね妖夢さん」

道場で仰向けに転がりながら千花がつぶやいた。  
妖夢も同様にひっくり返りながら、それに答えた。

「つ、次は気を付けましょう……はあ、緊張した」

背と腰の刀を降ろすと、妖夢はうんと背伸びして息を吸った。  
千花は立ち上がると、いつものように道場の戸を開けてから弓道場  
へと向かった。

そして的を用意して矢を番える。

弓を構える千花の後ろ姿を見ながら、妖夢は軽く微笑んだ。

「千花さん、毎日弓の鍛錬しているんですね」

「うん。最低限自分で守れる程度の力をつけておきたいし。それに  
「それに?」

千花が優しく微笑みながら振り向いた。

「いざとなったら、妖夢さんとか幽々子様を守れるようになりたい  
からさ」

「……………」

一瞬、妖夢はその柔らかな眼差しを見つめていた。  
清らかな湖畔のように澄んだ、黒くまっすぐな瞳。  
守れるようになりたいから。

その一言に、何故か妖夢の心がドクン、と強く鼓動した。

妖夢は千花に微笑みかえして、

「……それは頼もしいですね。いつか、私の背中を預けられるくらい強くなつてほしいものです」

「妖夢さんは僕なんかよりも凄く強いもんね。前に剣の稽古に付き合つた時も僕がコテンパンに負けたんだし」

「誰にでも、得意不得意はあるものです。それに、あの時は千花さんが無理して付き合ってくれて」

カシャッ！

突然聞こえた耳慣れない謎の音に、千花と妖夢は顔を合わせた。

「……今の音、何？」

「さあ……？ カメラのシャッターを切るような……って、まさか！？」

音の聞こえた方向に、妖夢は手近な場所に置いてあつた盆をフリスビーの要領で放り投げた。

盆はそのまま弓道場わきに伸びた木々の奥へと吸い込まれていつて、

「あたッ！？」

小さな悲鳴で帰ってきた。

「だ、誰がいるのか！？」

「あやや、これはマズイ……とお！」

木々の隙間から小さな掛け声が聞こえると、何者かの影がバツと飛び出しそのまま空の向こうへと消えていった。

呆然と見上げる千花と、それを悔しそうに睨みつける妖夢。

「今の、何だったんだろう?」

「……不覚を取りました。まさかこの白玉楼に侵入者を許してしまうとは」

「侵入者? けど、何のために……?」

すると妖夢はグツと拳を握りしめ、影が飛んでいったであろう明後日の空を見つめ、

「あの天狗め! ……ぐずぐずしてられません。見つけ出して成敗しなくては!」

「せ、成敗? いやあの、だから妖夢さん……?」

妖夢の瞳が怒りの炎で燃え上がっている。

そこまで気にすることなのだろうかと千花は首を傾げた。

「千花さん、私は少し出かけてきます。すぐに戻りますので、しばしここをお任せします」

「へ? あ、うん。わかった……」

では、と律儀に千花へ一礼すると、妖夢はその場から飛んで白玉楼を飛びだしていった。

その間、千花は呆けたまま見送ることしか出来なかった。そして間もなくして、弓道場に幽々子が顔を出した。

「あら、妖夢は?」

「それが、今しがた飛びだしていつちゃって……」

「……? どういうこと?」

不思議そうな顔をする幽々子に、千花は先刻起こった出来事を事細かく説明した。

すると口元に軽く緩め、やがてクスクスと微笑をもらした。

「それ、いつものことよ。実は天狗の新聞記者さんがいてね。よくここに取材に来るのよ」

「取材？　そういうのって普通許可とかいるんじゃないんですか？」

「彼女の場合、そういうの気にしないから」

「……無許可の取材ってことですか」

「気になるなら追いかけてみたら？　どうせ『妖怪の山』に逃げただけでしょうし」

「妖怪の山……？」

すると幽々子は弓道場から外を指差して、

「冥界の境界を抜けると大きな山が見えるの。そこが妖怪の山。この幻想郷で一番大きな山だからすぐに分かると思うわ」

「そうか……じゃあ、ちょっと様子見てきますよ」

「気をつけてね。それと、千花さん？」

「はい？」

不意に呼び止められ、千花は幽々子に振りむいた。

「敬語、ダメって言ったでしょ？」

「う……すっかり忘れて」

「真面目ねえ。そういうとこ、ちょっと妖夢と似てるわ」

「そ、そうかな。妖夢さんはもつと真面目な気がするけど」

そこで何故か幽々子が眉根を寄せた。



「あらあら、妖夢にまでさん付けなの？」

「そりゃあ命の恩人ですし……って、幽々子はそんなにさん付けとか敬語嫌いなのか？」

そして何故か少し悲しそうな表情をして言った。

「私は、普通に接してほしいもの。お嬢様だとか言われても、全然嬉しくないわ」

「……………」

「あ、ゴメンなさいね。さあさあ、早く妖夢を追いかけてなさいな」  
「……………うん。じゃあ、行ってきます」

白花と矢束を背負うと、千花は幽々子に軽く微笑みかけてから弓道場を出ていった。

## 第十話 へ スキャンダル? へ (後書き)

次回、戦闘回です。

しっかしこう……主人公ってのは落ち着かないですね  
ずっと女主人公ばかり考案してるからなのかな。  
今度公開する予定のオリジナルも、女主人公だしなあw

さて、幽々子と妖夢。貴方ならどっちを選ぶ?

俺だったら……妖夢かな。

いや、決してロリ属性という訳ではないんですが。

## 第十一話 へ 剣と風の輪舞曲 へ

「待ちなさい！」

「うわっちゃあ、もう追いついてきましたよ」

太い木々が乱立する山の斜面を、妖夢は猛烈なスピードで駆け抜けていた。

ある時はその木に飛び乗り、枝から枝へと渡って飛んでいく。

そして、目の前で滑空する黒い影に叫び続けた。

「また勝手にお屋敷に忍び込んで隠し撮りをするなんて、もう許せません！ 天誅を下します！」

「相変わらず堅苦しいコトで。天誅なんて、今どき時代劇の台詞でしか聞きませんよ」

黒い影はそのまま妖夢を後ろにしながら、妖夢のそれを上回る速度で逃げていく。

このままじゃ、埒が明かない。

妖夢は背の刀を素早く抜刀すると、一度姿勢を整え刃を構えた。

「一撃で落とします。人符『現世斬』！」

大きく上段から振り下ろされた切っ先から閃光を纏った斬撃が走る。そのまま光の軌跡を描きながら黒い影に向かって凄まじい速さで伸びていく。

しかし、

「殺気ッ！ ですが！」

影はくるりとその場で回転すると斬撃をあつさを避けてしまった。その反応速度に、妖夢は唇を噛みしめた。

「チッ……！ 背後からの攻撃なのに避けられるなんて！」

「しつこいですねえ。しょうがないからお相手しますよ！」

すると妖夢の目の前の枝に影が降り立った。

木漏れ日とその影を照らしだすと、現れたのは白いシャツの少女だった。

動きやすそうな黒のショートヘア。好奇心に溢れた天真爛漫な瞳。そして背には、鴉のような漆黒の翼が広がっていた。

「しかし、この清く正しい射命丸文に不意打ちとは卑怯ですね。仮にも妖夢さんともあろう武人のすることとは到底思えません」

「許可も無く写真撮影する人のどこが清く正しいんですかッ！」

「真のスクープを求める私の心は、常に明鏡止水の如くですよ！」

「それは微妙に使い方が違います！」

再び刀を払って斬撃を飛ばす。

しかし文は軽く枝を飛んでそれを回避、と同時に腰から鳥の羽を思わせるような団扇を取り出し構えた。

「幻想郷一の速さを誇る私に、そんな軽い攻撃が当たるもんですか。それッ！」

文が団扇を一薙ぎする。

小さな団扇が軽く薙いだだけで激しい暴風が巻き起こり、枝に立っていた妖夢が吹き飛ばされかける。

ギリギリのところまで枝に片手だけでつかまってそれを堪える。

「くッ……っう」

あの団扇さえ、奪えれば。

妖夢は一度刀を木に差して体制の安定を図る。

そしてもう一度相手の姿を睨み据えた。

文は太い木の枝に仁王立ちのような形で構えていた。

余裕の笑みでこちらを見降ろしている。

……嫌な気分だ。

「この風の中では、貴方ご自慢の刀も振るえないでしょう。さ、降参するなら今の内ですよ？」

「誰が降参なんかしますか！」

「じゃあ、次は弾幕を織り交ぜましょうか」

文が一度団扇を構え直して一瞬だけ風が止んだ。

その刹那、妖夢は枝を蹴って文の正面に踊りかかった。

この距離なら、届く！

「はっ ああああああー！」

「……浅はかですねえ。そんな簡単に」

刃が届くよりも先に、文の姿が霞む。

「届くと思いますか！」

そして妖夢の背後を取った文は、握りしめた団扇に力を込めて再び払った。

「疾風『風神少女』っと！」

「あ！ つく、しまった！？」

風と共に大小様々な光弾が妖夢に襲いかかる。  
体勢を崩しながらも妖夢はそれを斬り払い凌ごうとするが、今一步遅かった。

さばき切れなかった一分の弾幕は妖夢を直撃し、そのまま妖夢は地面に叩き落とされてしまった。  
背に重い痛みが走り、肺に溜まっていた空気を吐きだした。

「う、くう……」

「私に負けるとは、まだまだですね。恋に現を抜かしているヒマがあるのならもう少し修行したらどうです？」

「こ、恋……？ 何を言って……？」

「さて、とりあえず決着といきましょうか」

「ぐ……」

文の団扇が妖夢の鼻先に近づけられる。

この距離では、回避しようと思うほうが馬鹿馬鹿しい。  
潔く、妖夢は瞳を閉じた。

「これで、私の勝ちということで」

文が団扇を振り上げる。

そして今まさに振り下ろされようとした瞬間、二人の間に一陣の疾風が薙いだ。

目を開けてみると、文は団扇を持っていた手を抑えながらあらぬ方向を見つめていた。

「……ッ！？ 何者です！？」

そして妖夢は、自分の足元に刺さっていた小さな矢を見つけた。

こんなものいつたい何処から、と視線を彷徨わせ、そして気づいた。

「間一髪、だつたかな」

「ち、千花さん!？」

枝に立つ、一人の少年。

道着のような衣服に、狼の耳と尾を持つ白玉楼の使用人。

そんな彼が、目の前で弓を構えて立っていた。

「ほほう……ヒロインのピンチに颯爽と駆けつけるヒーロー気取りですか。面白いじゃないですか」

「……あの人が、屋敷に忍び込んできた新聞記者って人か」

千花は弓を構えながら文を観察した。

清楚な白シャツに首から下げた小さなカメラ。

それに、よく見れば胸ポケットには手帳のようなものが見える。

千花が文を見つめていると、文はニヤニヤしながらペンを抜いて千花に向けた。

「『突如白玉楼に現れた謎の少年！ 道場で屋敷の護衛と逢引!』」  
「……は？」

突然の言葉に、一瞬言葉を失う千花。

「私は見ましたよ！ この、恋とは無縁どころか、そんな運命の赤い糸なんてご縁までも消し去る右手を持っていそうなこの妖夢さんと！ 貴方が弓道場でいちゃつく現場を！」

「は、はあッ!？」

この素っ頓狂な声は妖夢である。

千花はというと、まったく意味が分からないと言った様子で首を傾げていたが。

「い、いちゃつく!? 私が!? あの方と!? そ、それは大きな誤解です!」

「誤解も二階もありますんって。仲睦まじげに熱うい視線を送り合っていたじゃないですか!」

「だ、だから違いますって!」

「……? よく分かんないけど、そんなことを記事にしているの?」

「そ、そんなコトとはどういう意味ですか!? これは、幻想郷中を震撼させるビッグニュースなんですよ!」

「変な新聞記者さんだな」

「私から見れば、貴方もそうとう変ですけどね」

「……妖夢さん、怪我ない?」

木の根元にもたれ掛かる妖夢の姿に目をやると、妖夢は小さくうなずいて返した。

「僕にはよく分かんないけど、無許可の取材ってのは良くないんじゃない? だからさっきの写真、返してもらいたんだけど」

「ご冗談を。せっかくのスクープ、この私が簡単に手放すと思いませんか?」

「じゃあ、しょうがない」

刹那、千花の弓から数本の矢が一気に放たれ文の足元に突き刺さる。すると文は千花を見上げ、余裕たっぷりの笑みを浮かべた。

「威嚇射撃のおつもりですか? 別にこんなもんじゃ私は驚きもしませんよ」

「なら、これはどうかな」



次いで矢を放つ。

今度は一本だけだったが、その軌道は文へとまっすぐ伸びていく。何の捻りもない攻撃、避けるのもつまらないしあの少年を脅かしてやろうか。

そう思った文はギリギリまで引き付けてその矢を掴んでやろうかと構えた。

矢が胸の前まで近づいたその瞬間手を伸ばし、そして矢がガクンと軌道を下に変えた。

「なッ!？」

虚空を掴む手。

文の行動を読んだかのように矢は落ち、そのまま首から下げていたカメラに直撃した。

レンズが派手な音を立てて割れる。

「な、な、な……!？」

「すごい……!」

がくがくと体を震わせながら、文は木の上の千花を忌々しげに睨みつけた。

「わ、私の大事なスクープが……! もう絶対に許しませんよ!」

激昂した文は落ちていた団扇を手に取り千花に向かって大きく薙いだ。

強風が生み出す弾幕と真空の刃が重なり、その全てが一斉に千花に襲いかかる。

「に、逃げてください千花さん！」

「……ッ、これはマズイかも」

それでも、千花は矢を数本番え正面に向き直る。

目標は、あの弾幕。

「動く目標つてのは初めてだけど……大丈夫だよな」

落ち着いて狙いを定め、そして息を吐く。

放たれた矢は見事な曲線を描き、そして光弾を貫きかき消した。

……しかし、如何せん量が多すぎた。

数本番えるので精一杯の千花には、とてもじゃないが全ては対応しきれない。

「そのまま消し炭になりなさい！」

もう、ダメかと思ったその時、

スコシ、チカラヲカシテヤロウカ。

「ッッ!？」

目の前で、文の放った弾幕が全て一瞬の内にかき消えた。

その衝撃で生じた白煙に包まれ、千花の姿が消える。

……そして、

「……………」

「あ……………」

千花の双眸が、文を舐めた。

一瞬で、千花の姿が豹変していた。

それは妖夢が初めて出会った時と同じ、蒼の髪、そして蒼の瞳。千花は無言で文を見下ろしていた。

その表情に特別な色は無く、ただ、見下ろしているだけだった。

それだけなのに、文も、妖夢も背筋がスツと冷えていくのを感じた。

「あ、蒼くなっただけじゃないですか！？ そんなこけおどしが私に通じると思ってるんですか！ 疾風『風神少女』！」

再び襲いかかる弾幕と暴風。

すると千花は弓を下に構え、矢を番えず弦だけをつまみ、

「……『<sup>な</sup>鳴<sup>る</sup>キ弦』」

ピン、と小さく弾いた。

三味線の弦をゆっくりと弾くような、とても無機質で小さな音だった。

たったのそれだけ。

千花が弓の弦を弾いただけで、目の前の弾幕や風が全て一瞬の内に消え失せた。

それはあまりにも呆気なく、そして異様な光景だった。

「そ、そんな……！？ 私の切り札ですよコレ！？ それなのに、弓の弦を弾いただけって……」

これを目の当たりにして、ショックを受けない人物など存在するのだろうか。

千花は弓を折り畳んで枝を降りると、再び文をその蒼の双眸で見据えた。

「ひ……ッ」

「もう決着はついた……それでもまだ闘うって言つのなら、相手をするけど」

文は顔を恐怖に引きつらせ、大きく後ろに飛んで、

「お、覚えてなさいよ!」

捨て台詞を残し、脱兎の如く逃げ出した。

千花はその姿を途中まで目で追いかけ、そして視線を妖夢に戻した。

「ち、千花さん。その姿は……」

「……あ」

すると、千花の髪の色がだんだんと薄くなっていき、やがていつもの黒髪に戻った。

ぐらりと体が崩れると、その場にへたれ込んでしまった。

「千花さん!」

「あれ、力が急に……だ、大丈夫、妖夢さん?」

「わ、私は大丈夫です。でも、今は……」

「……よくわかんない。頭の中に声が響いてきて、そしたらこうなつてた」

「……………」

千花が優しく微笑んだ。

「さて、そろそろ帰ろう。幽々子様も心配してるよ」

「は、はい……」

ふらふらと立ち上がる千花の背を見ながら妖夢も立ち上がる。

この人、本当に何者なのだろうか。

体についた埃や枯れ葉などを払うと、妖夢はその背中を追いかけて走りだした。

## 第十一話 へ 剣と風の輪舞曲 へ (後書き)

関係無いですけど、輪舞曲つてきくと輪舞旋風を思い出しますねw  
さて、久々の戦闘回……ですけど、どうも迫力に欠けるな；  
弾幕勝負を文章にするってのは、やはり難しいものです。

いつも読んでくれてる読者さん、そしてお気に入り登録してください  
った方々、ありがとうございます。

感想とか登録とかされると、やっぱり嬉しいです。  
今後の励みになります。

## 第十二話 〈謎の力〉

「あの力は、何だったんだろう……」

妖怪の山から帰った千花は一人、弓道場で弓を構えながら先刻起こった出来事を思い出していた。

突然頭に声が響き、気がついたらとんでもない力を見につけていてあの少女をあつという間に退散させてしまった。

あの声は、何者なのだろうか。

あの時感じた、重くのしかかるような重圧。

ただ、千花はあの声に聞き覚えがあるような気がしていて、

「千花さん」

「……………あ」

背後からの声に気づいて振り向くと、そこには妖夢が立っていた。

普段幽々子や他の侍女たちにも見せる、いつもの凜とした表情のまだ。

「ゴメン、ちょっとボーっとしてて……………何か用？」

「先ほどは、ありがとうございます」

すると妖夢は丁寧な頭を垂れ、千花に礼を述べた。

千花はいやいや、と両手を振って、

「大したことはしてないよ。運が良かっただけさ」

「運……………ですか」

妖夢は納得がいかないという表情を浮かべ、そして懷から小さな長

方形の紙を取り出した。

初めて見る千花はそれをしげしげと見つめ、

「これは？」

と訊ねた。

「一般的にスベルカード術符と呼ばれるものです。私たちが弾幕ごっここと称される遊びや戦闘の時に使うものなんですけど」

「……それが、どうかしたの？」

千花が首を傾げる。妖夢はかまわず話を続けた。

「もしかして、千花さんこれと似たものをお持ちではないですか？」

「いや、そんなもの初めて見るけど……？」

「そうですか……すいません、おかしい事を聞いて。……では、失礼します」

術符を懐に戻すと、妖夢は一礼して弓道場を後にした。

千花はため息をついてから自分の右手を見つめた。

「……そりゃ、気になるよな。僕だって知りたいぐらいなんだし」

そして振り返って弓の稽古に戻る。

赤い中心点を見据え、矢を放つ。

ただ、心の中ではあの声のことが気になって仕方がなかった。

恐らく、自分の記憶に関する重要な事だと思う。

それなのに、思い出そうとすれば頭がそれを拒むかのように激しい頭痛に悩まされる。

……もしかして、思い出してはいけないのだろうか。



自分の記憶なのに、思い出してはいけないような記憶なんてあるのだろうか。

「……ッ」

少しだけ、的からずれた位置に矢が当たった。

・  
・  
・

「はぁ……」

妖夢は屋敷の縁側で珍しくため息を吐いた。  
別に疲れた訳ではない。

ただ、何となく千花のことが心の隅で引っかかっていたのだ。

「あの蒼い姿はいつたい何なのだろう。助けてもらったのに、何故か……」

恐かった。

しかし、その言葉は口にせず飲み込む。  
助けてもらったのに失礼だ、というのもある。  
だが、あの姿はやはりおかしい気がする。

「……何か、調べる方法とかないのかな」  
「あら、妖夢？」

振り返ってみると、そこには幽々子が立っていた。  
妖夢は慌てて姿勢を正そうとしたが、幽々子がそれを軽く手で制した。

「そんなに堅くしなくてもいいのに。それで、どうかしたの？」

「いや、えっと……」

「妖夢がこんなところでボーっとしてるなんて珍しいわ。何か悩みごとかしら」

「まあ……そんなところですよ」

「ふうん……？」

幽々子は妖夢の隣に腰掛けると、妖夢の顔を覗きこんで、

「もしかして、千花さんのコト？」

「……はい。先刻、妖怪の山で千花さんに助けてもらったのですが、その、何と言いましようか……」

「……？」

その時の光景を思い出しながら、妖夢はぼつりぼつりと語りだした。

「突然、姿が真っ蒼になって、それでもの凄い力であの天狗を退けてしまったんです。その時の表情が、少し怖くて……」

「確か妖夢があの人を見つけた時も、蒼い姿をしていたって言うってたわね。そんなに凄いの？」

「弾幕と暴風を、弓の弦を鳴らしただけで消し去ってしまいました。あれは、千花さんの妖力か何かなのでしょうか……」

「流石に、私には分からないけど……気になるのなら訊いてみたらいいじゃない」

「そ、それは……ッ」

「千花さんの蒼い姿かあ……私も、ちょっと見てみたいかも。蒼い狼みたいできつと可愛い……」

「……幽々子様？」

何故か、そこで幽々子は言葉を切って普段見せないような、何か思

案しているような表情を作った。  
こんな表情、初めて見た。

「蒼い……狼？　そういえば最近、どこかでこんな話を聞いたような」

「幽々子様？」

「ん、ちよっと待ってて。すぐに思い出すから。ううん、ううん……」

腕を組んで唸っていると、幽々子がパツと顔を上げ手を打った。  
そして、そうよそうよと繰り返しながら、

「思い出した！　ちょうど紫と一緒に話してる時よ。えっと、確か『蒼狼』って言う凄く強い妖怪のお話！」

「蒼狼……？」

「私の部屋に絵巻があるから見てみる？　もしかしたら何か関係があるかも」

「ぜ、是非！　お願いします！」

妖夢は幽々子に深く頭を下げた。

幽々子は、いいから早く行きましょ？　と優しく微笑んで返した。

・  
・  
・

「これよ。少し古いものけど……」

唐草模様の絵巻を広げると、そこにはまるで蛇が走りまわっているようなくにやぐにやとした文字が広がっていた。

妖夢は目を凝らしてそれをしばらく見つめて、

「よ、読めません……」

「はいはい。ちょっと待ってて……と。あら、眼鏡は何処に置いたかしら」

あつたあつたと、机の上に置いてあつた小さな眼鏡をかけると、その難解な文字を読み上げた。

「簡単に言つとね、昔、この幻想郷のどこかに、蒼狼と呼ばれる強い聖獣を信仰する小さな里があつたそうよ。蒼き体躯に、その足は千里をも駆け抜け、牙は山をも砕く。よくある御伽噺なんだけど、実はこの蒼狼は実在するそうよ」

「でも、そんな里なんか聞いたことありませんけど……」

「本当にあるのかしら。どうせなら紫に聞いておけばよかったわね。でも、これって今の話と似てない？」

幽々子が巻物を広げると、その先に狼の耳と尾を持つ人物が描かれた絵を見つけた。

蒼く輝く髪に、蒼の双眸。

そして手には、同じく蒼い色をした太刀を握りしめていた。

妖夢は幽々子を見つめて、

「これ、何処で見つけたんですか？」

「んと……確か、妖忌伯父さまのお部屋よ。ずっと前に私がこっそり忍びこんで借りちゃったの」

「……よく怒られませんでしたね」

「私もまだちっちゃかったから許してくれたんじゃないかしら？  
それはさておき……」

幽々子が巻物を広げようとして、途中でその手を止めてしまった。いや、正確には巻物のその先の記述が切れて無くなっていた。

「残念だけどコレ、ここまでしか書いてないのよ。大まかな伝承とそれからこの絵だけ。ちよつと情報としては足りないわねえ」

「……そうだ、慧音先生ならもしかしたら」

「慧音先生って、里で寺子屋を開いてるあの？」

妖夢は幽々子と向かいあつて姿勢を整えた。

「幽々子様、その、折り入って頼みがあるのですが」

「分かつてるわよ。これ、貸してほしいんですよ。もちろんいいわよ。可愛い妖夢のお願いですもの」

「……ありがとうございます」

幽々子から両手で丁重に受け取ると、妖夢は静かに立ち上がった。

そんなに気になるのなら自分で調べればいい。

里へ行つて、寺子屋でこの巻物の伝承について慧音先生に訊ねてみよう。

「ねえ、妖夢？」

「は、何でしょうか幽々子様」

「千花さんのコト、そんなに気になるの？」

「……失礼だとは思いますが、やはりあの姿は」

「ん、そうじゃなくて」

「……？ どういう意味でしょうか？」

幽々子はからかうようにクスクスと微笑して、

「妖夢がそれだけ必死になるなんて珍しいじゃない？ 何か特別な気持ちでもあるのかなあ……って」

「………そ、そういう意味ではありません！」

「なあんだそうなの。分かったわ。じゃ、気をつけて行ってらっしゃいな」

「は、はい。失礼します」

全く、霊夢といいあの天狗といい、そして幽々子様まで何を言い出すのだろうか。

妖夢は顔が火照るのを感じながら、幽々子の自室を出て自分の部屋へと向かった。

しかし、妖夢は廊下の途中で足を止めて自分の心に問うた。

それならどうして、蒼狼の事など調べようと思うのか。  
別に、千花の事など気に掛ける必要などないのでは、と。

「こ、これは……幽々子様のお安全のため……なんです」

身支度を整え、妖夢は白玉楼の門をくぐった。

まずは寺子屋だ。

妖夢は気を取り直し、里へと向かって歩き出した。

## 第十二話 へ 謎の力 へ (後書き)

書けない病が……；

だ、大丈夫ですッ！ 何とか書き続けます！

### 第十三話 へ 蒼狼伝説 へ

「おや、珍しい客人だな。白玉楼のお庭番がこの寺子屋に何用かな」

知的な微笑を浮かべながら、上白沢かみしらさわけいね慧音は戸口に立つ妖夢に言った。

「幻想郷の歴史を知りつくす貴女に、お訊ねしたいことがあります。蒼狼という聖獣を信仰する里の事を」

「……蒼狼とは、懐かしい話だ」

「やはりご存じんですね」

「もちろん。そしてこれは君にも関係のあるお話だ」

「私……ですか？」

ついてきなさい、と慧音は妖夢を促した。

そして寺子屋の中を歩き、やがて蔵書室と書かれた部屋に辿り着いた。

中は陽の光がほとんど届かないのか、少し埃っぽかった。

棚の本や巻物にも、うっすらと埃が積もっている。あまり使われていないのだろうか。

妖夢が部屋を見まわしていると、慧音は奥から一つの巻物を取り出した。

それは幽々子に見せてもらった物と同じ、唐草色の巻物だった。

「正確には君の祖父、妖忌が関係してるんだ。これをご覧」  
「……………」

広げられた巻物は、妖夢が見たそれと似たような難解な文字で書かれていた。

慧音がそれを音読しながら説明する。



「一つずつ説明しようか。まず、この幻想郷の西の果てに秘境とも言えるような小さな里がある。名は忘れてしまったが、ここでは聖なる蒼き狼を聖獣として崇め信仰していたそうだ。しかし、その力は大変凶暴で、定期的に贅を捧げないといけなかったほどらしい。そしてある時、村で蒼狼の力が暴走した」

「……………」

巻物の続きを広げながら慧音が続ける。

「その時に君の祖父、魂魄妖忌が村人に依頼されて蒼狼退治に赴いたのさ。そして見事蒼狼を退治し、蒼狼の魂をある刀に封印したそうだ」

「刀……ですか」

巻物の少し先を広げた時、妖夢の目が微かに見開かれた。

そこに描かれていた太刀は、最初に千花が振るっていたあの蒼き太刀だった。

「封印された蒼狼はその後特に暴走することもなく、刀は里の奥で安置され村は平穏を取り戻した……が、この話には少し続きがあつてね」

「続き、ですか？」

巻物を収めると、今度は比較的新しい巻物を取り出し広げた。

「その刀は蒼狼の妖気や神力といったものが宿っていてな。度々他の妖怪に狙われていたそうだ。手にすれば一騎当千、森羅万象の理をも断つ……なんて噂も広まっていたそうだ。確かに、聖獣の力が宿った刀ならそれぐらいの能力が備わっていても不思議ではないが」

「……………」

妖怪を一刀の下に伏せたあの一撃はこの刀の力だったのか。でも、それならどうして千花がこの太刀を……というより、

「…………これ、本当に実在するお話なんですか？」

すると慧音は口元で軽い笑みを浮かべて、

「ああ、実在する話だよ。確か……少し待ってくれ」

戸棚の奥から別の巻物を取り出して広げる。

それはこの幻想郷の簡易な地図だった。

地図の中心を指差しながらそのまま西へと動かし、

「ここがちょうどここが今いる里になる。そしてここから西へずつと行くと、今話した蒼狼信仰の里がある……らしい」

「らしいとは？」

「この目で見ただけではないから、私の口からは確かな事は言えないんだ。ただ……あの新聞記者の、何と言ったかな。あの天狗が昔一度だけ調査に行ったと話を聞いたが」

「あの、迷惑極まりない天狗が……ですか」

分かりやすいくらい嫌悪の表情を浮かべると慧音は苦笑して、

「迷惑極まりないのは事実だが、彼女の情報収集能力は侮れないぞ。聞いてみたらどうだ？」

「う、ううん……」

先日戦闘した手前、そんなことを簡単に頼めるわけがない。

とはいえ、ここまで聞くと気になってしょうがない。

「……自力で何とか行けませんか？」

「難しいと思うぞ。君にとっては未開の地だろう？ 何か手土産でも用意して、天狗のご機嫌を伺ったらどうだ？」

「それだけは嫌です！」

「そ、そうか。ううん、しかし他に方法は」

「いえ、けっこうです。……失礼します」

「あ、お、おい！」

妖夢は慧音に簡潔な礼を述べると、一礼してから蔵書室を出て行ってしまった。

残された慧音は頭をかきながらつぶやいた。

「あの子は何で急にこんなことを調べているんだろうな。妖忌の部屋で巻物でも見つけて興味が湧いたとでもいうのか……だが」

あごに手を当て、慧音は眉根を寄せた。

「少し気になるな。あの天狗に依頼して調査でもしてもらおうか…

……」

そして広げた巻物を全て丁寧にとめると、慧音は蔵書室の鍵を閉めた。

第十三話 へ 蒼狼伝説 へ (後書き)

そろそろ恋愛モノなのか怪しくなってきた……；  
さて、明日は週に一度の海鳴譚の更新日だ。

## 第十四話 へ 記憶の手がかり へ

寺子屋から帰ってから、妖夢は自室でため息ばかり吐いていた。

「……ダメだ。おじい様の部屋には地図になりそうなものは一つもなかった。これ以上の手がかりはないのかな」

ふと、机の上に置いた巻物に目を落とす。

これは先刻幽々子から借りたものだ。

もう一度内容を確認したが結果は変わらず、あの蒼狼伝説の伝承が少し残っているだけだ。

破れた先がどこかにあると思い、祖父の部屋や書斎を片っ端から調べたが結局何も出て来なかった。

妖夢は仰向けに倒れると、そのまま軽く瞳を閉じて、

「他に探してないところかあ。あとおじい様に関係する場所っていうと……あ」

一つだけ、あった。

「あとは……道場だ。でも、本棚とかあったかな……？ とりあえず行ってみよう」

部屋を出て廊下を渡り道場の正面に立つと、奥から聞き慣れた小気味のいい音が聞こえてきた。

「千花さん、相変わらず鍛錬してるんだ。邪魔しちゃ悪いから、一言断らないと」

失礼します、と言ってから道場に踏み込むと千花が弓道場から顔を覗かせて微笑んだ。

「ああ、妖夢さんか。何か用事？」

「いえ、少し探し物をしてて……。お部屋を見てもいいでしょうか？」

「探し物か。じゃあ僕も手伝うよ」

「そんな、千花さんの手を煩わせるような……」

千花は弓を収めると妖夢の方へとやってきた。

千花はちょうど妖夢より頭一つ分ほど背が高いのだが、妖夢の視線に合わせようと千花はいつも屈んでくれる。

少し気恥ずかしいのだが、それを口にするのもやはり気恥ずかしい。

「遠慮しなくてもいいって。僕は一応この白玉楼の使用人だからね。妖夢さんの手伝いも、もちろん使用人の仕事さ」

「……ありがとうございます。それと、私の事は妖夢で結構ですよ」  
「ん、分かった。じゃあ、僕も千花でいいよ」

そして千花と共に妖夢は道場の奥の個室、今現在は千花の自室として宛がわれている部屋へと向かった。

戸の前に立った瞬間、何故か突然妖夢は頬を染めて、

「そ、そういえば殿方の部屋に入るのって、は、初めてだ……」

「何もそんなに緊張しなくても……」

千花は苦笑しながら部屋の戸を開けた。

何故か一瞬無言になる二人。

「……………」

「……………」

千花は苦笑したまま、妖夢はその部屋の内部をしばし見つめていた。これといった装飾も無し。

隅に置いてある箆笥に、それから小さな文机。

押し入れがあつて窓があつてと、至つて普通の部屋。

「……私の部屋とあまり変わりませんね」

「そもそも、寝るとき以外はほとんど使わないからね。……何か期待してたならゴメン」

「あ、いやそんなコトで謝られても……」

「それで、探し物って？」

「ああ、はい。巻物なんですけど、どこかで見かけませんでしたか？」

「巻物……？」

すると千花は押し入れを開けて何やらごそごそと奥の方へと手を伸ばしていた。

その間、妖夢はぐると部屋を見まわしていた。火照っていた頬に手を当て、

「わ、私ったら何を考えたんだか……」

先刻の謎の行動にため息をついた。

……どうも最近雑念が混じる気がする。

「あ、もしかしてコレ……かな」

千花が押し入れから小さな巻物を取り出して戻ってきた。妖夢が何度も見た唐草色の巻物だった。

「あ！ それかもしれません。よろしいですか？」  
「はい、どうぞ」

千花から巻物を受け取ると、そこには相変わらず歪んだ文字が書き連ねられていた。

「何だこの、あまりにも達筆過ぎて分からない文章は……？」  
「おじい様の文章……だと思います。でも、こんなに下手っぴだっ  
たかなあ」

「で、内容は？」  
「えつとですね……あ」

ふと、千花の顔を見て妖夢は思った。

もしかしたら、これが千花さんの記憶の手がかりになるんじゃない  
だろうか。

「……妖夢？」

「千花さん、記憶を失くしたと前に言っていましたよね」

「それがどうかしたの？」

「もしこれが、自分の記憶の手がかりになるとしたら……どうしま  
すか」

「え……？」

千花の瞳が妖夢を見据える。

ただ、その瞳は何かを恐れているように微かに揺れていた。  
妖夢は意を決して口を開いた。

「実は、この巻物は……」



そして妖夢は千花に、蒼狼伝説の事とそれを信仰する里の事について語りだした。

蒼き聖獣の事、聖獣を信仰している里がある事。

ただ一つ、千花の姿に恐怖して調べ始めたことだけは言わなかった。話を聞き終えると、千花はふうと嘆息して、

「蒼狼伝説……か。すごい話だね」

「気にはなりませんか？ 自分の記憶のこと。余計なお節介かとも思いましたが……」

「お節介なんてとんでもない。むしろ嬉しいよ。僕のこと気にかけてくれてさ」

千花はフツと表情を和らげ微笑した。

凜と澄んだ、とても優しい瞳だった。

その瞳に見つめられていると、胸の端っこがむず痒い気がする。妖夢は頬を染めながらはにかんだ。

「で、でも正確な場所が分からないんです。慧音先生はあの天狗なら詳しい場所が分かるとは言ってるんですけど」

「前に戦ってるから頼みづらいね。……じゃあ、僕たちだけで行くか？」

「で、でしたら早速準備を」

「あらあら、二人してデートの相談かしら？」

『ゆ、幽々子様！？』

いつの間に現れたのか、二人の後ろで幽々子が立っていた。夕日を背にしているせいか表情が影で少し見えない。

「だったら私も混ぜてほしいなあ……ダメ？」

「で、ででデートの計画なんてしてませんよ！ こ、これは千花

さんの記憶の……」

「そんなことより、もう夕食の時間よ。早くいらつしやいな」

そう言つて、幽々子はあるという間に部屋を出て行つてしまった。

……それだけを言うためにここまで来たのだろうか。

そして妖夢は、思いつき忘れていた主の存在を思い出して、

「……これじゃあ、里まで行くのは難しいかもしれません」

「仕方ないさ。幽々子様を守るのが、僕たちの仕事だろ？」

「で、ですが……その、すみません」

すると、妖夢の頭にポン、と千花の手のひらが乗つくと優しく撫ぜた。

猫でも撫でるような手つきだったが、その手はとても暖かかった。

「気にしなくていいよ。そういう話を聞けただけでも嬉しかったし。ありがとう、妖夢」

「……………はい」

妖夢は恥ずかしくなつて、ちゃんと一步身を引いて一礼してから逃げるようにして部屋を出て行つた。

何だか全身がカーツとなつているのが、不思議でたまらなかった。

「蒼狼伝説……か」

部屋に残っていた千花は、その伝承が記された巻物をちらと見やつた。

蒼き髪、蒼き太刀。

そして、その先に描かれた巨大な狼の図。  
その姿を見ていると、胸の底が疼く。

「……蒼ノ聖獣、力」

蒼の光を帯びたその瞳は口の端を微かに上げて笑んだ。

第十四話 へ 記憶の手がかり へ (後書き)

少しずつ、妖夢の心境に変化が……？  
お気に入り登録件数20件、ありがとうございます。

ちょっとミスがあって少し遅れました；

第十五話 へ 月下飛行 へ (前書き)

今回、少しグロ注意です。

## 第十五話 〱 月下飛行 〰

薄く輝く月光の下、一人の少女が夜闇を切り裂きながら滑空していた。

真白のシャツに、闇に溶け込んでしまいそうな黒の翼。先刻妖夢と千花と対峙したあの天狗、射命丸文だった。

彼女は時折木のてっぺんに器用に着地しながら、何度も進路を確認しながら再び跳躍。目指しているのは、

「あの名もなき里……ですか。こんな真夜中で迷惑だけど、あの状態で断ったら私も死んじゃいますからねえ……」

今宵、空を飾る月は満月。

彼女はワ―ハクタクという妖怪とのハーフであり、満月の夜になると覚醒して平常時では考えられないほどの能力を得るのである。

慧音が自宅を訪れた時、彼女は最高にハイな気分だあ！とか叫びながら寝起きの文にこの里の調査を命じてきた。

半ば強制、逆らったら恐らく天地をも割るような威力の頭突きが文に襲いかかったであろう。

「しつつかし、ほつ、と。どうしてまた急にあの里の調査なんか。あの里は外界との接触を頑なに拒んで今にまで至るというのに。幻想郷の歴史に何か追記したいことでもあったのでしょうか？」

トントンとテンポよく木々を蹴って奥へと進む。

不思議な事に、真夜中だというのに妖怪の気配がまったく感じられない。

そして奥へと進むごとに木々の姿がどんどん寂れてく。

少し前まで青々とした新緑の森だったというのに、今では目の前全てが葉の一つない枯れ木ばかりとなっていた。  
文は少し眉根を寄せて辺りを見まわした。

「……おかしいですね。そろそろ里の入り口に当たるはずなのですが」

一度、着地しよう。

文はくるりと回転してから地面へと着地する。

トン、と足音が響くと森の闇の中へと吸い込まれて消えていく。

妖怪どころか、人の気配すら感じない。

真夜中でみんな寝ているからか、それとも……

そのまま漆黒の闇の中を歩いていくと、目の前に見覚えのある小さな小屋を見つけた。

里の入り口を見張る監視小屋だ。

この里に入る時には必ずここで断ってからでないと村人から攻撃される。

前に文自身も村人総出で襲われたことがある。

ぱちんこ、弓矢、槍とか刀とか、割と容赦ないもんだから一目散に退散した思い出が……

「あれ？ 変だな……」

小屋には常に明かりが灯っているはずなのに何の明かりもない。

見張りの兵士もいないらしい。

文はくすりと悪い笑みを浮かべて、

「これってばもしかしてスクープの予感？ くふふ、それでは早速取材しましょうか」

閉ざされた木製の門を飛び越え、文は里の中へと入っていく。  
小さな道を抜けると、やがて目の前に小さな家屋が見えてきた。  
見張り小屋同様、明かりは無い。  
そして一歩踏み込んだ瞬間、

「……ッ」

そこに広がる光景に文は思わず一歩後ろに後ずさった。

「な、何ですかコレは……!？」

暗闇に浮かぶボロボロに朽ち果てた家屋。  
そしてそのすぐそばに横たわる、恐らく人間であろう死体。  
以前文が見た里の面影は何処にも無かった。

「こ、コレ、どういうこと!? 私が取材したのって数か月前ですよ? それなのにこの有様は……」

カメラを握りしめながら、一軒一軒家屋を調べて行く。  
手前の家屋は、壁に巨大な穴がぽっかりと出来ていて中の様子がうかがえた。  
その奥には、

「う……」

人の腐乱死体が無残に転がっていた。  
ある者は腕が引きちぎられていて、またある者は首から上が無くなっていた。  
まるで獰猛な獣にでも襲われたような有様だった。



「こつちは……？」

里の中央には里の全員が共同で使う井戸があるのだが、その井戸の縁にも死体が倒れていた。

井戸の奥から異臭がした。

さすがにこの中は、見たくない。

そして他の家屋も同様にボロボロだった。

酷いものは家屋の原形をとどめていないほどに崩れ去っていた。

「な、何ですかコレは！ いったい何が起こったっていうんですか！？」

思わず文は叫んでいた。

すると、背後に気配を感じて文はバツと振り返る。

そこにいたのは、

「……紫さん？」

「あら、貴方もここの調査かしら」

胡散臭そうな衣装に身を包んだ金の髪の少女、八雲紫が自分の式を背後に連れ従えながら立っていた。

九尾の式が紫の傍へ一步步み寄る。

「……紫様。微かに妖気を感じます。里が襲撃されたのはつい最近かと」

「ええ、おそらくそうでしょうね」

次いで九尾の少女の傍から、二回りほど小さな少女が顔を出す。その表情が微かに震えていたが、何とか口を開いた。

「あの建物、牙とか爪でバリバリ！　って壊した感じだったよ。すつごく大きな獣みたいな……」

「ありがとう、<sup>ちえん</sup>橙。怖いのにちゃんと調べてくれたのね」

「……えへへ」

震えていた表情があつという間に緩んだ。

そんな光景を間近で見ても悶絶している少女がいるが、とりあえず無視して、

「紫さん、これ、どういう事なのか知ってるんですか!？」

目の前で微笑む紫に、文が叫んだ。

すると、いつものように余裕たつぷりの笑顔で返してくるかと思っていた紫の表情が険しくなつて、

「……貴方、あまり深入りしない方がいいわ。でないと、死ぬわよ」

物騒な返事が返ってきた。

それは冗談でもなんでもなく、真剣そのものだった。

「真実を追求するのが私の務め。ここまで知った以上、最後まで調査したいんです。だからお願いです。教えてください!」

「……」

紫は険しい表情のまま、しばしあごに手を当てながら思索した。  
やがて小さくうなずくと、くるりと向きを変えた。

「ついてきなさい。面白い物を見せてあげるから」

そのまま式を連れながら里の奥へと歩く紫。

文は早足で追いかけると、やがて開けた場所に辿り着いた。

「な、何ですか……コレ。さっきから死体ばかりですよ」

そこは、かなりの広さのある空間で、恐らく里の祭事か何かで使う広場なのだろう。

だが、そこを飾っていたのは先刻見たものと同じ、いや、少し違う。広場には、いくつもの死体が転がっていた。

ただ、里の内部とは違いヒト以外の死体も転がっていた。妖怪だ。

人の死体と重なるように、いくつもの妖怪の死体が散らばっていた。里で見た人の死体よりも損傷が酷い。

臓物を全てぶちまけた死体。

頭蓋の中身まで散らかした、もはやただの肉塊と化したものまで。

里の死体が可愛いと思えるほど、ここの死体は更に惨殺されていて、文は思わず吐き気がこみ上げてきた。

「……………」

「すごいでしょ。人だろうと妖怪だろうとお構いなしって感じ」

「……血の匂いしきしませんね。何とも汚らわしい所業です」

「……気持ち悪いよう」

二人の式もその光景に口元を覆った。

こんな光景、人だろうと妖怪だろうと見れば皆同じ気持ちになるだろう。

「何が、あつたんですか」

「恐らく、アレの暴走ね。最近静かだったから特に気にも留めなかったのが災いしたわね」

紫が奥に見える小さなほら穴を指差した。

その小さな穴の奥から、氷のように冷たい妖気が漂ってきている。  
……どこかで覚えのあるような感じた。

「あの奥、何があるんですか？」

「真実を追求したいんでしょ？ 自分の瞳で確かめてきたら？」

「……わかりました」

カメラを握りしめたまま、文はほら穴へと歩いていく。

汗でカメラを持つ手が滑りそうになるのをこらえながら、闇の中へと一歩踏み込む。

夜闇よりも暗く、仕方ないので力を使って光球を作り出す。

奥へと進んでいくと、小さな社が見えてきた。

「これは……」

その社は、ちょうど神棚を少し大きくしたような感じのもので、中央の戸は外側から無理やり開けたのかズタズタに引き裂かれていた。その奥に、小さな部屋が見える。

恐る恐る足を踏み入れると、そこには小さな台座と、少女らしき死体が横たわっていた。

他と同様、何かに引き裂かれたかのように崩れ落ちていた。

可憐な着物は深紅の血に染まり、酸素に触れて黒ずんでいた。

「こんな小さな女の子まで……」

「ここに刀が安置されていた、貴方はご存じかしら？」

いつの間にか、紫が文の背後に立っていた。

式は連れていない。

外に待機させているのだろうか。

文は紫の問いに答えた。

「蒼狼伝説の太刀ですよ。……でも、刀なんてどこにもありませんよ」

「ええ。誰かに持ち去られたのでしょうかね」

「……それは、おかしいですよね」

「……………」

紫は黙ったまま文を見つめていた。  
そして文が言った。

「あの太刀は、魂魄妖忌が蒼狼の血で封印したものです。普通の人間や妖怪が握ってもその血が手にした者を拒むはずです。だから、蒼狼の血を引く者でもないかぎり抜くなんてことは……」

「なら、蒼狼の血を引く者が現れた、ということになるわね」

「そんなこと、あるわけ……」

「狼だって生涯孤独で生きるわけじゃないもの。別に不自然じゃないわ」  
「……………」

しかし、紫は軽く歯噛みした。

蒼狼はとてつもなく凶暴で残忍な獣だ。

聖獣などと信仰していたこの里の人間には悪いが、そんな上品な獣ではない。

孤高で、狡猾で、常に血に飢えた存在。

もし、そんな獣が幻想郷中を駆け巡ったら……？  
脳裏に過ぎるだけで虫唾が走る。

「貴方、一つ頼まれてくれない？」

「何でしょうか」

「……もちろん、狼探しに決まっているわ」

紫紺の瞳に、強い決意の光が宿っていた。

## 第十五話 へ 月下飛行 へ (後書き)

今回はちよいとばかりグロいシーンあり。

調子はそこそこといった感じに戻ってきましたよ。

それと、海鳴譚の方も一日一話にしようかなあと考え中。

もう少し調子が戻ったら時間をずらして一日二話でいこうかw

## 第十六話 へ 幽々子の膝枕 へ

千花が白玉楼の使用人となって早一ヶ月。

梅雨を抜けた幻想郷の青空は雲一つなく、太陽が真白に輝き世界を照らしている。

その日の千花は弓道場の影でだらしくひっくり返っていた。

「あ、暑い……暑すぎる……まるで灼熱地獄だ……」

戸を全開にしても、吹き抜ける風がなければ意味がない。

燦々と降り注ぐ陽の光とは裏腹に、風はちつとも吹きやしない。視線の先の風鈴は完全にお飾りとなっていた。

しかし、千花は汗を吹き飛ばしながらもガバツと起き上がって頬を叩いた。

「だ、ダメだ。こんなにぐったりしてちゃ。弓の練習でもして心頭滅却すれば暑さも忘れるって、妖夢も言ってたんだ」

その妖夢はついさっき顔を真っ赤にしてぶっ倒たのだが、そんなことは露知らず、千花は的を用意し弓を構えた。

いつものように赤の中心点を見据えて、見据えて……

「……………」

やがて、眼前の中心点がぐにやりと歪んだ。

次いで今度は視界全てがぐにやりぐにやりと奇妙な世界へと変わっていつて、千花の頭から湯気が出始めた。

……ヤバイ、意識までばやけてきた。



「……………だ、ダメ……………だ」

矢尻を掴む指がするりと解けて、矢は的をかすめて砂山に突き刺さる。

と、同時に千花の目の前の世界の天地が逆転して千花はそのまま後ろに倒れてしまった。

・  
・  
・

真つ白な世界の中、千花の頬に風が吹いてきた。

そよ風にも似たその風は、驚くほどに冷たく、そしてとても優しい風だった。

あまりにも心地よく、このままだと炎天下の中で昼寝をしてしまいそうだった。

千花は揺らぐ意識に喝を入れ、両目をゆっくりと開けた。

そして目の前に、幽々子の桃色の髪と笑顔が映った。

「……………」

「ふふ。おはよう、千花さん」

「……………あ、はい、おはようございます」

幽々子の滑らかな指が千花の額を小突く。

「もう。驚いたわ。弓道場に遊びに来てみたら、千花さん全身から湯気出して倒れてるんですもの。大丈夫？」

「す、すみません……………」

「それで、私の膝枕の御加減はどうかしら？」

「へ？ 膝まく……………ら？」

そこでようやく、千花は今の状況を理解した。

幽々子の顔が真正面、後頭部は適度な硬さの何かが……って、

「わ、わわわわわわッッッッ！？」

千花が慌てて身を起こそうとすると、肩に幽々子の手が伸びて優しく掴んだ。

「ダメよ。まだ顔が赤いもの、もう少し横になってなきゃ」

「そ、それはゆ、幽々子様の、膝の、あのッ、あのッ！」

「あ、いま私のコト様付けしたわね？」

「あう……」

結局幽々子に逆らう訳にもいかず、千花はさっきよりも顔を真っ赤にさせながら横になった。

「……そうやって頭をちよつとだけ上げると、私の膝枕が気に入らないように見えるのだけど？」

あっさりばれた。

千花は恥ずかしさと暑さの両方に挟まれながら幽々子の好意に甘んじた。

何故か、幽々子は嬉しそうに微笑んでいたが。

幽々子の扇子が扇ぐ、何だか良い匂いのする風を頬に受けながら、

千花は恥ずかしさをこまかすために目を瞑った。

しばらくすると、弓道場にも風が吹いてきた。

飾りかと思っていた風鈴の音が響くと、不意に幽々子の扇子を煽ぐ手が止まった。

「ねえ、千花さん？」

「……な、何？」

心音が響いているのではないかと心配しながら、千花は答えた。

「今度、博麗神社で縁日があるのはご存じよね？」

「え、うん。この前妖夢と張り紙を見かけたから」

「よかつたら、千花さんも一緒にどう？」

「僕が……？」

幽々子は千花の顔を覗きこんだままニツコリと微笑んだ。

「たまには貴方も息抜きしなきゃ。毎日お仕事頑張ってくれてるじゃない」

ほとんど幽々子の雑務ばかりだったか。

千花は片目だけ開けて幽々子の顔を見た。

「あそこの巫女さんはケチだけど、お祭りとかやる時はパーツと豪勢になるの。きつととても楽しいわ」

「縁日……か」

縁日は確か、あと一週間後だったか。

しかし千花は少し申し訳なさそうな顔をして、

「……でも、僕は」

「むう。優柔不断な人は嫌われるわよ？」

幽々子が頬を膨らませて千花に言った。

さすがにここまで言われて断るのも失礼か。

千花は幽々子の膝の上で首を縦に振った。

「わかりました。一緒にしますよ」

「ありがとう。ふふ、縁日が楽しみね」

「……はい」

……そろそろ暑さも和らいできたし、立ち上がっても大丈夫だろうか。

「あ、ダメダメ。もう少しこのままゆっくりしてなさいな」

「あうあう……」

また額を突かれた。

……そして、

「うう、完全に入るタイミングを失ってしまった……」

道場の戸の陰で、こっそり待機していた妖夢が小さくつぶやいた。手には冷たく濡らした手拭いなんか握りしめながら。

「幽々子様ったら……ズルイな」

主にこんな気持ちを抱いたのは初めてだった。

仕方なく、妖夢は自分の顔を脱ぎながら屋敷へと歩いていった。

第十六話 へ 幽々子の膝枕 へ (後書き)

幽々子の膝枕とかいいなあ……

膝枕なんて、最後にしてもらったのいつだったかな……

あ、そうだ。

創作キャラの短歌作ろうと思ったの忘れてたっけ。  
出来たらメッセーじしてみようっと。

## 第十七話　〈侍女達の賭け話〉

今、白玉楼の侍女たちの間ではこんな話題で盛り上がっている。

「最近、幽々子様も妖夢様もちよつと様子がヘンだと思わないかい？」

「ああ、それはあの使用人の千花さんのことですよ」

「もしかして、“恋”ってヤツかい？　いやあ、若いねえ」

少なくとも、幽々子は亡霊なので年齢云々は論外な気もするが。

「で、千花さんはどっちを選ぶのかね？」

「さあ……？　でも、よく妖夢様と一緒にいるのを見ますよ」

「二人とも武芸に秀でている方でいらっしゃるから気が合うのかも  
しれませんね」

「でも、それと恋は別問題では？　妖夢様はとても色恋沙汰にご縁  
のあるように見えないのですけど」

その発言は侍女としてどうなのかと。

「そうよねえ……。いつも堅苦しい敬語でお話しますし生真面目な  
お方でいらっしゃいますから、“恋”とは意識していらっしゃらな  
いかも」

「いやいや、稽古の途中でちらりと横目で千花さんを見つめてその  
想いをひっそりと秘めていらっしゃるに違いはないよ。時々うつとり  
したような瞳で見ているじゃないか」

「無意識の恋！　惹かれる二人！　私もそんな恋愛したかったなあ  
……」

「じゃあ、千花さんは妖夢様と結ばれるってこと？」

すると、一人の侍女が首を横に振る。

「いやいや。相手はあの幽々子様だよ？ 前に見ただけけど、千花さんに頼みごとをする時の表情つてすごく優しいのよ。私たちにも笑顔で話してくださるけど、私たちのそれとは少し次元が違うような気がするの」

「幽々子様は上品な雰囲気があるからねえ……。普通の男なら放っておけないでしょうし、千花さんも例外じゃないさ」

「妖夢様も可愛らしいけど、幽々子様には気品がありますし、時折見せるあの儂げな仕草と言ったら……じゅるり」

この侍女、今すぐ解雇すべきでは……

「じゃあ千花さんは幽々子様と結ばれる、と？」

「いやいやいや。妖夢様だと思うわ」

「違うわよ。千花さんが選ぶのはゼツタイ幽々子様！」

「いや、妖夢様よ」

「幽々子様よ」

「妖夢様！」

「幽々子様！」

集いに集った侍女達が廊下のだ真ん中が大はしゃぎ。

ガールズトークとは恐ろしいものだ。

いや、霊体だからゴーストトークが正しいのか。

「おっと、そろそろ仕事に戻らないとね」

「そうそう。お洗濯お洗濯」

「今日のお夕食は何にしましょうか」

「私は昼ドラの続きでも見ようかしら」

侍女達が消えたあと、妖夢は少し顔を俯かせながら廊下を歩いていた。

「……結局、言いそびれちゃったな」

先刻千花の道場へ足を運んだのにはもちろん理由がある。

妖夢はこっそり隠し持っていた縁日のチラシを取り出してため息をついた。

「千花さんも頑張ってるから、一緒に縁日でも行つて気分転換でもしようかと、思ってたのに」

道場には先客がいた。

幽々子だった。

おまけに膝枕なんかしちゃってとても割って入れるような空気ではなかった。

「……って、どうしてそんなコト考えてるんだろ。普通に縁日に行くだけなのに。どのみち、幽々子様と私と、千花さんの三人で行くに決まってるのに」

何を焦っていたのだろうか。

首をブンブン振って無理やり雑念を飛ばすと、ペシペシ自分の頬を叩いた。

「……最近ダメですね。ここは、剣の稽古でもして集中しなければ」

道場は使えないから、また外でやろうか。

今度は水分も用意して、倒れないよう気をつけなければ。



そして妖夢が廊下の突き当たりを曲がろうとして、ドンッ、と何かにぶつかった。

「きゃっ」

「うわっ、と」

突然の衝撃で思わず尻もちをついてしまった。

起き上がるうとする、前から手が差し伸べられて妖夢はその手を取った。

「す、すみません。私の不注意で……」

「いいよ、気にしないで。怪我無かった？」

「へ……？ あ、ち、千花さん！」

差し伸べられた手は千花のものだった。

千花は背に弓と釣竿を背負いながら、いつものように優しく微笑んだ。

「す、すみません！ えと、あの」

「いいって。でも、妖夢がボーっとしてるなんて珍しいね」

「……すみません」

「あれ、今度は妖夢が謝ってばっかだね」

クスリと小さく笑う千花。

自分でも、何故か謝りっぱなしでビクリしていた。

千花は微笑んだまま、手の空いている左手で妖夢の頭を撫でた。

「……………」

「それ、で。僕に何か用かな。さっきから手を握りっぱなしなんだけど……………」

「へ……？ うあわ!？」

慌てて手を引っこめる妖夢、そして、ハッとなって千花を振り返って、

「いや、これはあの、えっと、決して嫌だとか言うわけではなく、あのあの……」

「……？ 何かドローヨーしてる？」

「ち、違います！？」

顔を真っ赤にして力いっぱい否定したが、心の中では違っんじゃないかと思っていた。

「そうだ、侍女さんに頼まれて今から川に魚釣りに行くんだけど、よかつたら妖夢も来る？」

「わ、私は稽古があるから遠慮しておきます。その、すみません」「気にしないでいいって。しかし、今日の妖夢はちょっとヘンだな。ははッ」

じゃあね、と小さく手を振って千花は白玉楼の門をくぐって出て行ってしまった。

呆然とその後ろ姿を見送る妖夢は、自分にだけ聞こえるような声で言った。

「……誰のせいだと、思ってるんですか」

千花の姿が見えなくなると、妖夢はくるりと身を返して屋敷の中へ向かって歩きだした。

第十七話 へ 侍女達の賭け話 へ (後書き)

女の人、特におばさんレベルの人が4、5人集まるとすごい井戸端会議を見せますよね；

俺のバイト先でも、交代時間なのにバックルームで凄い声で世間話してたりするし……w

ヤヴァイ、天子書きたい天子。

## 第十八話 へ 乙女な語らい へ

「……………」

自室に戻った妖夢は一人座禅を組んで瞑想していた。もちろん、先刻胸に湧いた雑念を払うためである。

「……………」

幽々子は、どうして道場で膝枕なんてしてたんだろうか。千花は、幽々子の膝枕の上でいったい何を話していたんだろうか。無にしているはずの心が、知らず知らずの内に余計な事ばかり考えてしまう。

…………… どうして私はこんなことを考えているんだろう。

「…………… ああもう！」

あつという間に心が乱れて、妖夢は姿勢を崩してため息をついた。

「…………… おつかしいなあ。いつもならもっと長く瞑想できるのに」

自分の未熟さのせいだろうか。

まだまだ修行が足りない……………

「妖夢、ちよつといい？」

「幽々子様……………？」

いつの間にか部屋の戸に幽々子が立っていた。

手には何かの包みを抱えている。

「さつき侍女さんからお菓子貰ったの。妖夢も一緒に食べない？」

「あ……はい。いただきます」

幽々子が妖夢の前にちゃんと座ると、菓子の包みを開いて差し出してきた。

ほんのりと甘い香りが漂ってくる。

「良い香りよねえ。マドレーヌって言うらしいわよ」

「甘くて、美味しいです」

口の中に広がる優しい甘み。

ただ、妖夢は少し洋菓子が苦手だったが。

美味しいお菓子の舌鼓を打っている幽々子と、お菓子をちまちまとかじる妖夢。

ほんの少し、二人の間を流れる空気が違っていた。

「……どうかしたの？」

幽々子が妖夢の顔を上目づかいに覗きこみながら言った。

「いえ、その……なんでもありません」

「ホントに？　だったらそんな顔しないでしょ？」

「……………」

妖夢は微かに視線を下げ幽々子から目を反らした。

幽々子は、いつものようにニコニコしているだけだ。

その笑顔が、今は少し嫌だった。

「あの、幽々子様」

「ん？ なぁに？」

妖夢は思い切って口を開いた。

「幽々子様は千花さんのこと、どう思ってるんですか？」

「千花さんのこと？ そうねえ……」

すると幽々子はクスツと笑ってから言った。

「良い人よね。お手伝いもちゃんとやってくれて真面目で」

「そ、そうじゃなくて！」

思わず声を荒げてしまった。

幽々子も目をパチパチさせて妖夢を見つめていた。

「……………あ！ す、すみません……………！」

「いいのよ、気にしないで。でも、妖夢がそうやって感情を露にするのは珍しいわね」

「……………」

「そういう妖夢は、千花さんのことどう思ってるの？」

「へ！？ え、あのわ、私は……………」

「……………ははあ、なるほど。そういうことね」

慌てふためく妖夢を見て、幽々子は悪戯っぽく笑った。

「妖夢は千花さんのこと気になってるのね。妖夢もすっかり一人前の淑女レディってわけか」

「ち、違います！ ただ、その、ずいぶんと親しげでしたから、あの……………！」

「あら、まさか妖夢がヤキモチ焼くなんて。明日は雪でも降るのかしら？」

「い、今は真夏ですよ!？」

「そこは真面目に返すのねえ？ ふふッ」

うつむいたり、顔を紅く染めたりする妖夢を見て幽々子は本当に面白そうに笑った。

こんなに感情豊かに変わる妖夢は初めてだ。

千花の存在が妖夢を変えたのだろうか。

だとしたら、ずいぶんと罪なお方だ。

「いいじゃない、人を好きになるって素敵なコトよ？ そんな素敵なコト、隠すのはもったいないじゃない」

「だ、だから私はそんなじゃなくて……!」

どうやら、妖夢は自分の気持ちをまだ理解してない様子。

“恋”なんてふわふわしてて甘い気持ちは、修行ばかりの妖夢には全然分らないのだろう。

それはそれで、面白けれど。

さつきから幽々子は微笑<sup>わら</sup>いっぱなしだ。

「じゃ、私も正直に言うわね」

「へ……?」

一拍置いてから、幽々子は言った。

「私も、千花さんのことは気に入ってるわよ。もちろん、使用人さんとしても、一人の殿方としても、ね」

「……………」

表情を強ばらせたまま妖夢は黙りこくってしまった。

「妖夢は、千花さんのことをどう思ってるのかしら？」

「……………え、えっと」

耳まで真っ赤にしてうつむいてしまった。

自覚があるのか無いのか、あやふやに迷っているのは妖夢らしい気もしたが。

「そんなに迷つてると、私の方が先に告白しちゃうわよ？ いい？」

「だ、ただダメですッ！」

「あら、どうして？」

「そ、それはそのう…………」

妖夢が返事に困っている間に、幽々子は残っていた菓子を一口で食べ終わるとゆっくりと立ち上がった。

「さて、と。私は縁日の時に着て行く浴衣でも探してこようかな。

妖夢は、千花さんでも迎えに行つてあげたら？」

「う、ご命令とあらば！」

握りしめていた菓子を一気に放り込んで立ち上がると、妖夢は脱兎の如き勢いで部屋を飛び出していった。

「さて、私も浴衣探さなきゃ。あ、そうだ。千花さん用の浴衣も探さなきゃね」

お菓子の包み紙を丁寧にたたんでからくずかごに捨てると、幽々子は鼻歌交じりに部屋を出て行った。



第十八話 へ 乙女な語らい へ (後書き)

どうもアクセス数にムラがあるなあ……；

まあ、仕方ないか。

何故か今日帰ってからブルーな気持ちで困っております。

理由は……謎ですけど。

## 第十九話 へ 博麗縁日 へ

夕暮れの空に、ほんのりと灯る提灯の明かり。

今、人里から少し離れた場所にある博麗神社では縁日の真っ最中だった。

縁日へと訪れた人々は皆、浴衣に身を包んで下駄の音を響かせながら楽しそうに歩いている。

神社の入り口では香ばしい香りを漂わせる屋台や、綿菓子屋台では子供の列が出来上がっていた。

境内では酒の席が設けており、大人たちや、それに混じって一部の妖怪たちも大酒を喰らっていた。

「ほらほら、千花さん早く早く！」

「あ、あんまし強く引つ張らないでよ幽々子。この下駄、けっこう歩きづらくて……」

神社へ続く道ではしゃぐ男女二人。

一人は、桜の花びらを散らした桃色の浴衣姿をしている。

驚色の帯と相まって、なんだか夏なのに春を思わせるような姿だった。

桃色の髪を揺らしながら、少女は純粋な子供のように明るく笑っていた。

「あ、綿菓子あるわよ千花さん！」

「う、うん。けどほら、金魚すくいとかもあるよ？」

「あ！ あっちにはリング飴が！ 早く食べましょーよ！」

「……食べ物しか見えてないや」

苦笑を浮かべる少年は軽く頬をかいた。

こちらは薄い水色の浴衣で、幽々子に比べるとずいぶんと落ち着いた印象。

ただ、下駄にはあまり慣れていない様子でその歩みはややゆっくりとした感じた。

すると、少年の後ろからもう一人少女が現れた。

「幽々子様ったら、大はしゃぎですね」

「そうだね。これは僕たちもちゃんと頑張らないと」

「はい」

白地に、アサガオの絵が描かれた色鮮やかな浴衣。

提灯に照らされた銀の髪は、少女の幼さを隠して神秘的な雰囲気醸し出していた。

千花も、そんな姿の少女を見て微笑みながら、

「何か、今日の妖夢はいつもより大人っぽいな」

素直な感想を述べた。

妖夢の顔がみるうちに真っ赤になっていく。  
ちよつと、目の前のリング飴のような感じた。

「え、えつと……あの、お、お褒めいただき光荣です……」

「妖夢も、何か食べたかったりやりたい物があつたら遠慮なく言つてね」

「い、いえ！ 私たちは幽々子様をしっかりと護衛しなくてはいけないので」

「あとで幽々子様に言っておけば大丈夫だよ。紫さんと上の境内でお酒を飲む約束してるんだってさっき言ってたし」

「で、ですが……」

「せつかくのお祭りだよ？ 楽しまなきゃ損だよ」

「ちよつと二人とも？ 早く行きましようよ？」

いつの間にか、幽々子は列のかなり前まで進んでいた。すると妖夢が慌てて駆け出し、目の前の人混みをかき分け進んでいった。

千花も、それを追って走り出した。

・  
・  
・

上層の本殿前では、大きな卓と酒が用意され、人々が思い思いに語らいながら酒の席を楽しんでいた。

幽々子はそのまま本殿正面の道を通り切って、一番奥の席へと向かった。

ちよつと、紫と霊夢が座っていた。

「遅いじゃないの幽々子ったら。もう勝手に飲み始めてしまつてころだったわ」

「ごめんなさいね。妖夢と千花さんがのんびりしてたから」

「千花？ …… ああ、新しい使用人さんの。ここに来てるんだ？」

「そうよ。一緒に行きましようって私が誘ったんだもの」

「で、その人は何処に？ 姿が見えないじゃない」

「…… あら、何処行っちゃったのかしら」

「幽々子様！」

「なあんだ、ちゃんとついてきてるじゃないの」

妖夢が息を切らしながら幽々子の下へと走ってきた。

千花もそのすぐ後についてきた。

「ゆ、幽々子様、き、急に走らないでくださいよ……」

「危うく見失うところでした……」

「ごめんねえ。私も早くお酒飲みたくなっちゃって」

クスクス微笑する幽々子の後ろで、紫だけは冷たい視線で千花の様子をうかがっていた。

視線に気づいたのか、千花が紫に振り向いた。

「……な、何か？」

「いえ。なかなか優形な殿方だなと思ってね」

「その耳と尻尾さえなければいいオトコなのにね」

「そうかしら？ 千花さんの尻尾って可愛いじゃない」

「そ、その……」

頬をかきながら視線を反らす千花。

こういう時、どう返事したらいいのやら。

「あ、そうだ幽々子様。少し僕もお祭りの方見に行ってもいいでしょうか？」

「ええ、もちろん。でしたら妖夢も連れて行ってあげてちょうだいな」

「わ、私ですか？ でも、幽々子様のお傍にいないと」

「大丈夫よ妖夢。私たちがついてるもの」

「……ちよつと、どうして私だけじと目でにらむのよ」

「ほらほら、遠慮せずに行っただ行っただ」

「わわわ！ ちよつと幽々子様？」

妖夢の背中を押しながら、幽々子はこっそりと耳打ちした。

（千花さんと二人で楽しんできたなら？ せっかく浴衣用意したんだし、妖夢も楽しんだ方がいいわよ？）

（だ、だから私は……あうう）

しかし幽々子の満面の笑顔に負けて、妖夢は頬を紅く染めながらちよんと頷いた。

「じゃあ、ちよつとだけ失礼します。行こつか、妖夢」  
「……し、失礼しますッ」

そんな二人の後ろ姿を見送りながら、幽々子は早速お酒に一口つけた。

「幽々子はいいの？ ホントは幽々子があの人と一緒に行きたいんじゃないの？」

「さ、今日はじゃんじゃん飲みましょ？」

「……あらあら。綺麗にはぐらかされちゃったわね」

空になった幽々子の杯に、紫は新しい清酒を注いだ。

第十九話　〈博麗縁日〉（後書き）

そういえば、そろそろ梅雨も抜けて縁日とかのシーズンですね。  
地震の影響で自粛ムードだったのも束の間、こっちでは花火大会が  
七月の終り頃に行われるようです。

ただ、不思議なことにこの花火大会って、一個も屋台が出ないんで  
すよねえ……

そういえば、気になってる人のためにこっちで書き足しますけど、  
妖夢の半霊は書いてないだけでちゃんとあります。

ただ、特に必要ないから今は描いてないだけです。  
け、決して忘れてたとかそういうんじゃないですよ！w

## 第二十話 へ 妖夢の初デート へ

幽々子の許可を得て、千花と妖夢は境内を背に歩きだした。

二人は境内へと向かう人々をかき分けながら屋台が立ち並ぶ下層へと戻っていく。

「さて、幽々子様のお許しももらえたし何をしようか？」

「え、はい。えっと……」

ふと、妖夢の目の前で若い男女が手を繋ぎながら仲睦まじく歩いていた。

互いの顔を見つめ合いながら、二人並んで神社の奥へと向かっていく。

しばし、妖夢はその姿に見惚れていた。

「……………」

「あれ？　どうかしたの妖夢？」

「ふえ！？　あ、えっと、ボーっとしちゃって……………」

「大丈夫？　……そうだ、ちょっと待ってて」

千花は屋台へと駆けだして、やがて小さなビンを二つ持って帰ってきた。

ビンの中には小さなビー玉が入っていた。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます……………」

差し出されたラムネを両手で丁寧に受け取ると遠慮がちに一口つけた。



慣れない炭酸の刺激にほんの少し体を震わせる。  
でも、冷えたラムネはとても美味しかった。

「それにしても、すごい人だね……迷子にならないように気をつけないと」

「そ、そうですね」

すると、妖夢の前に千花の手が差し伸べられた。

しばらくその行為の意味が分からず、妖夢は千花の顔を見上げながら首を傾げた。

「え、えっと……？」

「手でも繋いだら逸<sup>はぐ</sup>れないでしょ？」

「……ッ！」

千花にとっては何気ない一言だったのだが、妖夢はその一言を耳にただけで一気に顔を紅に染めてしまった。

「や！ あの一！ えと！ そ、その……！？」

「……？ どうかした？」

不思議そうな顔をする千花。

その黒の瞳に見つめられただけで、胸の鼓動が一段と早くなったような気がする。

「……ふ、不束者ですが、よ、よろしくお願いします」

「え？ ああ……うん。でも、そんなに畏まらなくてもいいような

……？」

千花は苦笑しながら、ゆっくりと妖夢の手を取って握った。

ほのかな温もりが妖夢の左手を包みこんでくる。

その温かさが、恥ずかしいような、でも嬉しいような、何だか曖昧な気持ちにさせる。

こんな姿、幽々子には見せられない。

手汗とか、大丈夫だろうか。

もしも、知人に見られてしまったら何と説明すればいいだろうか。私の手、もしかして小さくて握りにくいのではないだろうか。

何故か、頭の中でもいいような事ばかりが浮かんできてしまう。

「……………」

「……あ、もしかして嫌だった？」

千花の表情が微かに曇る。

そんなこと、当然ない。

「い、いえ！ その、こういったことは初めてであの、緊張しちゃって……………」

「ははは。手を握るくらいで大袈裟だな妖夢は」

「そういう千花さんは遠慮無しというか、ずいぶんと手慣れてませんか？」

妖夢が唇を尖らせて言い返す。

「手だけに手慣れてるって？　すごいな、妖夢は冗談も上手いや」「ち、違いますよ！」

「もちろん分かってるって。うん、実は僕にもよく分かんないんだけど、前にもこんな感じで誰かと手を繋いでたような気がしてね。自然、というか、勝手に手が出たんだよ」

「…………失くした記憶、ですか」

「うん。今はもうたいして気にしてないけどさ」  
「手を繋いでいた記憶……」

失くしたはずの記憶なのに、片隅に残っているということは、千花の大事な人なのだろうか。

家族なのか、それとも、恋人……なのだろうか。

「それ、どんな人なんですか？　もしかしてこ、恋人とか？」

「恋人……？　ううん、たぶん違うかな。でも、とても大切な人だったと思うよ」

「……そうですか」

千花と手を繋いだまま屋台の立ち並ぶ道をゆったりと歩いていく。一歩ずつ、この時間を忘れないよう踏みしめる。

左右で屋台の店主であろう掛け声が響いているのに、妖夢は千花の言葉と、自分の言葉しか聞こえないような感じがしていた。

時々千花が屋台を指差して、それに妖夢が答える。たったそれだけ。

「それにしても、ここの縁日ってちょっと変わってるね。ぬいぐるみ売ってる屋台とか初めて見たよ」

「私も初めてです。しゃべるぬいぐるみ……」

ちよつと可愛かったな。

後でこっそり買いに行こうか。

妖夢がそんなことを考えながら歩いていると、目の前で綿菓子を頬張る少年とすれ違った。

「……………」

空を浮かぶ雲のようにふわっふわで、優しい甘さが口の中でとろけて……

「もしかして食べたい？」

「へえ！？ わ、私は子供じゃないんですよ！？ 綿菓子なんかもうとつくに卒業です」

でも、最後に食べたのいつだっただろうか。

祖父と一緒に縁日に行ったのは……もう何百年と前の話だっただろうか。

正直もう覚えていないが、あの味だけはしっかりと覚えてる。

「ほら、妖夢よだれ出てるよ？」

「ッ！？」

慌てて口を隠す、が、修行で鍛えた妖夢がそんなミスを犯すわけなどなく、

「もう！ 脅かさないでくださいよ！？」

「ゴメンゴメン。でも、やっぱり食べたいんでしょう？」

「……………はい」

正直に答えた。

「ん、素直でよろしい。買ってくるからちょっと待っててね」

出来たての綿菓子を一つ、千花が手渡す。

そういえば、今日は千花に二度もご馳走になっている。

……あとでお返ししないと。

「どう？　美味しい？」

「……すごく美味しいです」

「そっか。それじゃあ次は何食べる？　それとも何かやりたい物ある？」

「い、いえ。私はラムネとこの綿菓子で十分嬉しいですから……」

「ホントに？」

「……えっと」

すると、千花が妖夢の頭をぽふっと撫でて微笑んだ。

「……き、金魚すくい、やりたい……です」

「ん、了解。お店は……あっちだね」

千花に手を引かれ再び歩き始める妖夢。

その後ろ姿を見つめながら、妖夢はほんのり頬を染めて微笑していた。

「……幽々子様が一緒じゃなくて、よかったな」

妖夢はこの日初めて、主の不在を喜んだ。

## 第二十話 へ 妖夢の初デート へ (後書き)

もう少しでバイトから正社員(?)にランクアップしそうです。

……よく分かりませんけど；

もしなったら更新時間を変えないとなあ

お気に入り登録、ありがとうございます。

ついでにコメントとかもらえたら嬉しいな

## 第二十一話 へ 宵闇を裂く牙 へ

「縁日、楽しかったわねえ」

「結局幽々子様は紫さんたちとお酒飲んでただけじゃないですか」

「やあねえ。ちゃんとたこ焼きとかとうもろこしも食べたわよう」

「……まあ、いつも通りってことだね」

幽々子と妖夢、それに千花は森の中の細い道を並んで歩いていた。

この奥を抜ければ冥界へと続く境界が見えてくる。

夜も更け、虫が奏でる音色が森を静かに彩る。

「どうだった妖夢？ 縁日はちゃんと楽しめた？」

「は、はい。千花さんのおかげで満喫できました」

「うふふ、そうみたいね。ほっぺに綿菓子ついてるもの」

「へ！？」

「ふふふん。ジョーダンよ」

「もう！ 幽々子様ったら！」

そんな静寂の中ではしゃぐ二人を見ていたら、笑いがこみ上げてきた。

仲の良い二人だ。

白玉楼の中にいるときと今とでは、二人とも表情がまるで違う。

幽々子も妖夢も、心の底から楽しそうに笑っている。

……もしかして幽々子は、いつもこうやって妖夢に笑っていてほしいから、ずっとニコニコと微笑んでいるのではないだろうか。

「さすがは白玉楼の主、なのかな」

今の二人は主と護衛、というよりかは仲の良い姉妹のようにも見え

た。

おっとりで大食漢な姉と、生真面目過ぎる妹、と言ったところだろうか。

不思議な組み合わせだ。

千花がぼんやりと考えていると、いつの間にか二人の姿が森の奥へと消えていた。

「千花さ〜ん。何してるの〜？」

「あ、はい。すぐ行きますよ」

そろそろ森を抜けて境界へ辿り着くだろう。

千花が駆けだそうとしたその時、

「きゃああああ!？」

突然森の奥から幽々子の悲鳴と思われる声が響く。

千花は血相を変えて全速力で走りだすと、目の前で妖夢が倒れていた。

「妖夢!？　しっかりして!？」

「うう……ゆ、幽々子さまは……?」

辺りを見回すが、幽々子の姿は何処にも見当たらなかった。

妖夢の体を起こそうとすると、妖夢は千花の腕を握りしめて言った。

「ゆ、幽々子様を探してください。まだ、遠くに行つては……」

「でも、妖夢は!？」

「私は、大丈夫です。しかし、今は武器がないので追うことが……ッ」

「……わかった。けど、どっちに行つたんだ……?」



「あ、あちらの方へ行くのは見ました。しかし、それ以上は」  
「ありがとう。妖夢。すぐに戻るから待っててよ」

千花は妖夢の指差した方向へ一直線に駆け抜ける。  
弓はないが、今は体術でどうにかするしかない。  
暗い森の中を走っていると、やがて千花は不意に視線を感じ足を止めた。

「……………」

その数、およそ五人程度だろうか。  
四方八方から微かに殺気の混じった視線を感じる。

「……………出てきたらどうですか。隠れてたって気配で分かります」

すると、茂みから音もなく何者かが現れた。

夜闇に溶け込みそんな黒装束で身を固めた者が案の定五名。

千花は軽く拳を握りながら体に緊張を走らせる。

「……………幽々子様は、どこだ」

「……………」

「答える。幽々子様は……………ッ!？」

千花の言葉は黒装束の攻撃に遮られた。

上体を反らし初撃をかわすと、そのまま右足で相手の腹を素早く蹴り上げる。

直撃を受けた黒装束はあっさり悶絶して倒れてしまった。

「……………? 妙な手応えだな」

そして最初の攻撃を合図に他の黒装束も襲いかかってきた。

中には刃物のような武器を握る者もいたが、千花は落ち着いて相手の動きを見切り、掌底や拳打を当てて一人ずつ相手を伏せていく。暗殺者か何かかと思っただが、素人のような無駄な動き、軽すぎる攻撃、とても手練の者とは思えない。

……それに、

「何だろう、いくら打ち込んでも手応えが軽い……？ こいつら人間じゃない。けど、妖怪とも違う……」

気絶させたかと思えば、急に起き上がって襲いかかってくるし、それを倒しても再び容易く起き上がってくる。どう考えても人間ではない。

かと言って妖怪なのかと言えば……これも違う。まるで空虚な人形でも叩いてるような感覚だった。

「くそッ！ 何なんだよこいつ等……！」

気づけば黒装束の人数が倍増している。

いくら相手が軽い攻撃しかしてこないとはいえ、こつも人数が多いとキリがない。

「どけッ、こんの……！」

鬱陶しい。

こんな雑魚ばかりばら撒いて何を考えてやがる。

「……ッ？」

くだらない。

くだらない。

こんなカス、一撃で消し去ればいいんだろうが。

「なんだ……ッ？」

ちまちまやるな。

殺せばいいだろうが。

消しちまえばいいだろうが。

「くッ、頭……がッ!？」

体の内から力が溢れる。

得体の知れない力が、まるで噴火直前の火山のように込み上げてくる。

抑えられない。

髪が蒼く明滅する。

胸の鼓動が速くなる。

瞳が蒼に染まる。

このままじゃ……乗っ取られるッ!？

「く……ぐッ、ツアアアアアアアア!？　ウザったいんだよ  
てめえらあああッ!!」

腰に手を当て、在るはずの無い“太刀”を抜き払う。

蒼く輝くその太刀を、千花は全身全霊を込めて地面に叩きつけたその瞬間、爆音と共に千花の周囲一帯が蒼の閃光に包まれた。黒装束の姿は影も形もなくなった。

「……誰だよ。んな不愉快なコトする奴はよ」

「相変わらず無粋な力ね。蒼の狼」

千花が振り返る。

白く輝く月を背後に、一人の少女が立っていた。  
見るからに胡散臭そうなローブの少女は蒼く染まった千花を見て瞳を細めた。

そこにはまるで、汚らしい物を見るような侮蔑の表情が浮かんでいた。

「ああ？　引きこもりの妖怪が何の用だよ」

「この美しい幻想郷を、貴方のような汚れた野獣に走り回ってほしくないの。だから、死んでくだらない？」

紫の手から光弾がほとばしる。

千花は半眼でそれを見つめ、手にした太刀で難なく両断した。

「……汚れた、か。妖怪はみんな汚ねえもんだと思うがね。特にてめえは胡散臭い上に汚ねえ。いつもスキマから覗くだけの傍観者だろうが」

「黙りなさい。そもそもどうして貴方が生きてるのかしら？　あなたは魂魄妖忌に封印されたでしょうに」

「妖忌……か。久しい名前だな」

忌々しげに小さくつぶやく千花。

瞬間、全身の妖気が膨れ上がる。

「あの老害、もうこの世にいないらしいじゃねえか。まあ、生きてたとしても俺が殺しただろうけどな」

「貴方の目的は何なの。まさか復讐なのかしら？」

「いいや、もっとシンプルな事さ」

二ツと不敵な笑みを浮かべ千花は続けた。

「単純に、俺自身の復活さ。あの老害に封印されてから俺の妖気や力なんかはずいぶん弱くなっちまったからな」

「そうなの。それはつまり、今は弱いよね」

紫が冷たい微笑を浮かべる。

だが千花も同じような笑みを浮かべて返した。

「今は弱い方がいいのさ。てめえらがお遊びで使うような弾幕で死ぬる程度のな」

「……どういう意味かしら」

「素直に答えるわけないだろうが、阿呆」

「まあいいわ。なら容易く死んでちょうだい」

「そうだな。てめえの攻撃なんぞ受けたら“この体”は死んじまうな」

「……………」

光弾を構えていた紫の手が止まる。

言葉の真意を理解した紫は顔をしかめた。

「どうした？ 早く撃てよ？ でないと俺は死なないぜ？」

この自信、肉体を消されてもアイツは生き永らえると言うことが。それに、あの体は……

「大事な友人の想い人、なんだっけな。そんな人を、果たして親友のお前が殺すことができるのかね」

「……外道が」

「もともと道なんぞに縛られる性格はしてないさ」

こいつを撃てば、千花が死ぬ。

そして千花が死んでも、こいつは何らかの方法で再び復活するだろう。

紫は唇を噛んだ。

手持ちの装備に、アイツだけを封印できるような武器はない。

霊夢を呼んでおけばよかったか。

「さすが賢者様。ボケつとしてるヒマがあるんだな」  
「ッ!!」

蒼の太刀が一閃。

刃の先端に深紅の血が滴るが、紫の姿は無い。

「……チツ、仕留めそになったか。まあいい」

そして体の具合を確かめるように、太刀を振ったり体を動かす。

悪くない。

本調子一歩手前つてところだろう。

「ずいぶん長い時間表に出られるようになったな。この体に馴染んできたのか、それともコイツが限界なのか。……前者であることを祈りたいね」

さてと、千花は太刀を光に変えて収めると、森の奥を見つめた。

この先に幽々子とかいう女が寝てるようだ。

とりあえずコイツに意識を預けて、囚われのお姫様を救出する役をくれてやるか。

「ま、せっかく“創って”やったんだ。せいぜい頑張って生きてみ

ろよ。夕風千花君」

そして蒼の聖獣は静かに瞳を閉じた。

## 第二十一話 へ 宵闇を裂く牙 へ (後書き)

大丈夫か……？ 本当には大丈夫かオレ！？w  
この設定に穴がないかとビクビクしてます。

傍観者、と訊くとあるラノベのシームルグさんが出てきます。  
さ、今日は海鳴譚も更新だ。



## 第二十二話 へ 紫の手紙 へ

「紫様、お怪我の方は大丈夫なのですか……？」

真横で自分の式が心配そうな表情を見せる。

紫は傷を手で抑えながら力無く微笑んだ。

「ええ、この程度掠り傷よ。大丈夫だから心配しないでちょうだい」  
「紫様にこのような深手を負わせるとは……許せません！ すぐにも討伐に出向く所存で」

「はいはい。貴方は物騒なコトはしなくていいの」

「しかし……！」

「それより藍、一つ頼みがあるのだけれど、お願いしてもいい？」

「……は、何なりと」

従順な式だ。

とはいえ、もう少し碎けた表情でも見せてくれたら面白いのだけだ。

紫は小さな文机に向かうと小さな便箋を取り出し筆を執った。

簡潔な文章を認めると、紫は丁寧にたたんでから欄に手渡した。

「これを、幽々子に渡してちょうだい。私が直接出向いてもいいのだけれど、この姿を晒して幽々子に余計な心配かけたくないのよ」

「承知しました」

手紙、と言っても内容はそんなに堅苦しいものではない。

ただ報せるべきである情報を簡単に記しただけ。

それでも、幽々子には知ってもらわなければならない。

「最悪、あの子の力を使ってもらわなきゃいけない可能性もあるんだし」

親友の友を殺す手伝い当の本人にさせようなどと、ずいぶんと非道いことをすると自分でも思う。

けど、万が一封印に失敗した時は……

「……紫様、あの蒼狼をどうやって封印するおつもりなのですか？」

「……まず、彼と蒼狼との精神を分離させる。そして蒼狼の精神体を消す、それだけよ。口で言うのは簡単なんだけどね」

上手くいく確証はない。

そもそも、蒼狼と彼自身の精神がどういう構図をしているのかわからない。

常に蒼狼の意識下にあり、いつでもその姿を現すことができるのか。それとも平時は眠っていて、ある時途端に力を爆発させるのか。

昨日の状態を見る限り、恐らく前者だろうか。

蒼狼の精神が眠っていれば、いくらかはやり易いというのに。

「……では、私は白玉楼へと参ります」

「ええ、お願いね」

手負いの紫は藍の尻尾を見送りながらふうとため息をついた。

今の私は、何と情けない姿だろうか。

敵の目の前で思考を巡らせるなど、幻想郷の賢者が聞いて呆れる。避けられない攻撃では、なかったはずなのに。

「……平和ボケかしら。これじゃ、どっかの巫女を笑えないわね」

自嘲するように紫はクスリと微笑を漏らした。

・  
・  
・

縁日が終わり、それから数日したある日。

幽々子は自室でのんびりと小さな本を読んでいた。

「……紫じゃなくて、貴方が来るなんて珍しいわね。何か用？」

背後の気配に気づき、机に向かったままで幽々子は言った。  
すると、九尾の少女が姿を現した。

「紫様は別件で忙しいのでと、この度は私が遣わされました。……  
これを」

手渡されたのは小さな封筒。

幽々子は顔を上げて藍を見やった。

「紫がお手紙なんて珍しいわね。どうかしたの？」

「……私からは特に何も」

「ふうん……」

引き出しから鋏を取り出し、丁寧に封筒の端を切り取ると文面に目を通した。

数分の後、幽々子の表情が微かに曇っていき、やがて笑顔が消えた。

「……紫にしては面白くない冗談ね。これじゃまるで、千花さんが  
恐ろしいバケモノだって言ってるようじゃないの」

「ですが、これは紛れもない事実。どうかこの事を」

「紫は、どうしてるのかしら？」

「……………」

幽々子に言葉を遮られ藍は口を噤んだ。  
その声には、冷やかな怒りが感じられた。

「……すみません。紫様は現在療養中です。ですのでこうして私が参ったのです」

「その怪我、千花さんが関わっているの」

「……彼にやられた傷です」

「……そう」

便箋を閉じ封筒の中にしまつと、幽々子は藍に背を向け再び机に向かってしまった。

「……失礼します」

「……………」

幽々子の背に一礼をすると、藍はフツと姿を消してしまった。

藍が消えてからしばらくして、幽々子はもう一度、紫の手紙に目を通した。

「……何よ。珍しく手紙なんて寄越すから何か面白いことでも書いてあるのかと思ったのに」

彼は、幻想郷を脅かす存在

でも、私が何とかして彼の封印を試みる

もしも。

もしも、それが叶わなかったら、その時は貴方をお願いしたいことがあるの

彼を

微かに肩を震わせながら、小さくつぶやいた。

「私に、彼を殺せ……。そう言ってるのね、紫」

便箋に認められた文章が、ゆっくりと滲んでいった。

## 第二十二話　へ　紫の手紙　く　（後書き）

お気に入り登録件数30件！

そして何故か海鳴譚のお気に入り登録件数もじわじわ伸びてます。  
登録してくださった方々、ありがとうございます。

……正直、今回のお話はちょっと自信がないです；

でも、書きはじめたら最後まで書くのが作者としての務め。  
最後まで全うさせていただきますッ！

## 第二十三話 微かな違和感

「……………ッ」

いつものように、千花は弓道場で弓の練習に励んでいた。

だが、珍しいことに今日は赤い中心点に突き刺さっている矢が一本だけだった。

それ以外の矢は中心点から微妙にずれていたり、あるいは的から外れていたりしていた。

「……………」

縁日のあの日から、千花は自分の胸に謎の違和感を覚えた。

妖夢を抱え、幽々子を追いかけ、そしてあの黒装束姿の奴らとの戦闘。

昨日の記憶は何故かここまでしか記憶になかった。

そして、気がつけば幽々子を背負いながら白玉楼へと戻っていて、妖夢には泣きながら感謝され、幽々子からは熱い抱擁……は、さすがに遠慮したけど。

一番の違和感は、記憶を失ったあの瞬間、内から沸き起こる声だった。

まるで野獣のように残忍で狡猾な声。

以前、妖怪の山で聞いたあの声と同じものだった。

その声が心に響いた途端、千花の意識が揺らぎ、やがて消えて無くなった。

……それなのに、何故か手には妙な感覚が残っている。

「僕、どうしちゃったんだろう。まるで自分の中に知らない自分でもいるような感じだ……」

そんな雑念ばかりで弓を撃っているせいか、さっきからいまいち命中率が悪い。

千花はため息をつきながら的へと歩き矢を回収した。

いくつかは折れてしまっていて使い物にならないため処分した。

こんなに強く弦を引いた覚えはないのに。

「……はあ。あの日からどうも調子が悪いな。無意識の内に力入っちゃってるし」

こういうときは瞑想だ。

そういえば、前に妖夢が教えてくれた。

道場の真ん中で座禅を組んで、心を空っぽにする……だっけか。

見よう見真似で足を組んで瞳を閉じる。

何も見ず、何にも考えず、ただただ静かに呼吸するだけ。

「……………」

だが、どんなに心を無にしようとしても、違和感は拭えない。

千花はあつという間に姿勢を崩して仰向けに寝転んだ。

質素な天井が目映る。

この違和感はどうやってたら拭えるのだろうか。

「……そうだ」

ふと、千花はあることを思い出した。

以前妖夢に教えてもらった蒼狼伝説が伝わる里の事。

千花の記憶の手がかりになるかもしれないと妖夢が教えてくれたのだが、結局調べずじまいで終わってしまったが……



「記憶の手がかりか。もしかしたら、あの声や力と何か関係があるかもしれないな。だけど……」

何故か、記憶を取り戻そうとすると体が拒む。

心のどこかで、それは知ってはいけないとブレーキをかけてくる。

この感覚も相変わらずか、と千花は歯噛みした。

「怖がつてるのか、僕は。過去の記憶を知ったら今の自分が無くなるとでも思い込んでるのかな。……そんなことあるはずもないのに」

動かなければ始まらない。

まずは幽々子に外出許可を貰い、それから以前出会ったあの天狗の女の子に場所を訊いて里へ向かえばいい。

里に着いて、何か記憶の手がかりが見つかればそれでよし。

何も手がかりにならないようなら、ただ単純に気分転換に遠出しただけだと思えばいい。

善は急げだ。

千花は体を起こして道場を出ると、幽々子の自室へ向かって歩き出した。

・  
・  
・

「幽々子様、よろしいでしょうか」

部屋の前まで来ると、千花は戸の前で幽々子を呼び掛けてみた。

いつもなら間延びした返事が返ってきてから戸が開くのだが、今日に限って返事がなかった。

どこか別の部屋にいるのか、それとも昼寝でもしているのだろうか。人の気配はするので中に誰がいるのは間違いないのだが、千花はもう一度声をかけた。

「幽々子様？」

「……………はい、ちょっと待ってて？」

やつと声が聞こえた。

千花は一度身なりを整えてから戸が開くのを待った。  
程なくして幽々子が姿を現す。

何故か、微かに目元が赤くなっているのに気づいた。

「幽々子様、どうかしたんですか？ 目元が何か赤くなってますよ？」

「あ、ああこれ？ ちょっと本を読んでいたら感動しちゃって。さ、どうぞ？」

促されるまま千花は部屋へと入り、中央に敷かれた座布団の上に正座した。

「それで、何か御用かしら？」

鼻をすすりながら幽々子が言った。

そんなに感涙に咽ぶほどの物を読んでいたのだろうか。  
声まで震えている。

「その、実はお願いがあつて……………」

「何かしら。言ってごらんなさいな？」

「少しだけ、外出許可を貰えませんか？ 少し調べ物をしたくて」  
「……………調べ物？」

幽々子の瞳が千花を見つめる。  
適当に誤魔化そうかとも思ったが、かといって隠す理由もない。

千花は正直に話した。

「記憶の手がかりになるかもしれないって、妖夢から聞いたんです。それで気になって、自分だけで調べようかと思ったんです」  
「そう……。記憶を」

何故か幽々子の表情が曇る。

千花のことを心配しているということだろうか。

「大丈夫です。ちゃんと武器は持っていますし、陽が落ちるころには帰ってきますから」

「……ホントに？ ホントにちゃんと帰ってくるの？」  
「え……？」

幽々子の台詞に思わず目を丸くした。

どこか、幽々子の様子がいつもと違うような気がする。

何かあったのだろうかと問いかけようとしたとき、幽々子の方から口を開いた。

「あ……。ご、ゴメンなさい。今のは忘れてちょうだい」

「そ、そうですか……」

「ん。じゃあ、今回は許可するわ。気をつけて行ってらっしゃい」  
「……はい。ありがとうございます」

立ち上がって退出しようとした瞬間、ドン、と背中に強い衝撃。何事かと振り向くと、細い腕がするりと千花の体に伸びていた。突然幽々子が、背中から抱き付いてきた。

「え……。ッ！？ ちょ、幽々子様！？」

ほんのり冷たい感触が背中越しに伝わってくる。  
幽々子の体が、ほんの少し震えていた。

「絶対に帰ってくるのよ。絶対」

「わ、わかりました」

「……よろしい」

それだけ言って幽々子の体が離れていった。  
振り返ってみると、いつもの笑顔に戻っていた。

「じゃあ、行ってきます」

「ええ、行つてらっしゃい」

ひらひらと手を振る幽々子に軽く頭を下げてから、千花は廊下を歩  
きだした。

## 第二十三話 へ 微かな違和感 へ (後書き)

もう少ししたら、またおまけ的なお話を書こうかと思ってます。

内容は今書いている作品とはたいして関係ないんですが、今まで書いた創作キャラ同士を会わせて何かやってもらう……みたいなヤツです。

葉月とか、あてなとかだけを集めておまけトーク的な感じのを予定してます。

……あ、葉月だけばっち確定なんだけどどうしよう……

## 第二十四話 へ 狼の川流れ へ

白玉楼を出た千花は早速妖怪の山へと向かい、あの新聞記者の天狗を探して山道を歩いていた。

高くそびえる木々の枝を注意深く見つめながら先へと進んでいると、やがて目の前に広大な滝が広がった。

「うわあ……。すごいな」

激しい水しぶきが霧となって千花に降り注ぐ。

山道を歩き続けていて汗だくだった千花はちょうどいいと、手近な場所にあつた石の上に腰掛けてのんびりと滝の音に耳を澄ませていた。

轟々と落ちる水の勢いに乗った風が冷たく心地がいい。

いつも堅苦しくしている妖夢にも見せてあげたいなと、こっそり思った。

「けど、あの天狗の新聞記者全然見当たらないな。気配も何もしない……ん？」

気配と視線を感じて言葉を止める。

殺気はないのだが、やたら凝視されてるような気がする。

方向は……と首を回してみると、何故か視線は水の底から感じた。水の中に誰かいるのだろうか。

千花は川面に向かって顔を突っ込んでみた。

滝のすぐそばとあってか流れはかなり速く、魚の姿もあまり見られない。

そして当然ながら、水中には誰の姿も見当たらない。

「っはあ。……おつかしいな。確かに視線を感じただけど……？」

姿を消しているとも言っただろうか。

しかしこうまで巧みに消されていると、千花の能力を以てしても狙うのは不可能だ。

あくまで、可視できる対象でないとこの能力は発揮されないし。

「こういう時、妖夢の言っただあの蒼い目とやらになれば、もしかしたら見えるのかも。っても、そんな物をどうやって使うのかなんて知らないけど」

強く祈れば蒼くなるのだろうか。

試しにやってみようか。

千花はそんな軽い気持ちで念じてみた。

俺に力を。

蒼の瞳を灯せ。

……

「ま、無理だよな……。でも、見つめられっぱなしってのはすごく気になるんだけど……ッ!？」

チクチク刺さる視線が気になって仕方ない。

試しに川面に向かって呼びかけようとした瞬間、突然背後から殺気を感じ前へと跳んで振り向いた。

「な、何だ!？」

目の前にいたのは幅広な太刀を握りしめる白髪の少女だった。

キツ、と鋭い視線で千花を睨みつけ、太刀の切っ先を向けてきて叫

んだ。

「この妖怪の山に無断で侵入するとは不届き千万！ 早々に立ち去りなさい！」

「え？ この山つて入るのに許可がいるの？ え、と……参ったな。そういうことは全く聞いてなくて……」

幽々子も妖夢も、そんなこと一言も言っていなかったような。

「……？ と、とにかく早々に立ち去りなさい！ さもないと、斬ります！」

「へ？ いやいやちょっと待って！？ 第一どこで許可なんか」

「覚悟ッ！」

「うわわわッ！？」

千花に踊りかかる刃を寸でところで回避する。

もう少しで髪がばっさり斬りおとされるところだった。危ない危ない。

「ま、待って！？ 僕は人を探しに來ただけで、うわッ！ と、とにかく剣を収めて！？」

「この山の哨戒が私の任、侵入する不埒な輩は全て敵です！ はああッ！」

少女は千花の言葉など聞く耳持たず、その太刀を軽々振り回して襲いかかってくる。

弓を構えようと背に手を伸ばそうとするが、少女がそれを許さない。猪突猛進に迫る少女を右に左にと地を蹴って回避しながら千花は呻いた。

近距離戦じゃ分が悪すぎる。



一度大きく距離を取って弓で応戦するか、それともこの場合は体術で凌ぐか。

思考を巡らせながら退いていると、右足が冷たいに何かに触れて千花はハッと振り向いた。

マズイ、追いつめられた。

文字通り背水の陣となった千花はもう一度少女へと向き直ろうとして、その少女がいない事に気が付いた。

フツ、と千花の頭上から影が落ちる。

「…………ツ！」

「でええやああああああ!!」

高く飛び上がった少女はまっすぐに太刀を振り下ろしてくる。

千花は悩んだ末、その場で両手を構え真っ向から白刃取りの形で太刀を受け止めた。

「え…………!？」

「ツ、ゴメン！」

「へ? ……きゃあ!？」

そのまま勢いを保ったまま千花は体を捻り、太刀ごと少女を豪快に投げた。

綺麗な放物線を描きながら少女は真っ逆さまに激流へとダイブして派手な水しぶきが上がる。

そしてそこまでやってから千花はしまったと顔をしかめた。滝の麓の激流は想像を絶するほど速い。

仮に彼女が妖怪だったとしても、泳ぐことは困難なはずだ。

「…………ああ、もう! 因果応報というか何と言っか!」

自分が放り投げた少女を助けるべく、千花は一心不乱に激流へと飛び込んだ。

全身に襲いかかる冷たさと激流に己が体が震える。

それでも懸命に水をかき、少女の下へと近づいていく。

……が、おかしい。

一向に前に進まない。

それどころか、自分がむしろ溺れてるような気がするのだが。

……もしかして、

「ぼ、僕泳げないのかぁ!？」

ガバガバと水を飲み込んでしまい、あっという間に体が沈んでいく。本末転倒。少女の姿も、いつの間にか見えなくなっている。

「ぷはッ! も、もう限界……」

ナサケネエヤツダナ……

薄れゆく意識の中、そんな声がした。

以前聞いたような枯渇で野蛮な声ではなく、何とも頼りない我が子を窘めるように、優しいが、どこか呆れているような、そんな声だった。

そして千花は激流へと沈んでいった。

## 第二十四話 へ 狼の川流れ へ (後書き)

……まあ、さすがに本物の狼なら多少は泳げるかと思いますが；  
そして出る予定ないと言ったわりに結局出た椀w

そしてこの次から、話がややこしくなります。  
作者も今後の展開に頭を抱えております……

ああ、もつと感想が欲しい！w  
読者の声が聞きたい！w

## 第二十五話 へ 食い違ふ伝承 へ

「おうい。大丈夫かあ？」

声が、聞こえた。

重い瞼を静かに開けると、目の前に雨合羽を羽織った少女が千花の顔をじっと見つめていた。

何度が瞬きしてから、ゆっくりと体を起こす。

何故か千花は薄暗い洞窟の中にいた。

「ここ……は……？」

「私の家だぞ。怪しいヤツを見張ってたら椀と二人して流されてきたから助けたのさ」

「椀……？」

ちよいちよいと指を指す方向に、先ほど戦っていた少女が横たわっていた。

微かに胸が上下している。

よかった、どうやら無事だったらしい。

「お前、何者なんだ？ 妙な妖気を感じるし、おまけに泳げもしないのにあの激流に飛び込むだなんて、バカか？」

「う……。返す言葉も無い。……でも、助けてくれてありがとう。

えと」

「河城かわしろにとり。にとりでいいよ。お前は？」

「千花って言うんだ。夕風千花」

「ふうん……。お、椀も気が付いたみたいだな。どれ」

にとりは椀の下へと駆け寄ると、その体をゆっくりと起こして何や

ら話をしている。

千花は、とりあえず吐息してから自分の衣服を確かめた。激流に飲まれていたはずなのに全然濡れていない。

どういうことだろうか。

それに、この場所はいったい何なのだろうか。

見たことも無いような物体や、小難しそうな本が満載の本棚で、

「少しよろしいですか、侵入者さん」

「……あ」

振り返ると、椀が頬を染めながら立っていた。

怒りと感謝がない交ぜになったような、何とも言えない表情で言った。

「……その、助けてくれたこと、感謝します。それに免じて今回は不問と致します。それでよろしいですか？」

「あ……はい。それで結構です。……すみません、許可取らないと入れない山だなんて知らなくて」

「いえ、妖怪ならまあ……私ももう少し貴方を観察するべきでしたね。私と同族だったとは思いませんで」

「同族？」

千花と椀が同時に首を傾げた。

すると、横からにとりが口を出してきた。

「違うのかい？ 椀と同じような尻尾に耳まで似てるじゃないか」

「そ、そういえば……」

椀の頭にはピコピコ揺れる三角の耳、そして背後で揺れる尻尾まで。今の今まで気がつかなかったがこの少女、千花とよく似ている。

「しかも殿方だなんて、久しく見たような気がします。どこかへ旅にでも行っていたんですか？　それでこの山に帰って来たとか」  
「い、いや違います！　僕は……えと、何だろっ？」  
「……？」

そういえば千花は自分の種族が何なのか知らない。  
ただの人間、ということはないだろう。

ならば妖怪なのか。  
確かに能力は備わっているが、かといってそれが妖怪たらしめる所以となるだろうか。

「……えと、千花さん？」  
「どうしちゃったんだろっ。急に唸りだしちゃって」

悩む千花の姿を見つめて二人は顔を見合わせた。

「た、たぶん妖怪と人間のハーフ。……だと思っ」  
「だと思っつて……自分の種族がわからないんですか？」  
「……うん。助けてもらったときに記憶を失ったらしくってさ。それで、今は記憶の手がかりを探してる最中なんだ」  
「それで人探し、ですか」  
「うん。その人が蒼狼を信仰してる里の場所を知ってるって聞いたから」

「蒼狼信仰？　ああ、私も知ってるよ」

にとりは頷くと、本棚から一冊の本を取り出した。  
意外と薄く、表紙には妙に可愛い蒼い犬が描かれていた。

「……これは？」

「まあ、御伽噺おとぎばなしみたいなものさ。内容はだな」

にとりの話を要約するところだ。

昔、この幻想郷のどこかに、それはそれは美しい蒼き毛並みを持つ蒼狼がいたそうだ。

狼はある里の守り神として信仰されていたが、決して人前に姿を見せたり、安易にその力を里のために使ったりはしなかった。

ただ、里の人間が本当に窮地に立たされた時にだけその姿を現し、力を使って人々を救済した。

蒼狼は、人間が好きだった。

常に孤高の存在である狼にとって、他人と群れを成して生きる人間が可笑しくてたまらなかった。

そして何時しか蒼狼は人間を愛していた。

妖怪が里へ襲いかかってくれば、その牙と爪で容赦なく妖怪を退け里を守っていた。

「とまあ、こんな感じだよ。よくある子供向けのお話さ。……って、どうしたのかな、変な顔をして」

「いや……。僕の知っている話と随分違うんだけどな」

「でも、妖怪の中じゃ割とポピュラーな御伽噺なんだけどねえ。桜も知ってるだろ？」

「はい。よく読み聞かせてもらってましたし、自分でも何度か読んだことがありますよ」

「……どうということだろ？」

「千花さんはどんな話を聞いたんですか？」

「んと……確か」

千花は妖夢の言葉を思い出しながら、自分が記憶している伝承の事を話した。

聖なる狼までは正しいのだが、定期的に生贄を必要とするほどの凶

大な力であるということ。

里で一度暴走し、その時に魂魄妖忌によって蒼狼は蒼き太刀に封印されてしまった……と。

「そりゃあ、人間が編纂したからなのかね。でも、普通妖怪なら蒼狼は守護の象徴として扱われるんだけど」

「ちょっと変ですね。千花さんは何方どなたからこの話を？」

「白玉楼と一緒に働いてる妖夢から。でも、妖夢も別の誰かから聞いた話だと言ってたけど」

「一緒に働いてる……って、え、千花さん白玉楼の人間なんですか！？」

「あ……そういえば言っていなかったっけね」

「だから妖夢さんの名前が出たんですね。……意外と凄い人ですね千花さんって」

「それほどでもないけど……」

「で、そういえば人を探してるって言ってたけど誰を探してるんだ？」

「あ、そうだった。実は天狗の新聞記者を探してるんです。知りませんか？」

千花が訊ねると、何故か栞の顔が引きつった。

「も、もしかして……」

「もしかしなくても、栞の先輩のアイツだろ」

同じような表情でにとりが続けた。

「え、二人とも知ってるんですか？」

「そりゃあまあ……な。特に栞の場合上司だし」

「上司……？」



「……お恥ずかしいかぎりです。千花さんも何か迷惑被ったのでしよう?」

「いや、僕は別に……。それより、何処にいるか分かりますか?」

「そういえば、最近はずいぶん忙しそうに飛び回っていて、あまりこちらの方には帰ってきてませんね」

「私も姿を見かけないな」

「そう……ですか」

何かまた別の取材でもしているのだろうか。  
しかしこれでは里へと続く道が分からない。  
いったいどうしたものか……

「おやおや、こんな場所で見つけるとは奇遇ですね」

突然洞窟に声が響き振り返ると、そこには見覚えのある少女が立っていた。

「……あ、君は」

白シャツに勝気な瞳。

それはまさしく、千花が探していた天狗の新聞記者、射命丸文だった。

## 第二十五話 へ 食い違ふ伝承 へ (後書き)

千花が聞いた蒼狼伝説、そしてにとりの語った蒼狼伝説。  
同じ伝承のはずなのに何故か食い違ふその物語。  
果たして何を意味するのか……？

何で、ちよつと思わせぶりな後書き。  
一番混乱してるのは作者ですw

## 第二十六話 へ 真実の真実 へ

洞窟に突如現れた天狗の新聞記者射命丸文。

不敵な笑みを浮かべながら千花へと歩み寄ると、いつかのようにペン先を千花に向けた。

「ふふ。飛んで火にいるなんてやら。こちらも探す手間が省けました」

「探す手間って、君も僕を探していたの？」

文はコクとうなずくと、胸元から小さなメモ帳を取り出しページを捲っていった。

「ええ。いくつか貴方にお伺いしたいこともありますし、それに頼まれてますからね」

「頼まれてる……？ 何を？」

「貴方を蒼狼信仰の里へと案内することを、ですよ」

・  
・  
・

文の案内で、千花はこの幻想郷の西にあるという里へと向かった。た。

妖怪の山を出て、そこからまっすぐ西へと進む。

一時間ほど経つと、やがて目の前に薄暗い森が見えてきて文はそれを指差した。

「この森を抜けた先に蒼狼信仰の里があります」

「……ずいぶんと不気味な森だな」

薄靄も立ち込めており、今にも何か出そうな雰囲気だった。  
心無し肌寒いような気もする。

「案内しますから、ちゃんとついてきてくださいよっと！」

文は地面を蹴って木の上へと飛んでいった。

千花も真似して枝へと飛び移ると、文の背中を追いかけた。  
奥へと進むごとに、木々の葉が失せていた。

今は真夏だというのに、ここだけ真冬のような景觀だった。  
いつしか飛び移る木々は全て枝だけで葉の一つも無くなっている。

「……何だろう。心がざわつく。この先に行って本当に大丈夫なのか……？」

胸騒ぎを抱いたまま進んでいると、やがて文の姿がフツと消えた。  
枝から下りたらしい。千花も文の少し手前で枝から下りた。  
すると目の前に、ボロボロの小屋と大きな門がそびえていた。

「ここが……」

「里はこの先です。では、私は案内を終えたので行きますね」

「え？ いや、ちょっと……！」

千花が振り返った時にはすでに、文の姿がかき消えていた。

本当にここまで案内をするだけだったのか。

まだ礼も言っていないのに。

「また今度言えばいいか。……さて」

千花は目の前の門をそつと片手で押してみた。

ギギッ、と木の軋む音を響かせながらゆっくりと門が開いていく。

門の奥には雑草だらけの道が一本伸びていた。  
念のためにと弓を握りしめてから歩きだすと、奥の方から異臭が漂ってきた。

何かの腐敗臭のような匂いに千花は顔をしかめながら手で覆った。

「……………酷い」

朽ち果てた家屋に、そこらじゅうに転がる腐敗した亡骸。

奥へと進む度に、異臭の強さが増していく。

ここが本当に蒼狼信仰の里なのかと、千花は何度もその目を疑った。  
やがて開けた場所に出ると、今度はおびただしい量の死体が目の前に広がった。

「うつ……………」

吐き気を催して何とか堪える。

どれもこれも惨殺されていて見るに堪えない。

人間以外にも、妖怪の死体まである。

この里でいったい何が起こったというのだろうか。

「……………あれは」

死体の山の向こうに、岩山をくり抜いて造られた祠を見つけた。

ぽっかりと開くその姿に、何故か千花は見覚えがあるような気がした。

……………というより、この里全体に既視感のようなものを覚えていた。  
ここを訪れたのは、初めてだというのに。

やはりここは記憶と何か関係があるのだろうか。

「……………だけど、何も思い出せない。結局無駄足だったのかな」

祠を出て里の入口へと向かおうとした瞬間、千花の足元に短刀が突き刺さった。

「またこいつ等か」

縁日の時幽々子を襲った黒装束の奴らが、再び目の前に現れた。数はざっと見て八人。

刀を手にじっとこちらを見据えている。

右手で矢を掴むと素早く番えて構える。

「幽々子の次は僕か。何が狙いだ」

「……………」

だんまりか。

そういえば、以前も言葉など発しなかったような気がする。気味の悪い奴らだ。

「………… 正当防衛、だからね」

黒装束が一斉に千花へと飛びかかる。

後退しながら矢を放ち、距離を詰められたら蹴りや徒手空拳で応戦し、再び距離が開けば弓矢で射る。

器用に立ち回りながら戦っていると、以前のように黒装束の数が増していた。

「どっからこんなに湧いてくるんだ、くそッ！」

一体多数で得物は弓。

分が悪いにも程がある。

どうしたものかと思いを巡らせていると、突然後頭部に鈍い痛みが走った。

「がッ……………！？」

いつの間に背後を取られ、体勢を崩した千花に黒装束が一斉に襲い掛かる。

意識がふらつき膝をつく。

視界が霞む。

体に上手く力が入らない。

ここで、死ぬのか？

こんな訳のわからない連中に不覚を取って無様に死ぬのか？

そんなの……………嫌だ。

「……………」

瞳が蒼に染まる。

黒髪が蒼に染まる。

目の前に太刀と鞘が映る。

ほとんど無意識に、いや、本能的に鞘を掴み抜刀する。

そして千花は犬歯を剥き出しにして咆哮した。

「俺を殺そうなんて、てめえら見たいな雑魚に、出来るわけねええだろうがああああああ！！」

裂帛れっぱくの気合いと共に、蒼の太刀が一閃。

黒装束の姿が霞み、やがてその存在が抹消されていく。

その場から、塵一つ残らず黒装束が消えた。

大きく肩を上下させ、千花は、目の前の虚空を斬り払う。

引き裂かれた空間の先に、紫紺の瞳が驚愕の表情を浮かべていた。

「次元を引き裂いた……！？ そんな力まで」

「うるせえ引き籠り野郎！ 今すぐそっから引きずり出して殺してやる！」

紫紺の瞳が細まり、口元が小さくつり上がった。

浅はかな、とても嘲笑<sup>あはれ</sup>つかのように。

「いいえ、引きずり出されるのは貴方の方。気づかないのかしら？  
貴方の足元」

「……ッ！？」

いつの間にか千花の足元に巨大な円形の陣が広がり白く発光していた。

円の端には何やら紋様のような線が描かれ、千花を中心にぐるりと囲んでいる。

「てめえ……！」

「……まずは、その動きを封じましょうか。境符『四重結界』」

紫の詠唱と共に千花を包みこむ陣が呼応する。

ぐるりと囲っていた陣がさらに二重三重にと重なり、最終的に千花を中心に四重の陣が重なる。

端の陣から光が生じ、千花は陣の中心で光の檻の中へと閉じ込められてしまった。

「なめるなよスキマ妖怪。こんな封印ぐらい、俺の太刀で事象を断てばそれで済む話だろうが」

「ちよっと時間を稼げればそれで十分よ。捌器<sup>はきはき</sup>『全てを二つに別ける物』」



別の術符を取り出し紫が再び詠唱を始める。

その間、千花は蒼の太刀で乱暴に光の壁に叩きつける。  
ほんの数秒で壁に亀裂が走り、紫の頬に汗が一粒流れる。

「相変わらず、粗暴な聖獣なこと」

「黙れ。くだらねえコト考え……ッ！」

「……でも、間に合ったわ」

千花の足元に、別の陣が現れ赤い光を放つと千花を飲み込んでしまった。

紫は汗を拭くと、次元の裂け目から姿を現し陣の中心へと近づく。

「……とりあえず、これでよし」

目の前の陣の中心に瞳を閉じて浮遊する千花と、千花の背丈の倍ほどの蒼い狼が同じく浮遊していた。

何故千花も狼も、半透明に透けていて向こうの景色が映っている。

「これで、蒼狼を消してしまえばそれで」

「……紫さん」

伸ばしかけていた手を止め、振り返ると文が立っていた。

複雑そうな表情を浮かべたまま文は口を開いた。

「……何かしら」

「本当に、彼は凶悪な存在なのですか？」

「……ええ、そうよ」

「私は貴女と、それから慧音さんから調査を依頼され、そして二つの事実を突き止めました」

「……………」

紫は答えない。

文はそのまま言葉を続ける。

「人間が遭したとされる凶悪な蒼狼の伝承、そして妖怪に伝わる守り神としての蒼狼の伝承。同じ蒼狼なのに、異なる説。これは……どういう事なんですか？ 紫さんは真実を知っているんじゃないんですか？」

「それは……………」

紫の表情が微かに歪む。

相反する面を持つ、異なる伝承。

「……………どちらも真実よ。凶悪な力を持つということも、そして、この里を守っていたということも」

そして紫は、蒼狼伝説の全てを語りだした。

## 第二十六話 へ 真実の真実 へ (後書き)

全くプロットをまとめてないため、非常にピンチです；  
そろそろ物語の穴や違和感が目立ち始めるかも……

それと、評価ポイントありがとうございます。  
せっかくポイントもらえても、その人が分からないから本人にちゃんと御礼を言えないのは残念ですが……

## 第二十七話 へ 気まぐれな狼 へ

人間というのは、どうにも現金な生き物らしい。

その昔、蒼狼は幻想郷の西の果てに生きていた。

毎日自由気ままに森や野山を駆け抜け、他の妖怪や精霊とは関わりを持たず、一人孤高に暮らしていた。

そんなある日。

蒼狼がとある洞窟の中で眠っていると、どこからか耳をつんざくような悲鳴が聞こえてきた。

人間が妖怪にでも襲われたかと最初は気にも留めなかったのだが、ちようど空腹で人間を喰らった妖怪を喰らって漁夫の利を得るのも悪くないと、蒼狼は起き上がり洞窟を出て丘の上にと立った。

眼下に小さな人影がいくつかと、その人影の視線の何倍もの背丈の妖怪が仁王立ちしていた。

どう足掻いても人間に勝ち目はない。

蒼狼は早く妖怪があいつらを引き千切り、喰らうのを静かに待っていた。

……だが、一人の人間がこちらの存在に気づき指を差して叫んだ。

「あ、蒼い狼がいるぞ!？」

するとその場にいた人間と、妖怪までもがこちらを振り返った。

蒼狼は何やってるんだ？ と眉をひそめたが、次の瞬間何故か歓声が上がってきて、

「せ、聖獣だ！ 蒼く輝く狼なんて聖獣様に違いない！ きつと我

らを助けに来てくれたんだ！」

「ああ？ 何言ってんだアイツら……？」

人間は急に地面にひれ伏して何度も何度も仰々しくこちらを仰いで  
拝み始めた。

まるで救いの神に助けを求める殉教者のような、ちよつと危ない眼  
差しで。

そんな神でもなんでもないので助けを求められても困るし、それに、  
今度はもう一人の妖怪の視線が突き刺さって、

「ああ？ あんな犬ところが神だと？ あんな弱そうな犬に俺様が  
負けるかよ」

「……バカじゃねえのかアイツら」

フワアと大欠伸をして首を回す。

別に準備運動でもなんでもなく、ただ首が凝っただけだ。

それなのに人間は何だか嬉しそうに見上げてくるし、妖怪も舐めら  
れてるとでも思ったのか肩を怒らせこちらに向かってやってくるで  
はないか。

「おいおい。俺は何にもしてねえだろ」

「うるせえ。てめえを倒してあいつらの顔を恐怖震わせてから喰ら  
ってやるんだよ。その澄ました顔へし折ってやる」

「澄ましてるつもりはないんだがね……。やるってんなら相手する  
さ」

ニイッと歯をむき出しにして笑うと、襲いかかる妖怪を真上に飛ん  
で避けてから、その背に向かって飛びかかった。

下級の妖怪程度にやられるわけなどなく、蒼狼はあっさりその妖怪  
を倒してしまった。

名は、忘れた。

どうせ名のある妖怪じゃないだろう。  
そして、妖怪を倒してから気づいた。

「オイオイ。これじゃ人間を喰らった妖怪を喰らえないじゃねえか。  
我ながらバカなことしたねえ」

「あ、ありがとうございます！ 聖獣様！」

下は下で歓声が上がってる。

ただ成り行きで助けたというのに呑気な奴らだ。

そもそも俺がお前らを喰らってもいいのだが、生の人間は骨ばって好きじゃない。

半眼で見下ろしていると、人間たちはぺこぺこ頭を下げながら森の奥へと消えていった。

その先に、いつ出来たのか小さな村が見えた。  
あの人間たちの村だろうか。

「……まあ、いいや。今日はもう眠いし、明日にでも様子を見に行つてみるか」

蒼狼はくるりと踵を返すとねぐらへと戻っていった。

それから半日過ぎて……

・  
・  
・

陽が昇り、何か木を打ち付けるようなコンコンという物音に目を覚ました。

「んあ……？ なんだこの音」

物音はちょうどこの丘の真下の方から響いていた。

崖の下を見てみると、たくさん人間たちが集まり何かを造っていた。

まず最初に目についたのは、木造の小さな建造物だ。

恐らく、神を祭る社だろう。

つてことはこの辺りに何か神様が来るということだろうか。

そんな話は聞いていないが。

……気になる。

もう少し観察してみようか。

蒼狼は音を立たないよう静かに岩場を蹴って森へ着地すると妖力を使って姿を消した。

昨日みたいに騒がれるのは御免だし。

どうやら社以外にも、目の前の山の岸壁をくり抜いて何か祠のようなものも造っているようだ。

「だからなんでこんなとこに社や祠を造るんだつての」

意味が分からねえ。

本当にどこかから神様が降臨してくるのだろうか。

……そうなったら、この場から離れないといけないな。

「いやあ、それにしてもいい所に里を造れたよな」

ふと、人間の話し声が聞こえてきたので耳を傾ける。

どうやら昨日妖怪に襲われていた人間の一人らしく、聞き覚えのある声だった。

「ああ。まさかこの地に聖獣様がいらっしやるだなんて知らなかった。未開の地を切り開いて里を起こしたが、どうやら俺達は運がいいらしい」

「聖獣……。まさか、俺のことか？」

よくよく見てみれば、社には狛犬じゃなくて狼の石像なんか飾ってある。

そこは狛犬のポジションだろうに、俺が立ってどうするんだ。何も守らないぞ。

そんな蒼狼とは裏腹に、社や祠はあつという間に完成してしまっ、しまいいは早速参拝客が訪れる始末。

毎日拝みに来る婆さんとか、お供え物を持ってくる巫女さんとか。

思いの外けっこうな参拝客だった。

信仰される、というのがどういうものかは知らないが、別に悪い気分はしなかった。

里のために働いたことは一度もないけど。

「ああ……。何ていうか、因果応報ってか」

あの時、最初っから身を隠して傍観してりゃ、妖怪に人間が喰われて、その妖怪を俺が喰って満腹のはずだったのに。

「……………アイツ、また来たのか」

そして社が出来てから熱心に通う少女を見つけ蒼狼は少し丘の上から身乗り出した。

少女は何を祈っているのか、雨の日だろうと風の日だろうと毎日毎日この社に訪れては祈りをささげていた。

そんな姿を蒼狼はいつも見下ろしていた。

特に理由はないのだが、毎日見ているうちに何となく気になっていたのだ。



「何を祈ってるんだか知らないがヒマな奴だねえ。……ちよつとからかってやろうか」

姿を消し少女のすぐ傍へと着地すると、ふわあと風が舞い上がる。少女はハッと顔を上げ周囲を見まわしたが、当然蒼狼の姿を見ることはできず、再び両手を合わせ祈りはじめた。

くつくつと小さく笑いながら、蒼狼はちよつとカッコつけてから少女に問いかけた。

「少女よ。ここで何を祈っている」

「……え？ 今、声が……？」

再び辺りを見回す少女の姿が滑稽でたまらない。

「も、もしかして聖獣様ですか？ で、でしたらお願いです。私の願いを聞いてください！」

「ああ。何だ言ってみろ」

低めに声を調節して少女に答える。

すると、少女は天を仰ぎ頬に涙を伝わせながら言った。

「この里に、危機が迫っているんです！ 私はそれを、夢で見たんです！」

「はあ……？」

突拍子もない言動に蒼狼は首を傾げた。

しかし少女の表情は真剣そのもの、蒼狼は面倒なことになったかもと後悔しつつ、話してみよと少女を促した。

第二十七話 へ 気まぐれな狼 へ (後書き)

ここから蒼狼の過去話。

……なんか、今回のお話は過去話ばっかだな；

しかし、アクセス数落ちちゃったなあ

## 第二十八話 へ 成り行き守り神 へ

話を聞き終えた蒼狼は、ハアと大きく嘆息してやれやれと首を振った。

少女の見た夢を簡単に言うと、

この里に突然大量の妖怪が村に襲いかかってくるのだという。そして里の人間は一人ずつ殺され、やがて最後は跡形も無く破壊されてしまうのだとか。

「……これが本当の狼少年、あいや、この場合は少女か」

「し、信じてください！ 私にはそういう能力ちからがあるんです！」「能力ちからだと？」

すると少女は自分の持つ能力について話し始めた。それは自分の身に起こる近い未来を夢で見るといふ未来予知の力だと。

蒼狼はその眼を細めるとふむ、と小さく唸った。どうも嘘をついているというわけではないらしい。それに、微かだが少女の体から力の波長を感じる。

「お前、巫女なのか？」

蒼狼の問いに少女は首を振った。

「いえ、普通の農家の娘です」

「はあ……。それはそれは変わった農家の娘だ」

年の頃は十代前半と言ったところか。

腰まで伸びた黒髪と、頬のそばかすが幼さを強調している。

別段変りない普通の人間なのに、力を持っているとはどういうことだろうか。

まさか信仰の賜物だとか言うわけないだろうな。

「その能力のこと、他の奴には話したのか？」

「……いいえ。話しても、誰も信じてくれませんでした」

「ま、そりゃそうか」

いきなり娘が、『明日里が妖怪に襲われるの！』なんて言っても、笑い話か夢の話だろうと流してしまうだろう。

真に受けるヤツはちよつと危ないに決まってる。

しかし蒼狼もすんなり頷くわけもなく、

「……しかし夢のお告げだけで信じるってのも妙な話だな。こういうのはアレだろ、ショーコってヤツがあれば信憑性が上がるんじゃないか」

「証拠……ですか」

少女の表情が誰にでもわかりやすいくらいに沈んだ。

ただの農家の娘が出来ることなどたかが知れてる。

蒼狼はそろそろ退屈になってきてふわぁ、とそこら辺の犬そっくりな欠伸をした。

「……いけね、涙まで出たら。」

帰って寝たいかも。

そんなことを考えていると、不意に少女が顔を上げた。

そっちを見上げて俺はいないぞお嬢ちゃん。

「で、ですからお願いです！ 私と一緒に、その証拠を、探しに行ってくださいませんか？」

「……………ああ？」

思わず地声が出た。

少女はその声にビクツと体を震わせてキョロキョロと辺りを見回し始めた。

「そつちじゃねえ。こつちだ」

「…………ツ！？」

少女の目の前に、蒼狼はその毛並みを輝かせながら姿を現した。

こそこそ隠れながら話すのに飽きた…………もとい、そういうのが嫌いだったし。

少女は目をパチパチさせながら、え！？　だとか、あ！？　とか途切れ途切れな悲鳴を上げている。

「おっと。叫ぶの禁止。人間に姿を見られるのはあんまし好きじゃないんでね」

「あ、わわわわ…………！？　ほ、ホントに聖獣様だ！　蒼い狼の聖獣様だ！」

「聖獣つて…………。まあ、いいか。さて小娘、話をしようか」

「は、はい！？」

社の真ん前で正座する少女。

瞳が光を浴びた水面みたいにキラキラしていて、蒼狼の言葉を待ち望んでいる。

とりあえず、蒼狼はん、うん、と喉の調子を確かめてから言った。

「俺は人間のために働くつてのは一度もやったことがない。故に、お前の言葉に耳を貸して証拠を探しに行くのは御免だ」

少女の顔が歪む。

まさか協力してくれるとでも思っていたのだろうか。  
オメデタイ娘だこと。

「そ、そんな……！？ この里が滅んじやうかもしれないですよ！  
？ それでも守り神なんですか！？」

「別に守り神になったつもりは全くないんだが……。それを説明するの面倒だし。つまり、そういうことだ。諦めな」

「お、お供え物をいっぱいあげますから！」

「んなもん一度も食った事ねえよ。っていうか、お前んとこの里のガキが食ってんじゃねえか」

「あうう……。じ、じゃあたくさんお酒をお供えますから！」

「酒はやらん。健康に悪いからな。それに俺は酒を分解する酵素が云々」

「じ、じゃあじゃあ……。あう」

めんどくさいので右手で少女の頭を軽く叩いた。  
一応爪は引っこめておく。

「酒だとか供物で聖獣を釣るってのか？ それは信仰としてどうな  
んかね？」

「だって、私にできることなんて……」

右手が微かに下がる。

少女がうつむいたからだ。

今の蒼狼はちょうど、出来の悪い犬が主人の頭にお手してる、ように見える気がする。

流石にカッコつかないので手を引っこめた。

「……じゃあ、こついうのはどうですか」

「ああ？ 何だよ」

「私が、生贄になります」

「……………」

引っこめていた右手を少女の鼻先に持つていく。

少女が顔を上げた瞬間、爪をピンツと立てて鼻先にぶつけた。

「ったあッ!？」

狼式デコピン。

そんなに強く弾いた覚えはないが、少女は社の真ん前でごろごろの  
たうち回った。

「阿呆。そうやって自分の命を軽々しく贄にとか言うんじゃない」

「い、痛あ……。で、でもこれぐらいしないと聖獣様は動いてくれないでしょう!？」

「つとに、めんどくせえガキだなオイ……………」

鼻のてっぺんを真つ赤にさせた少女は、それでも蒼狼をまっすぐ見据えて見上げていた。

澄んだ黒い瞳に映る蒼狼は、大きくため息を吐いた。

「……………わかった。そこまで言うなら動いてやるよ」

「ほ、ホントですか!？」

「ただし」

一拍置いて続ける。

「もしも、お前の言う妖怪襲撃の手がかりが見つからなかった場合は本当に命で償ってもらうぞ」

「そ、それは……」

少女がたじろぐ。

本当にそれだけの覚悟があるかどうか確認するため、別にこんな小娘を喰らうつもりはないが。

やがて、少女は顔を上げて頷いた。

「……わ、わかりました」

「ほう……」

澄んだ瞳がまっすぐこちらを見据えている。

それは覚悟を決めた者の目だった。

「わかった。……じゃあ一つ訊くが、その妖怪とやらはどこから出てくるんだ？」

「えと、あっちの方……です」

森の奥を指差されてイマイチわからなかったが、方角は北東か。あっちは確か、この里を造る時に結界を施したとかで普通の人間は立ち入り禁止の区画じゃなかっただろうが。

「ってことは、考えられることは一つか」

「へ？ あの、聖獣様？ ……わわわッ!？」

少女の首根っこくわえてポイと後ろに放り投げると、背中にぼふつと軽い衝撃が落ちてくる。

「ひゃ、ひゃあ!？ わ、私、聖獣様の御身に乗って!？」

「ちゃんと掴まってるよ。落ちたら置いてくからな」

「は、はいい!？」



ぎゅ、と少女が蒼狼の背中に抱きつく。

蒼い毛並みは羽毛のようにふわふわで、このまま眠ったらとても心地よいんじゃないかと少女は思った。

……すぐに首を振ってその考えを振り払ったけど。

「そうだお前、名は何ていうんだ」

「は、はい！ わ、私は夕凧志星しほと言いま、きゃあああ！？」

「ん、志星だな。どうでもいいが走ってる時は黙っとけ。舌切るぞ」

「そ、そういうのは走る前に、言ってくだ、さい！？」

激しく上下に揺さぶられる志星は何とか名乗ると、あとは口を動かさず懸命にしがみ付いていた。

そして蒼狼は志星を背に乗せたまま、志星が指差した北東へ向かって一気に駆け出した。

第二十八話 へ 成り行き守り神 へ (後書き)

評価ポイント、ありがとうございます。

しかし調子が微妙；

さて、30分後には海鳴譚を更新しますよっと。

## 第二十九話 へ 結界の綻び へ

蒼狼が一気に走ってだいたい数分後、目の前に小さな祠と石柱が見えてきた。

「これが結界石ってヤツか。人間の造った物にしちゃあずいぶんとよく出来てる」

「昔、里長が東の巫女様に造り方を教わって造ったそうです。私は、初めて見ましたけど……」

「ふむ……」

蒼狼は腰をフン、と揺らして背の志星を落とすとゆっくり石柱に近づいていった。

石柱はちょうど六角形の形をしていて、注連縄に縛られた表面は大理石のように滑らかだった。

大きさはだいたい、普通の人間三人分と言ったところか。

妖気、とはまた違う妙な力の気配がするが、今すぐにでも消えてしまいそうなほどか弱い波長だった。

よく見ると、背面部分に亀裂が走っている。

「この結界石、ちょいと壊れてるな。修理しないと使い物にならないな」

「で、でも！ このことを里長に知らせれば、何か手を打ってくれると思います」

「まあ、そりゃそうだろうな。……用件はこれで済んだな。もう帰るぞ」

「え？ あ、はい！」

志星が背中に飛び乗ろうとしたので、ひょいと避けてみた。

そのままバカ正直にまっすぐ地面と正面衝突。

「わぶ!?!」

「おいコラ。勝手に乗ろうとするな。許可してないだろうが」

「ひい……痛たた……。だ、だってさっきは乗れって言ったじゃないですか!」

「さっきはさっき、今は今だ」

言って、子供みたいな言い訳だなとも思ったが、志星はそれに負けじと腕をブンブン振り回し始めた。

「だ、だって! 聖獣様に乗らないと、私里まで帰れないじゃないですか!」

「俺を馬か何かと思ってないかお前。そもそもこうやって接してやってるだけでもありがたいと思えよ? 普通の人間ならその首引き千切って喰っちゃまうっての」

「ひ……ッ!」

志星の顔が恐怖に染まる。

そもそも俺は妖怪で、こいつは人間。

一般的な常識を持つ人間なら死を覚悟するところだろう。

「しかもだ。これだけで妖怪が襲撃してくるかどうかなんて俺にだってわからん。もしかしたら本当に襲ってくるかもしれないが、逆に何も起こらない可能性も見えたってことだ」

「ち、違います! 絶対に当たるんです! 今までだって……」

「……ん、なら今まで当てた具体例でも教えてもらおうか」

「た、例えば」

隣の家の子が転ぶ夢を見て、それを注意したが聞かずに結局転んだ、

だとか。

畑に野犬が来て作物を食い荒らす夢を見て、祖父に伝えたが聞く耳持たず、結局食い荒らされたとか。

「ど、どうです！ 凄いでしょう？」

「……………」

返事をするのもめんどくさかった。

未来が見えても、全部意味ねーじゃねえか。

てか、ずいぶんちっぽけな未来だな。

蒼狼が呆れて嘆息すると、何故か志星は勝ち誇ったように胸を張ってきて、

「わ、私の夢見はホンモノなんです！ 信じていただけましたか？」

「……………あー、うん。とりあえず俺がバカだった」

「そ、その顔は信じていませんねってひゃああー！？」

問答無用で志星を背中に放り投げる。

誠に遺憾だがコイツを里まで戻さなくてはならない。

「……………とにかく、一応の確認はしたぞ。これで何もなかったらお前は俺の腹ん中だぞ」

「ぜ、絶対妖怪が襲ってくるんです！ ……た、たぶん」

「今度はずいぶんと自信がないんだな」

それきり、志星は黙りこくってしまった。

里へと帰る途中、蒼狼は背後に微かな妖気を感じながら里へと駆け出した。

・  
・  
・

「ほれ。ついたぞ」

社へ着地すると、蒼狼は背中<sup>の</sup>志星を強引に落とした。

ふらふらと覚束ない足取りで二、三步ほど歩くと、何故か背中から倒れかかってきた。

蒼狼の足に志星の背がポンと当たると、志星は慌てて振り返って、

「す、すみません！ め、目が回ってしまつて……あわわ」

「……やれやれ。何でこんなガキに協力したんだかな」

自分でもさっぱりだ。

一度ぐるりと首を動かしてから欠伸をすると地を蹴って丘の上へと飛んでいく。

あつという間に小さくなった志星は蒼狼に向かって手を振りながら叫んだ。

「あの、聖獣様！ ありがとうございます！」

「……ただの気まぐれだ。調子に乗るなよ人間」

「それでも、嬉しかったです。私の言葉を信じて聞いてくれたの、聖獣様だけでしたから」

澄んだ瞳が蒼狼を見つめて微笑んだ。

……バカな人間だ。

気まぐれに過ぎないというのに。

「……そうかい。さ、とつとと帰んな。結界の事とか里長に言うんだろ」

「はい！ じゃ、失礼しま……あ」

何故か志星は一度振り返って蒼狼を見上げて、

「また、お話してくれますか？」

そんなことを言ってきた。

「……気が向いたらな」

「えへへ。ありがとうございます」

志星はぺこりと頭を下げると、小走りに里へと戻っていった。

「……………人間、ね」

小さく呟いた後、蒼狼はくるりと向きを変えて寢床へと戻っていった。

今日はバカなガキに付き合っただけ疲れた。

さっさと寝よう。

洞窟の奥で瞳を閉じたのも束の間、蒼狼はすぐさま目を覚ますことになった。

理由は至極単純、爆音と共に目の前の里で火の手が上がっていたからだ。

## 第二十九話 へ 結界の綻び へ (後書き)

地の文が弱いのを本当に痛感してます……；

何か、自分のイメージと語彙が追いついていなかったり、噛みあつてない感じです；



### 第三十話　〈歓喜と、畏怖と〉

丘の上へと歩いていくと、赤い輝きに照らされた里が眼下に広がっていた。

目を凝らしてみるまでもない、里が襲撃されているのだ。どうやら結界はもう機能してないらしい。

北東から微かに感じていた気が完全に無くなっている。

「……しかし、本当に襲撃されるとはね」

燃え上がる家屋を見つめながら一人ごちた。

あの志星とか言う小娘の言うことは本当だったのか。

結局蒼狼が力を貸しても未来は変わらなかったが、このままでは里は燃え尽き、人間はその炎で全て焼き尽くされるか、妖怪の腹の中に収まるか、どちらかだろう。

チラチラと視界に映る赤い光が眩しい。

こっちは眠いというのに迷惑だ。

やるなら時間帯を考えてくれ。

こんな真夜中で火柱なんか上げられたら嫌でも起きちまっだろうが。

「聖獣様あああ！」

里の悲惨な光景を呆然と眺めていると、足元から声が聞こえてきた。言うまでもなく志星だろう。

首を微かに下方へ傾けると、顔中ススだらけの志星がこちらを見上げていた。

「なんだよ小娘。何か用か？」

「よ、用かって、聖獣様はこの里の守り神なんですよ！？」 どうし

て助けてくだらないのですか？」

蒼狼はうんざりだと言わんばかりに顔を歪ませ、吐き捨てるように言った。

「だから、守り神とかつてのはてめえら人間が勝手に言ってるだけの話だろうが。俺には関係ないっての」

「そんな……！？ 目の前で、大勢の人が死んでるんですよ！？ それなのに、聖獣様は見てるだけで何もしないおつもりなんですか？」

「関係ねえな。……そうだ、里が滅んでたらふく人間を喰った妖怪を喰うつてのはアリだな。満腹になった妖怪を引き裂いて喰うなんて久々だし」

「……幻滅しました」

「ああ？」

志星の体が震えている。

怒りだろうか、呆れだろうか。

どちらでも構わないが。

志星はキッと蒼狼を睨みつけると、力いっぱい叫んできた。

「私は、聖獣様はもつと気高くて強いものだと思ってました。なのに、そんな悪党みたいに姑息で弱い心の持ち主だと思いませんでした！ もう、いいいです！」

肩を怒らせ回れ右、そして一目散に里へと走り出した。何をするつもりだろうか。

人間の小娘に出来ることなど、たかが知れてるだろうに。

「……っつかしまあ、好き勝手言ってくれるじゃねえの」

俺が悪党？

俺が姑息で弱い？

そんなことを言われたのは初めてで、非常に不愉快だ。

重い腰を上げて一步、一步と崖へ向かって歩き出す。

ちょうど里の全景が見渡せる場所に立つと、蒼狼はもう一度眼下を見回した。

里のあちらこちらで火の手が上がり、図体だけはデカイ妖怪たちが逃げ惑う人を追い回している。

「……ま、たまには本気で体を動かすのも悪くはないか」

蒼の毛並みが青白い燐光に包まれると、蒼狼の瞳も同じ色に染まる。そしてもう一步踏み出して崖の上に立つと、大きく身体を反らして咆哮した。

長く、そして凜と響くその咆哮に、人間も妖怪も同時に天を仰いだ。そして、蒼く輝く聖獣の姿を見つけ、ある者は歓喜し、ある者は恐怖した。

「聖獣様のチカラ、見せてやろうじゃねえか。その目でしっかりと焼き付けておけよ、志星」

滑るようにして崖を降りると、一蹴で里の中心部に辿り着く。

周囲を見回し、倒すべき妖怪の数を把握する。

その数十体、物の数ではない。

手始めに、一番近くにいた妖怪の首を吹き飛ばした。

牙に滴る血が身体を興奮させる、堪らない快感が身を走る。

そして息つく間もなく別の妖怪に飛びかかりその牙で脳髓を、潰す。こちらに襲いかかる妖怪は蹴って往なし、そのデカイだけの図体に牙を立てる。

鮮血が蒼の毛並みに注ぐが気にしない。  
そんな理性、悪いが今の俺には無い。

「あと、七人」

口の端を上げて突っ込んでいく。

またたく間に紅の花が咲き、崩れていく。

一つ、二つ、……そして、最後の一つ。

蒼の光が疾駆する。

と同時に妖怪の体が真つ二つに裂けた。

断末魔に何か言っていたようだが興味無い。

「……は、この程度かよ。所詮はただの雑魚妖怪だったってわけか」

「せ、聖獣様が……我々を助けてくださった！ ああ、聖獣様！」

ちらと振り返ってみると、生き残っていた里の人間が涙しながらこちらに平伏していた。

両手を合わせ何度も何度も拝む者、ただただ平伏して頭を垂れている者。

ただ、中には怯えたような表情でこちらを見ている者の姿も見受けられた。

そんな中から、一人の少女がこちらに向かって歩いてきた。

黒い瞳が、喜びもせず、怯えもせずにまっすぐ見据えてくる。

「……聖獣様」

「どうした、嬉しくないのか？ 未来が変わったんだぞ？ さてはお前、俺の強さに恐れを成したか？」

「いえ、全然」

「ああ？ んだそりゃ……って」

何故か、志星は蒼狼の目の前まで来てからとニッコリと微笑んだ。

「何でお前笑ってんだ？」

「ふふふ。だって、貴方はやっぱり、私の思った通りの聖獣様だったから」

「どういう意味だよ、それ」

「さあ、どういう意味でしょう？」

「……強かな小娘だな」

血塗れな自分を前に微笑む志星を見て、ふと蒼狼はこんな考えが浮かんだ。

もしかしたら、この小娘はこうなる未来を見たのではないかと。わざと結界石の綻びに気づかせ、そして襲撃と同時に蒼狼を焚き付け里の妖怪を攻撃させたのではないかと。

「んなわけないか。……ってか、それだと俺がこの小娘の手の上で踊らされていたってことになるんじゃないか？」

蒼狼はもう一度志星の顔を見つめる。

すると志星は先刻同様に微笑みながら、何の遠慮も無しに蒼狼に抱きついていた。

「んー、もふもふして気持ちいい」

「……末恐ろしい小娘だなオイ」

その後ろで里の人間が顔を引きつらせながらわなわなと体を震わせていたが、蒼狼も少女も、特に気にはしなかった。

### 第三十話 へ 歓喜と、畏怖と へ (後書き)

どうしてこう……知らず知らずの内にツンデレキャラ(?)が出来上がっているんだろう? w

とはいえ、蒼狼はツンデレってわけじゃないですけど；

それにしても、俺の書くオリキャラって、キャラが薄いですねえ…

…；

他の人たちの書いてるような i m p a c t ! が足りない気がします  
(なぜ英語にしたし

そつえば、幻想入り系のお話は考えたことないんだっけ  
気が向いたらプロット書こうかなあ……？

### 第三十一話 へ 蒼の巫女 へ

妖怪の襲撃から里を守ってから十数年の月日が流れた。

あの日から里は平穏な日常を取り戻し、前よりも人口も増え里も少しずつ大きくなっていった。

もちろん蒼狼の社も健在だ。

「……だがよ、どうしてお前が巫女になるんだよ？」

眼下の社の縁側で佇む一人の女性に向かって蒼狼がつぶやく。

精悍で凜とした顔立ちに、漆のように艶やかな黒髪。

大人びた容姿なのに、澄んだ黒の瞳は無邪気な子供のような好奇心に溢れていた。

「あの一件で、私が聖獣様に一番近い存在だと思われたからよ。私としては、すごく光栄だと思っているわ」

「何が蒼狼信仰だ。結局本当に守り神になってるじゃねえか」

襲撃から里を守った聖なる狼。

その日からしばらく社に参拝客が押し掛けて大騒ぎしていた。

煩過ぎて結局その日は一睡も出来なかったのを未だに覚えている。

「いいじゃないですか。貴方だって、満更でもないんでしょう？」  
「やれやれ……。しかも、こんな女が子持ちだっていうのも信じられん」

その女性のすぐ傍には、十代くらいと思われる少年と少女が小さな寝息を立てて眠っていた。

少年は母親同様黒髪だが、何故か少女は銀色に煌めいている。

「ふふふ。巫女の私が結婚してどんな気持ちだった？」

「三日で離婚するんじゃないかねえかと思ってた」

「あらあら、それは残念でした」

「……名前、何て言うんだっけか」

「自分の巫女の子どもの名前ぐらい覚えてほしいわね。千花と、凜よ」

双子の頭を撫でながら、母親はフツと笑みを漏らした。

「どうしたんだ？」

「こうして普通に子供の話をしてるってのが可笑しくって。貴方は聖獣で、私はただの人間でしよう？」

「よく言う。お前自分の子供に俺を説明する時、『デッカイわんこだから大丈夫よ』なんてほざきやがるから鬱陶しくて敵わなかったぞ」

「そういえば、そんなコト言ったっけ。あっはは」

あっけらかんと笑うその顔に蒼狼は嘆息した。

こいつ、本当に俺を聖獣だと思ってるのだろうか。

他の奴から感じるような信仰ってのとは、ちよっと違うような気がするが。

崇拜というよりは、気を許した友と語らっている、そんな感じがする。

「……あれから襲撃も無くて平和よね。これも貴方様のお力かしら？」

「あの一件で里の結界を造り直したんだろうが。外界からは普通の人間じゃ目視できないようになってるんだろ」

「そうね。でも、私はもう結界なんて無くてもいいと思うんだけど





とすと、蒼狼はもう一度大きく嘆息した。

「ったく。お前の子供ってのは躰がなつてねえ。勝手に触るなつて、俺が何回言つたと思つてんだ」

「ん、確か百と三十六回かしら？」

「そんな数覚えてるヒマあるならちゃんと躰しとけつての」

「蒼狼さま！ 蒼狼さま！」

「……あんだよ」

ぐいぐい毛を引っ張られて、否が応でも振り向いてしまう。

凜は天真爛漫な笑顔を作ってからずいと右手の平を伸ばし高らかに叫んだ。

「お手！」

「だから犬じゃねえって言つてんだろうがあああああ！？」

「きゃー！ きゃー！」

本気でめんどくさいガキだ。

この小娘の子供だつても領ける。

凜はずいぶんと楽しそうに叫びながら境内の中を走り回っていた。やがてぐるりと回つてから母親の下へと駆け寄ると、傍でまだ寝ていた千花をかくかく揺さぶりだした。

「兄様！ 兄様！ 早く起きて遊ぼうよ！」

「はえ？ あう、り、凜。苦しいんだけど……」

少女の力とは思えないような力でブンブン揺さぶられていた千花はだんだんと顔が青ざめ始める。

そんなことはお構いなしに千花の襟を掴むと、里の方へと走っていつてしまった。

「……ずいぶんと難儀な兄貴」

「生まれたのは凜が先なんだけどね。兄様兄様ってずっと呼んでるのよ」

「おかしな兄妹ふたしだな」

「でも、子供が笑ってるのは安心するわね。ホントに平和を感じる」  
「俺はどうでもいいけどさ」

トン、と蹴って崖の上へと上る。

別にコイツと話をしてもいいのだが、一応守り神になっちまったんだ。

仕事はちゃんとこなさなくてはならない。

「いつもありがと、聖獣様」

「へいへい。お前もさっさと行けよ志星」

「貴方が帰ってきたら帰るわ」

「……そうかい」

そして蒼狼は首をぐるりと回してから里の外周へ向かって飛び出した。

妖怪が里に近づいていないかどうか、見回りをするために。

「我ながら、ずいぶんとフレンドリーになっちまったな」

そう自嘲気味に呟いた横顔は、微かに微笑んでいるように見えた。

・  
・  
・

「霊夢、貴女知ってる？」

「西の方にある、蒼狼の里のことかしら」

東の果てにある博麗神社。

その境内で紫紺の瞳の少女が深刻そうな表情で巫女と会話を交わしていた。

「そうよ。貴女が結界を施したあの里。なら当然、里の守り神も知ってるわよね？」

「ええ、もちろん。自称人間嫌いの蒼い狼でしょう。それがどうかしたの？」

「蒼狼はその身に危険な力を持っているの。今のアイツは気づいていないみたいだけど、いずれこの幻想郷を脅かす存在となり得るわ」

すると、まっすぐ伸びた黒髪を揺らしながら博麗神社の巫女は笑った。

「気づいていないのならいいじゃない。放っておけば何も起きないわよ」

「……貴女はもう少し危機感を持ちなさい。もしもあの里を飛びだして暴れまわったらどうするのよ。この素敵な幻想郷を野獣に蹂躪されるなんて私は嫌よ」

「大袈裟なのよ紫は。それに私だってちゃんと考えてあるわよ。あの結界はかなり特殊なものだし」

「貴女が動かないのなら、私が一人でやるからいいわ」

紫は鳥居の前の空間を切り裂いて一歩踏み込んだ。

やがて裂け目が閉じると、そこに紫の姿はなかった。

紫が去った後、巫女は幻想郷を一望できる丘へと歩き、夕日の染まった世界を見つめた。

黄昏に染まる幻想郷は美しい。

それは、人間だろうと妖怪だろうと、神であろうと同じはず。

「……紫は、心配性で怖がりなだけよ。蒼狼はよっぽどのことじゃないかぎり怒ったりしないのに。もし、彼が激昂するようなことがあるとしたらそれは」

再び里が襲われ、愛する人を失った時……だけだ。

### 第三十一話 へ 蒼の巫女 へ (後書き)

志星は千花のお母さんでした、と。

身も蓋もねえなあ……；

今作、いろいろと中途半端な作品になりそうで申し訳ないです；  
それでも、面白い作品になるようこれからの作業を頑張り、完結までノンストップでいきたいと思っています

ううん、ダンボール戦機(アニメ版)のOPは何かイイ

### 第三十二話 虚空の傍観者

「兄様！ のんびりしてないで早く行こうよ」

「ち、ちよつと待って。まだ鼻緒を結んでないから」

蒼狼の里では半年に一回の周期で小さな祭りが行われている。

社から続く一本道がお祭りの屋台と提灯の明かりに照らされて里中の人たちが大騒ぎする。

「俺は騒がしいの嫌いなんだけど」

蒼狼は姿を消しつつ眼下の様子をうかがう。

別に姿を見られても構わないと言えは構わないのだが、余計に騒がれるだけは御免被<sup>む</sup>りたい。

「相変わらずガキどもは元気だねえ……」

千花と凜が仲良く手を繋ぎながら……、いや、どっちかっつて言つと凜が千花を引っ張り回してるようにも見える。

二人はそのまま人混みをかいくぐって社へとまっすぐ走ってくる。

ちよつと社の中心に志星の姿も見えた。

巫女だから何か役割があるんだろう。

俺はほとんど寝て過ごしているから覚えていないが。

「……？」

下が賑わっているというのに、微かに感じた無粋な影に蒼狼は眉根を寄せた。

結界の近くに誰がいる。

誰かがこちらの様子を覗いているような、嫌な視線だ。ただ気配は一瞬だけで、すぐに視線は感じなくなった。

「消えた、か。……ん？」

ふと社の方に目を向けてみると、志星がちよいちよいと手を振っていた。

何か用なのだろうか。

ただでさえ喧しくて気分が悪いのに、いったい何の用だろうか。人混みから少し離れた茂みの中へと向かうと、志星がちよんと立っていた。

「何だよ。何か用か？」

「ん、ちよっとお話がしたくてさ」

「話だぁ……？」

俺は何も話すことなどないぞ。

それに、別に今日じゃなくなっただっていいだろうに。

「これからね、ちよっと人に会いに行かなきゃならないの」

「んな時間にか。……って、まさかガキのお守りでもさせようってか？」

「察しが良いわね。その通り」

「……聖獣を何だと思ってやがる」

「あら、聖獣としての自覚あるんだ？」

「つとにめんどくさい巫女だよなぁ……お前」

さっさととんずらすればよかったか。

志星はクスクス笑いながら突然蒼狼の頭をばふばふ叩きだした。



「……おい」

「いいじゃない。減る物じゃなし」

と、志星の手が止まる。

蒼狼が顔を上げると、何故か志星の表情が暗かった。

暗がりです話しているせいか、とも思ったがどうやら違う。

微かに瞳が震えている。

「……どうかしたのか」

「ううん。何でもない。それじゃ、行ってくるから」

志星は踵を返すとどこかへと走り出してしまった。

蒼い巫女服の背中を見つめながら、蒼狼は首を傾げていた。

「……あんな顔、久々に見たような気もするが。ま、いいか」

面倒だが千花と凜のお守りをしなくては。

……とはいえ、遠目で眺めている程度だが。

・  
・  
・

蒼狼に言伝を済ませると、志星は里の外れにある結界石の下へと向かっていた。

「懐かしいな……」

ずっと前に蒼狼と一緒に調査したあの結界石は見事に修繕され、ひび割れは完全に無くなっているし、注連縄もしっかりと結び直されている。

あれからも、十年以上も経つのか。

月日というものは駆け足で過ぎていく。

それは、人にとってもそうであるし、妖怪や神とて同じことなんじゃないかと志星は思う。

「覗きが趣味なんて、ちょっと変わった妖怪なのね」

志星は背中に感じていた気配に向かって話しかける。

振り返ると、紫紺の瞳の少女が立っていた。

少女は軽く目を見開いて志星をジッと見据えた。

「どうして私がここにいるとわかったの？」

「夢で見たから。それから、貴女の悪だくみを未然に防ごうと思つて」

「……悪だくみ？」

紫紺の瞳がキツと鋭く細くなる。

志星の言葉を不服だと言わんばかりに顔を歪めた。

「貴女、ここを襲撃しようとしているでしょう？　お願いだから、止めてほしいの」

「……まさか、それだけで止められると思っているの？　ここの巫女はとんだ阿呆ね」

「やっぱり……ダメなんだ」

志星は結界石にもたれ掛かるようにして座った。  
首を微かに上げて夜空を見上げる。

「うん。ダメだってわかってた。今回はかりは、どうしようもない」  
「何の話かしら。意味が分からないのだけど」

「……夢で見た話。この里ね、もうすぐ滅んじゃうの」

「それは、私が襲撃するから？」  
「違うよ」

志星は即答した。

少女の方に視線を移すと、紫紺の瞳に志星の姿が映り込む。

「……聖獣様がね。この里を滅ぼしてしまうの。貴女も、その被害者になるのかな」

「私があのだ野獣に負けるとでも？ お笑いね。見くびらないでほしいわ」

「だから、お願いがあるの」

「……お願い？」

紫紺の瞳がさらに細まる。

言葉の意図が分からない。

この巫女はいったい何を考えているのだろう。

「……聖獣様を、倒してほしい。とっても強い人に頼んで、封印してほしい」

「どうしてそれを貴女が望むの。貴女、あの蒼狼の巫女でしょう」

「巫女だから。私が蒼の巫女だから頼んでいるの。夢で見た世界は、それはそれはひどいものだったのよ。たくさんの人と、妖怪が血に塗れていく。その牙と、爪と、力で消し去ってしまうの。この、時遅れの結界すら断ってしまうような」

「時遅れの結界……？」

そんな結界、初めて聞いた。

霊夢の言っていた特殊な結界とはこのことだったのだろうか。

「この里と、外界とでは時間の流れが違うんですって。ここの一年

が、外では一日にも満たないような短い時間なんですって。私もそれを見た時、驚いたけど」

「見た……ですって？」

「言ったでしょう。私は夢を見るの。過去現在未来。ありとあらゆる夢。けっこう嫌な能力なの」

「……………」

志星の頬に涙が伝う。

黒の瞳が揺らぎながら少女を見据えた。

「ね、だから、お願いだからこの里を放っておいてほしいの。聖獣様は、何もしないよ。貴女の思ってるような、悪い獣じゃないの。とても優しい、私たちの守り神で、大切な友達なのよ」

「……言いたいことはそれだけね」

「……臆病者」

紫紺の少女が微かに笑う。

「何とでも言いなさい。私は、この幻想郷を守るだけよ」

そう言っつて、少女が振り返るとその姿がかき消えた。

一人残された志星はごしごし涙を拭いてからもう一度夜空を見上げた。

第三十二話 へ 虚空の傍観者 へ (後書き)

もう修正が効かないレベルだ……；

今作は恐らくこのままグダグダ進んでいくと思います；

マジでヤバイ。

今すぐにでもリセットしたいレベルだなこりゃ……

### 第三十三話 へ 崩壊の足音 へ

「兄様！ アレやってアレ！」

千花をずるずる引きずりながら凜が指を指したのは射的の屋台だった。

屋台の奥には大小様々な景品が並んでいて、手前の台にコルク栓を弾とする子供には少し大きめの銃が置いてある。

「兄様は得意でしょう？ よくばちんことが当ててるもんね」

「う、ううん。でも、それとこれはあんまし関係ないと思うんだけど……」

凜に促されるままに銃を取って片目を瞑って照準を合わせる。

小さなお菓子の箱やぬいぐるみ、何故かきゅうりとかナスまで景品の中に並んでる。

とりあえず、千花は一番手前のお菓子を狙って引き金を引いた。

ポンツと間抜けな音がしてコルク栓が飛んでいくと、お菓子の箱がコテンとあっさり倒れてしまった。

「やった！ 兄様大当たり！」

「まあ、あんなに小さい的ぐらいなら誰でもできるよ」

それから千花は狙う的の大きさを少しずつ大きい物に変えて命中させていく。

もらったコルク栓の弾全てを綺麗に命中させ、店主の度肝を抜いてやった。

「さすが兄様！ 百発百中だね！」

「毎日練習してるからこれぐらいはね」

千花は志星の教えで毎日弓の稽古をしている。

それは千花自身の護身のためと、精神を鍛えるためだと志星が言っていた。

その腕は一級品。

しかし蒼狼はその能力のタネを知っている。

「アイツ、志星の血のせいかな妙な力を持ってるんだよな」

微弱、本当に弱過ぎて普通の人間や妖怪じゃ感じ取れないようなほどの弱さだが、千花は微かな能力ちからを秘めている。

恐らく『狙いを外さない程度の能力』

千花が意識した場所にその攻撃が必ず命中するといったものだ。

例えば、川面に映る魚影に小石を投げれば素早い魚影と言えど必ず命中する。

一度狙ってしまえば、もちろん回避することは出来ない。

「……ま、今のまんまじゃ時々外すんだよな」

一度稽古してるところを見物したことがあるが、まだはつきりとコントロールしてる様子はない。

時々の奥の壁に矢が突き刺さってたりしたこともあった。

とはいえ素質はある。

能力のコントロールさえ出来てしまえば、数日でマスターするだろう。

「じゃあじゃあ！ 次は次は……あッ！」

千花の手を引こうとしたその矢先、凜は行き交う人にぶつかって派

手に転んでしまった。

泣くな。

こりゃ泣くぞ。すぐ泣くぞ。ほら泣くぞ。

蒼狼の予想通り、凜は滝のような涙を流しながら泣きだした。

「ふ、ふええん！ い、痛い！ 痛いようう！」

「もう、前見て歩かないとダメだろう？」

人混みのど真ん中でしゃがみ込んでしまった凜に、千花がそっと手を差し伸べる。

いつもながら優しい兄貴だ。

…… 本当は弟なんだが。

「あー、というか早く終わんねえのかよこの祭り。眠いわだるいわで散々なんだが……？」

まただ。

誰かの視線を感じる。

しかも、今度は一人じゃない。複数だ。

蒼狼は首を回して里を一望する。

結界に綻びは感じない。

だが全身に、いや、里全体を監視するような視線を蒼狼は感じた。

「んだよ……？ 結界は機能してる。外から見えないはずのこの里をどうして見てやがる……？」

ただの勘違いか。

それにしても妖気の量がけた違いだ。

大妖怪とか呼ばれるような代物が外でごろごろしてる。

今すぐにでも、この里を消せるぐらいの力を持った奴ら。



眼下で幸せそうに笑う人々。

そして千花と凜。

……そういえば、志星は何処だ。

誰かに会う約束があるとか言っていたような気もするが、この里の人間はほとんど社に集結しているというのに、いったい誰に会うのだろうか。

崖から見下ろして里を見回すが姿は見当たらない。

「……俺が行くしかないか？」

それとも志星を探したほうがいいのだろうか。

志星に住人を避難させ、その隙に自分が妖怪を引き付ければ被害を抑えられるかもしれない。

とにかく、志星を探そう。

蒼狼が腰を上げた瞬間、重々しい咆哮が耳に届いた。

「……………ッ!？」

突然響いた咆哮に、住人がその場で動きを止め顔を見合わせる。

「おい、今の声なんだ……………」

「聖獣様……………か？」

「いや、聖獣様は狼だからこういう風に吠えないんじゃない……………」

「じ、じゃあまさか……………!」

千花と凜が里を振り返った瞬間、突然里の方から火柱が上がった。それは天までも焦がせそうなほどに高く、それは狼煙のようにも思えた。

「う、うわあああああ!？ さ、里が!？」

「火事！？ いや、でもみんなここにいるのにどうして！？」  
「妖怪だ！ 妖怪がいるぞ！？」

誰かが叫んだ瞬間、その場にいた全員がどよめく。

結界に守られているはずなのに、なぜ妖怪の襲撃が？

予想外の出来事に、ある者は混乱しある者は泣き叫ぶ。  
それはまさに阿鼻叫喚の光景。

四方八方へと逃げ惑う人々。

「チツ、人間つてのはこれだから……！ 仕方ない」

崖から一気に下りると、住人達にその蒼き姿を晒して叫んだ。

「落ち着けてめえら！」

「あ、蒼い狼……！？」

「せ、聖獣様だ！」

視線が一気に集中し、どつと押し寄せてくる人間を一喝すると右に  
左に視線を動かして志星を探す。

……が、見当たらない。

もう一度舌打ちすると、蒼狼はその首で社裏手の祠を示し、

「てめえら！ 可能な限り下がれ！ この境内はある程度なら結界  
が張られてる。なるべく奥へすっ込んでろ！ いいな！」

それだけ叫ぶと、蒼狼は鳥居をくぐって里の方へ向かう。  
途中、志星の姿をやっと見つけた。

「おい志星。妖怪の襲撃だ。住人を守ってろ」

「ええ。わかりました。……聖獣様」

「なんだ」

「……結界を重ねがけしたら私も援護に向かいます。それまで、どうか気をつけて」

「ヘッ、人間の援護なんかいらねえよ。俺一人で十分だ。……早く行け」

志星が境内へと走っていく様を見送ると、自分を奮い立たせるように一度大きく遠吠えする。

首と手足を軽く振って調子を確認する。

……そういえば最近戦ったような覚えがない。平和ボケってヤツか。

「守り神らしく、守ってやろうじゃねえか」

勢いよく地を蹴って突進すると、目の前の巨軀に向かって牙を立てた。

### 第三十三話 へ 崩壊の足音 へ (後書き)

そろそろ本気で恋愛モノか怪しくなってますw  
あとでタグをいじっておこう。うん。

そういえば、空想夢の方で感想を頂きました。  
未だにちよいちよいアクセス数があるんですね。  
書き終えた作品でも、感想もらえると嬉しいです。

第三十四話 へ 蒼から赫 へ (前書き)

今回、少しグロ注意

### 第三十四話 へ 蒼から赫 へ

「おおおおおおおおおッ!!」

咆哮。

野獣のような荒い咆哮を上げながら蒼狼は目の前に対峙する妖怪に向かつてその牙を、爪を突き立てて引き裂いていく。

とはいえ、前に相手したような下級の妖怪ではないためそれも容易にはいかなかった。

最初の一匹を仕留めた蒼狼は次いで飛びかかった妖怪にあっさりと体を掴まれてしまった。

「が!？」

「はッ、聖獣つてのはこの程度かよ。ただのデカイ犬だけじゃねえか!」

そのまま無粋な力で投げられ蒼狼は壁に激突。衝撃で肺から空気が漏れ、一瞬息が止まる。

「……チイツ、一筋縄じゃいかねえな。しかも」

今しがた蒼狼を放り投げた妖怪の後ろに、さらに巨大な妖怪が二人構えている。

一人ならともかく、複数相手は本当に骨が折れそうだ。

姿勢を低く保ち威嚇していると、突然目の前の妖怪の体に青い光の縄が絡んだ。

「な、なんだ!？」

「志星か!」

「加勢するわ。聖獣様」

こんな状況だというのに、志星は小さな札を握りしめながらウインクして見せた。

「超余裕ってことか。相変わらず恐ろしい小娘」

「背中、空いてる？」

「今回だけだぞ」

志星を背中に乗せると、懐かしい感触が背中に伝わる。  
そして素直に言った。

「……重くなつたな」

「あれから何年経って私がいくつになつたか知ってるでしょ？」

「人間の歳なんか興味無いつての」

軽口を叩きながら走り出すと、二人で妖怪の中へと飛びこんでいく。  
志星が術で妖怪の動きを拘束し、止まっている間に蒼狼が仕留める。  
巫女と守り神の見事なコンビネーション。

戦意が高揚していく蒼狼に対し、志星は微かに眉根を寄せて妖怪を見据えていた。

「どうした、志星。ボケつとしてるんじゃないよ」

「……妖怪の数が少ない」

「ああ？ だから何だって……ッ!？」

嫌な予感が頭を過ぎり社を振りむいて戦慄した。  
社を守っているはずの結界が消えている……! !

「……ッ、ざけんなボケがああッ! !」

襲いかかる妖怪を力づくで吹き飛ばし社へ向かって走り出す。  
間に合え、間に合え。

心の中で住人の無事を祈る声が響く。

「……………もう、間に合わない」  
「黙ってるッ！ 阿呆！」

階段を一気に跳んで境内へ着地、と同時に右足に生温かい感触が伝わった。

「……………」  
「……………」

何かの、肉だ。

血まみれになって転がった何かの、肉。

何か、なんて言う必要もないのに、それを認めようとする心が拒む。  
だが、目の前の光景を視認してしまった瞬間、否が応でもそれを理解してしまう。

「ぎゃあああああああああ！！」

人の断末魔が、目の前で反響する。

巨大な人型の妖怪が両手で、布でも引き裂くかのように人を裂いていた。

絶叫と、血と、肉が四散して蒼狼の足にかかる。  
温い、いや、散ったばかりの血肉は熱かった。

「……………ざけんな」  
「……………」



牙を噛みしめる。

強く、強く、体全体までもが軋むぐらい強く噛みしめる。

蒼い毛並みが輝く。

閃光にも思える鋭い光が全身を包みこむと、蒼狼が蒼白く光り輝きだした。

「これは……」

「ぜってえ許さねえぞ……てめえらあああああああ!!」

張り裂けんばかりの咆哮。

地を、空を、そこに存在する森羅万象全てを震わせるような咆哮が社を包みこむ。

「ッ!？」

志星の目の前の世界が一瞬、真っ白になった。

眩し過ぎて直視出来ないその光に包まれると、体が焼けるようになった。

いや違う。

本当に志星の体が焼けていた。

全身に襲いかかる激しい熱に顔をしかめ叫ぼうとした瞬間、世界が色を取り戻した。

そして目の前の妖怪が跡形も無く、消え去っていた。

「こ、これほどまでに強い力なの……!？」

「オイ、志星」

普段の声とは違う、低く、唸るような声に呼ばれ志星は思わず体を硬直させた。

蒼狼はしゃがんで志星を滑り落とすと里の方へと体を向ける。

「……………」

「せ、聖獣様……………」

「ソコニイロ。スグニモデル」

「ま、待って！ な、何をする気なの！？」

「……………」

「答えて！」

それでも蒼狼は振り返らない。

燃え盛る里を睨み続けて、やがてその姿が霞んで消え失せた。

「……………違う」

志星はその場にうずくまり、呟いた。

私の見た夢と、違う光景。

今日の前で広がる炎は同じなのに、こんなにも違う景色が目映っている。

これは、一体どういうこと？

「まだ気づかない？ 蒼の巫女」

「……………八雲、紫」

いつ現れたのか、志星の背後に紫が立っていた。

紫紺の瞳が志星を見据える。

「ついに壊れてしまった。人というリミッターを目の前で壊され、怒りに身を任せて暴走する……………」

「どういう……………意味……………」

里から悲鳴と咆哮が混じったような恐ろしい声が聞こえてくる。里の方で、蒼い光が縦横無尽に舞っている。

舞うたび、赤い血飛沫がほとばしって里を染めていく。

赤く、赤く、赤く。

蒼狼の毛並みも、だんだんと赤に染まっていく。

その姿を、もはや聖獣とは呼べない。

深紅の悪魔か、邪神だ。

「優しい獣ほど、激昂した時の怒りは凄まじいわ。自分の身を守ろうとすれば尚強く、大切な人を守ろうとすれば更に強く、怒りの度合いは増していく。それこそ、自分では制御できないほどに」

「じゃあ、もう元には戻らないの……？」

「さあ、それは私の預かり知らぬ話」

「そんな……」

「ご自慢の夢でも見たらどうかしら？ 貴女にとって都合の良い素敵な夢をね」

「……幻想郷の賢者が訊いて呆れます」

「何とでも言いなさいな。私は、この幻想郷を愛しているの。穢すうとするものなら容赦はしないわ」

そして紫は日傘を開いて、すき間へと消えていった。

ポツンと残される志星。

ふと、あることを思い出してハッと顔を上げた。

「……千花、凜！？」

姿が見えない。

社を見回したが、子供の死体の中に二人の亡骸は見当たらない。

まだ生きていて、逃げたのか。

それとも……

「千花！ 凜！？ どこ、どこななの！？」

我に帰った志星はすぐさま立ち上がりふらつく足で走り出した。

「無事でいて……二人とも！」

第三十四話　　へ　蒼から赫　　（後書き）

もう恋愛の片鱗すら感じられない過去編；

これからどう展開していくのか、自分でもドキドキしてます。

駄作になりませんように……

それと、ひっさびさに紅葉記に感想いただきました。

もうほとんど見向きもされていないだろうなと思っていた分、すごく嬉しかったです。

ちゃんとお返事しないと！

第三十五話 へ 憎しみを身に染めて へ (前書き)

グロ注意

### 第三十五話 へ 憎しみを身に染めて へ

憎い。

目の前にいる存在全てが憎い。

「ウウアアアアアアアッ！！」

地を蹴り、里を蹂躪する妖怪を片っ端から潰す。

目に付いた妖怪を、裂く、砕く、屠る。

全身に宿る力が蒼狼の思い通りに妖怪を消し去ってくれる。

恐怖に慄く妖怪の顔がまた一つ、潰れる。

一つ、一つと周囲に深紅の花弁を撒き散らし、自身を含め赫の世界に染めていく。

お前らが消した。

お前らが消したんだ。

目の前で、容易く命を消した。

気に入らない。

気に入らない。

俺は、お前達の存在その物が気に入らない。

「うあ、つく、あああああああ！？」

また一つ赫の華が出来上がる。

別に美しくも何ともない、どうでもいい華だ。

雑草を踏み潰すそれと同じように踏みしめ、牙を立てていく。

目に映る全てが気に入らない。

目に映る全てを、否定していく。

戦慄する妖怪を捉え、淡々と消していく。

何度牙を立てただろう。

何度爪で裂いただろう。

いつしか蒼狼は全身が深紅に染まっていた。

もはや聖獣じゃない。

ただの野獣だ。けだもの

「ガアアアアアアッ!!」

地に響き渡る咆哮。

もう何度叫んだだろう。

否、どうして叫ぶのだろうか。

どうして妖怪を喰らっているのだろうか。

もう、どうでもよかった。

そんなことを考えるのさえ煩わしい。

本能に揺るがされるまま敵を喰らい、喰らい、喰らい続ける。

それは、快感だった。

「ハアッ……ハアッ……」

牙を滴る血が流れ落ち舌につく。

味など分らない。

が、それが美味いとだけは分かる。

そうか、飢えているのか。

なら話は簡単だ。

「……………」

体を社に向けて歩きだす。

一步、一步。

邪魔な“物体”を消しながらゆっくりとした歩調で歩く。

階段を飛び越え境内に立つ。



……社の裏手から匂いがした。  
美味そうな匂いだ。  
久しく喰らっていない匂いだ。

「聖獣様あ！」

都合よく社の裏手から香りが漂ってきた。  
目の前に現れた銀の髪の少女を見て、笑った。

「だ、大丈夫！？ 聖獣様、ち、血だらけ……！」

一歩前に進み鼻先で少女を小突く。  
何が楽しいのか、少女は真っ赤に充血した瞳で笑顔を作って見せた。

「え、えへへ。妖怪がいつぱい来たけど、兄様に守ってもらったんだ。兄様が弓で」

少女の首を、何の躊躇いもなく喰らった。  
肉は薄く骨身で無駄に歯応え。  
しかし、味は格別だった。  
目の前に転がる肉片を綺麗に平らげると、視線を動かし匂いを探る。  
まだ、社の奥から匂いがする。

「せ、聖獣様……？」

再び目の前に人が現れる。  
今度は弓を抱いた少年。  
しかし表情は戦慄に凍りつき、全身を恐怖で震わせていた。

「え……？ 今、凜がこっちに来て聖獣様を見つけたって言って……」

「……！」

「千花、逃げなさいッ！」

割り込んできた声と同じタイミングで少年に襲いかかる。

微かに身を動かし回避された、が、少年の片腕を吹き飛ばすことだけは出来た。

「ッ！？ わ、ひぐ、あああああああ！？」

「千花！？」

蒼い巫女服の女が駆けよりその身を抱く。

少年の右肩から先が消え失せている。

噴水の如く吹きだす鮮血が、少年の死に彩を添える。

「……………」

「……………私も、喰らうのね」

震える双眸が蒼狼を見据える。

決して視線を反らせずに。

「……………」

「もう、私も分からない？ その力で、貴方の記憶すらも消し去ってしまったの？ ねえ、答えて」

「……………」

何を言っているのか、分からなかった。

野獣を目の前にしているというのに、この女は何故こんな戯言を。

「『激昂を奮<sup>ちから</sup>う程度の能力』。普段は決してその能力が発動することはない能力。しかし、自分の身に危険が及んだり、自分にとって

大切な人が傷付いたその瞬間、怒りや憎しみ、悲しみ全てが作用し暴走し、ありとあらゆる物を破壊する力になる……。貴方はもう、私たちとの記憶まで壊れてしまったの？」

「……………」

まだ戯言を言い続けている。

何だこの女は。

忌々しい。

さつさと喰らって黙らせよう。

姿勢を低く構え、女の喉元に狙いを定める。

たかが人間だ。

この爪で裂けば、この牙を立てれば、一瞬で終い。

女はやがて顔を伏せ、かき消えそうなほど小さな声で言った。

「…………そう。わかったわ。好きに、しなさい」

言われるまでもない。

両手を広げ、構える女の喉元に牙を立てた瞬間、女は絞り出すように一言告げた。

「知らない妖怪に喰われるより、愛する友に喰われる方が、よっぽど幸せよ」

境内にまた一つ、赫い華が咲く。

ひとしきり人の味を堪能した蒼狼は、背後から忍び寄る気配に気づき体を向けた。

「…………惨い事を。貴様、それでも聖獣なのか」

背と腰に長さの異なる刀を帯刀した初老の男がそこにいた。

薄緑色の羽織りに、傍らに白く透けた物体を浮かべているその男は、その銀の瞳に赫く染まる蒼狼を映す。  
何故か、男の顔が歪んだ。

「……今自分がしていることも理解しておらんようだ。能力の代償にしては、少し高過ぎやしないか」

その眼は何だ。

殺気も見せず、何故俺に慈愛のような眼を見せる。

俺を、憐れんでいるのか。

気に入らない。

気に入らない。

体に力を込めもう一度低く低く構える。

今殺った人間と同じように、首を裂けばそれでいい。

脚を開放するように蹴り一直線に男に飛びかかる。

爪で触れた肉の感触、は霞みの如く消え失せ、いつの間にか男は蒼狼が元いた場所に立っていた。

憂いを帯びた銀の瞳が再び蒼狼の姿を舐める。

「可哀想だが、お主を斬る。怨むなら、自分の弱さを恨め」

自分の弱さ？

何を言ってやがるこの老害は。

人間の分際でこの俺に説教か。

一度攻撃を避けただけで図に乗るな。

「……来い。儂が迷いを断つてしんぜよう」

そう言って、男は腰に帯刀していた短めの刀を抜き、右手だけで構えた。

### 第三十五話　へ　憎しみを身に染めて　く　（後書き）

お気に入り登録ユーザーが増えました。

現在１８人

こんな俺を登録していただき、ありがとうございます。

そして……今更ですが、グロいシーンを書くのはドキドキします。  
でも、ちょっと安っぽいグロさですよねえ……

と、いつもながら悲観的な後書きばかりですいません；

感想、ご意見等、毎日お待ちしております。

それと、時々活動報告でもお知らせしたりするんで、興味のある方はブックマークなり何なりしてみてくださいな。

海鳴譚は一から調整し直すので、今日からしばらくお休みです。  
重ね重ね申し訳ないです；

### 第三十六話 へ 剣々轟々 へ

目の前で構える男を見据え、蒼狼は低く低く構えた。

……構えるだけで、一度も攻撃はしなかったが。

「どうした、かかってこんのか」

「……………」

切っ先を微かに揺らして挑発する男を見て、蒼狼は低く唸り声を上げた。

隙が無い。

もしかしたら、この男には隙など存在しないのではないだろうか。

そう錯覚させるほどに、男は脇を締め堂々と構えている。

恐らく、男のどこに狙いを定めても軽く往なされてしまう。

蒼狼はそう確信した。

「来ないのなら……こちらから、参ろうか」

「……………ッ！」

刹那、男の瞳が鋭く光ると同時に手にした刃が燐光を纏い一直線に振り下ろす。

刃が煌めくと同時に蹴って右へ回避すると、元いた場所に地面を抉るような大きな裂傷が出来上がった。

反応がもう少し遅かったら、確実に御陀仏だった。

追撃を警戒した蒼狼は大きく後退して男と距離を取る。

「距離を取る思慮はあるのか。……いや、それは思慮というよりは生存本能か」

「……………」

なんだこの人間は。

いや、こいつは本当に人間なのか。

地面を一瞬で断った太刀筋は、とてもただの人間とは思えない。

妖怪か、あるいはその手の類の神か。

しかし男から微かに感じる気配は、人間のそれと似ている。

似ている、というのは、その気配に異質なものを感じ取ったから。

「……………」

男の周囲に浮かぶ白い物を見て蒼狼は感づいた。

あれは……半霊体。

人間と幽霊との混血の証。

しかし、たったそれだけのことであの威力なのだろうか。

「何を勘繰っておる。そんな暇があるのなら攻撃してみたらどうだ」

「……………ウルサイ」

男が眉根を微かに上げた。

「ほう……人語を話すか」

男の言葉はここまでで途切れた。

蒼狼が一瞬の隙を捉え襲いかかる、が、案の定男は右手の刀で鮮やかにその牙を受け流した。

しかし、蒼狼はその勢いのまま崖を蹴り、さらに加速させて男の頭上を捉えた。

ついにこの牙と爪とで男を引き裂ける、と思った瞬間、

「…………グッ!?」

顔面に柔らかな衝撃が当たり、思わず退いた。別に傷を負ったわけでもないのだが、その妙な違和感を伴う衝撃に混乱した。

すると、男はカッパと声高らかに笑った。

「受け流した勢いを更に加速させ、不意を突くその意気や良し。しかし、この半霊体を視野に捉えなかったのは失敗だったの」

今男の正面には、ふよふよと半霊体が浮かんでいた。

男が拳を作ってぐいぐい押してみせると、半霊体はクッションのようにはやりとへこんだ。

不可思議な衝撃の正体は半霊体だったのか。まさか実体を伴っているとは気づかなかった。

水をくらった犬のようにぶんぶん首を振ると、一度息を整えた。

「では、少し面白い物を見せてやろうかの」

クツクツと笑いをこぼしながら、小さく印を切って呟く。

「魂符『幽明の苦輪』」

すると、ふよふよと漂っていた半霊体がぐにやりと歪み、人型を模した。

そのままぐにやぐにやと形を形成していくと、やがてそれは男そっくりに、いや、そのものが出来上がった。

「ま、これは女子供の遊びのようなもんだがの。しかし、遊びの術といえど儂が使えば」

「ツツ！！」



言葉の意味を察した蒼狼が高く飛び上がる。

今しがた居た場所に一人が刃を叩きつけ、そしてもう一人は蒼狼の頭上で刃を振り下ろす。

回避が、間に合わない。

鼻先に鈍い衝撃が襲うと天地が逆転し、背中から地面に叩き付けられた。

「これこのように。機敏なお主を捉える事が容易くなる」

「……チィ」

砂と血の混じった唾液を吐き捨て牙を剥く。

こいつ、遊んでやがる。

今の一撃、峰で打ちやがった。

「何を呆けた顔をしておる。また何か勘繰っておるのか」

「……オマエ、ナニガモクテキダ」

「儂の目的か。もちろんお前さんを退治することじゃが」

「ソノワリニヤイバガトドイテイナイ。ホンキデヤツテイルノカ」

「本気を出すと、お前さんは一瞬で死んでしまうからのう」

「ナニヲ……ッ!？」

刃に遮られ、言葉を失う。

刹那、男は一蹴りで蒼狼の下へと距離を詰めると蒼狼の喉元に刃を突きつけた。

速過ぎて、眼で捉えることが出来なかった。

「……ん。しかしこの老体で本気を出すのは骨が折れるの。老い先短い人間のすることじゃないわい」

そして何故か男は突きつけていた刃を引き後ろに跳んだ。  
その行動の真意が分からない。  
本当に、一体何を考えているのか。

「……主、一つ訊きたい」  
「ナンダ」

何かを狙っているのか、低く構えて警戒しながら答える。  
依然として、切っ先は蒼狼に向かっている。

「主はもう、理性が戻っているな？」  
「……………」

答えは、簡単だ。

「……………！ くッ！？」

男の体に神速の一撃を見舞ってやる。  
予期せぬ攻撃に男は体を曲げて後方へと吹っ飛んでいき、そのまま壁に激突する。  
崩れ落ちたところに追い打ちをかけるため、高く飛び上がり腕に蒼の光を灯す。

「くう、抜かったか！ ならばッ」

男が懐から何やら取り出し、こちらに向けて投げつけてくる。  
これは、符か。  
符は微かな光を放ちながら雨の如く注ぐ。  
舐めた真似を。  
それぐらいの攻撃が通用するとも思っているのか。

「ッ、アアアアア!!」

咆哮だけで符を吹き飛ばし、まっすぐ男へと急降下。

後はその喉元を喰らえばそれで終わりだ。

……終わって、欲しかった。

その舌に、土の無味な味が広がる。

蒼狼の顎は男ではなく地面を抉っていた。

「やれやれ。間一髪じゃった」

背後から聞こえる男の声。

と同時に走る激痛。

男は蒼狼の背に立つと蒼き毛並みに向けて刃を突き立てた。

鮮血が迸り、全身から力が抜け、意識が揺らぐ。

鞘に刀を収めると同時に、蒼狼は地面にその身を埋めてしまった。

第三十六話 へ 剣々轟々 へ (後書き)

妖夢の師匠なら、妖夢の術符や技を使ってもおかしくない……ハズ  
もう少ししたら蒼狼の記憶シナリオは終了かな。

さて、元の話の時間軸に戻ったらどんなお話になるのかな？w

### 第三十七話 へ 蒼の魂 へ

……背中が痛い。

刃で刺されたのだから当たり前。

だが、致命傷ではない。

故に、未だ蒼狼の見る世界には色がある。

ぼやける視線の先で、薄緑色の羽織の男がこちらを見つめている。

「主、泣いておるのか」

「……違うね。これは眼から出る透明な血だよ」

「ほづ……それはそれは。何とも美しい血じゃな。初めて見たわい」

どつかと腰を下ろして胡坐を組むと、蒼狼と同じ目線になって言った。

この老害、ホント何なんだ。

俺を退治するんじゃないかったのか。

「主の能力のこと、聞いた。随分と難儀な能力じゃな」

「……………」

激昂を奮う程度ちからの能力。

これは能力ちからじゃない。

ある種、病に近い物だと思っている。

コントロールしようにも、出来ないのだ。

怒りというものは、自分の意思だけでは完全に発揮されない。

自分が傷つけられたり、誰かが傷ついたり、自分と、もう一つの要

因が必要なのだ。

自分にとって大切な誰かが、傷つけられた

自分にとって大切な誰かを、殺された。

自分と、必ず“誰か”という要因が必要な能力。

だから蒼狼は、ずっと一人で生きていた。

自分を巻き込まないために。

誰かを巻き込まないために。

だが、実際はこの様だ。

「……………アンタ、名前は？」

すると男は、おおそうかと手を打ち名乗りはじめた。

「僕は魂魄妖忌<sup>（たまはくようき）</sup>。冥界にある白玉楼という屋敷で庭師を務めておる」

「庭師……………？ 護衛か何かの間違いじゃないのか」

すると妖忌は微笑しながら答えた。

「ま、確かに護衛もしとるがの。どのみち僕の役目はもうすぐ孫が  
継ぐじやろうて」

「孫がいるのか、アンタ」

「おうおう。自慢の孫じゃ。何なら写真でも見るか？ 文字通り目  
に入れても痛くないほどに可愛いんじゃ、ホレホレ」

「……………いい」

ついさっきまで命のやり取りをしていたというのに、孫の話になっ  
た途端顔をデレッデレにしながら勝手に自慢話に花を咲かせ始めた。  
……………オイ、いちいち写真を顔に押し付けるな。  
近過ぎて見えねえし。

ひとしきり語って満足したのか、妖忌は写真を懷に収め急に真顔に  
なった。

「さて、僕はとある人物との約束で主を封じなければならない。だ

が……」

「何だよ。まだ孫の自慢話する気かよ」

「確かにまだまだ語りたいことは山ほどあるが」

「……いや、あるのかよ」

とんだ孫バカジジだ。

俺こんなのに負けたのか。

スゲー悔しい。

「主、さっきから儼以外の物を見据えておるじやろっ」

「……何のことかね」

妖忌は何も言わず、顎だけしゃくって示した。

その先には、片腕を失くして倒れる千花の亡骸が転がっていた。

「あの子供だけ原型を留めておるのう。そしてお主、自身の妖力を使つてアレを助けようとしておるな」

「おいおい。もう死んでる人間をどうやって助けるってんだ？ 無

茶言わないでくれ」

「本当に、死んでおればのう」

「………」

妖忌はよっこいしょとか漏らしながら立ち上がると、千花の亡骸のそばへしゃがみ込んで胸に手を当てた。

「……微かじやが、本当に微かじやがまだ生きておる」

「手遅れだ。妖力注いだって何も変わらねえよ」

「ならば、お主を注いだらどうじゃ？」

「………」

蒼狼は答えない。

答えを知っているというか、何となく予想がついているから。

「……少なくとも、人間じゃなくなる。半人半妖ってところか。千花の記憶も何もかも吹っ飛んじまうだろうけど」

「命は、助かるんじゃない？」

「……多分な」

ちっぽけな憶測の話だ。

「試す価値はあるじやろう。やってみい」

「簡単に言うよな……。さっきの傷、かなり痛いんだぞ」  
「それだけ、お主が迷っていたということじゃ」

妖忌は腰に帯刀している刀を抜くと蒼狼に示した。

「名を『白楼剣』<sup>はくろうけん</sup>。斬られた者の迷いを断つ剣。斬られた者の迷いが強ければ強いほど、その痛みも重かるうて」

「……迷い、ね」

俺は何を迷っていたのだろうか。

思い出せないということは、その迷いを断たれたということだろうか。

「……アンタ、俺を退治しなくていいのか」

「退治ならもうとづくに終わっておる」

「は？ 何を言ってるんだ。俺はまだ生きて」

「悪しき聖獣はもういない。ここにるのはただの蒼い狼じゃよ」

「……そうかい」



傷付いた体を起こし、ゆつくりと千花の傍へと向かう。

目を閉じ、意識を集中させて蒼い光を作る。

これは、俺の光。

蒼狼という力。

「いつ爆発するかわからねえ危険な代物だが、それで命を救えるのなら……な」

妖忌はその光景を静かに見守っていた。

光が千花の体へと吸い込まれ、蒼き聖獣の姿が霞んでいく。

とても穏やかな瞳だった。

「なあ、アంత」

「ん？」

「残った俺自身を、太刀にしてくれないか」

「……ふむ、よからう」

「ホントか？ そんなこと出来るわけないとダメもとで言ったんだがね」

「刀の鍛冶も心得ておる」

「恐ろしい爺さんだ」

苦笑を浮かべ、残ったわずかな光を妖忌へ託すと、その姿がさらに薄くなっていく。

「……必要のない忠告とは思うが」

「……何だ」

「少年が目覚め、行く当てが無いのなら白玉楼へと向かうがいい。恐らく儂の孫が助けてくれるじゃろうて」

「見ず知らずな俺でもか？」

「正義感の強い孫じゃからな」

「……俺が覚えてたら行ってみるよ。……じゃあな」

その言葉を最期に、蒼狼の姿は消え失せてしまった。

「さて、俺も行くかの」

蒼い光を手にしたまま微笑むと、妖忌は腰を上げて里を後にした。

第三十七話 へ 蒼の魂 へ (後書き)

ちよい長めの過去終わり！

んでもって次から時間軸を元に戻します。

チルノ書きたい天子書きたい；

けど、これ書き終わってからじゃないと……

### 第三十八話 へ 仲違い へ

「……これが、蒼狼伝承の全てよ」  
「……………」

文は手帳を握りしめたまま口を閉ざしていた。  
こんな、悲しいことがあるだろうか。  
自分の大好きな人を守りたいはずなのに、その意思とは裏腹に殺してしまっただなんて。

「おかしいです、紫さん」  
「……………」

文は紫を睨みつけながら言った。

「別に、彼は何も悪くないじゃないですか！ それなのに無理やり封印してしまうですって！？ 身勝手が過ぎませんか？」  
「これも、幻想郷を守るため……よ。どんな小さな脅威も放っておけないわ」

二つに分かたれた千花と蒼狼を見つめながら紫は言った。  
蒼狼の体がピク、と微かに動いた。

「……スキマ妖怪」  
「起きていたの、野獣」けだもの

「俺は……消されるわけにはいかなえ。まだ、まだ罪滅ぼしが出来ちやいねえんだよ」

「自身の消失が、一番の罪滅ぼしとは思わないの？」  
「それだって、考えたさ。だけど、それじゃ千花を助けた意味がな

い」

首を動かし、穏やか蒼の瞳で千花の姿を見つめる。

「……俺の罪滅ぼしは、千花を死なせないことだ。激昂を奮う能力は確かにこいつの内に眠っている。てめえの言うとおり爆発する可能性だってある。そうならないために、俺がこいつと一緒にいるんだ」

「……………」

紫紺の瞳は鋭く細めたまま何も言わない。

そっと右手を構え二人に向ける。

「それでも、僅かでも、可能性があるのなら」

「…………ツ!？」

紫の手の平から光弾が生じ放たれる。

身動きの出来ない蒼狼と意識を失っている千花。

その二人の目に前に、突如桃色の花弁が舞い上がり紫の弾幕と相殺して消えた。

予想外の出来事に、蒼狼も紫も、思わず体を強ばらせ身構える。

「ダメよお、紫ったら。おいたはいけません」

緊張感など微塵も感じさせないような声が響くと、紫が振り向き驚愕の表情を浮かべた。

目の前にいる、親しき友の姿に。

「ゆ……幽々子!？ どうして、ここに……………」

「藍にね、紫はどこに行ったの? って訊いたの。そうしたらこ

こだって教えてくれたの」

「……」

月に照らされた幽々子の微笑みに紫は微かな恐怖を抱いた。  
まさか、幽々子がそんな大胆な事をするなどとは夢にも思わなかった。

「……幽々子、貴女には関係のない話よ。今すぐ立ち去って」  
「関係あるわ」

澄んだ声が響くと、幽々子の表情が途端険しくなった。  
怒り、にも似た表情で紫を見つめ言った。

「彼は、白玉楼の使用人。そして使用人の責任は私の責任よ」

「何を我儘なことを！ 冗談でも何でもない、本当に危険な存在で……。今の話を聞いていたのなら分かるでしょう！？」

「ええ、よく分かりますとも。彼が、本当はとっても優しいってことが」

「……………」

紫が齒噛みするその後ろで、蒼狼はその言葉に体を真っ赤にさせていた。

あれが妖忌の守る白玉楼のお嬢様か。

千花の眼で見た時は、のほほんとした世間知らずのお嬢様なのかと思っただが、意外と強かな面もあるらしい。

でも、確かこの二人は親友だったはずでは……？

幽々子はゆったりとした歩みで紫を素通りし、千花と蒼狼の前で紫と向き直った。

「紫、今回だけは私も退かないわ。だって、私も貴女と同じ気持ち

ですもの」

「同じ……?」

文がその言葉に気づき紫に視線を移す。

紫紺の瞳が悔しそうに歪み、そのまま幽々子を見つめ返している。

紫のこんな姿を見るのは初めてだ。

思わず無心でカメラを構え……て、止めた。

さすがにそれぐらいの空気を読む常識は嗜んでいる。

「貴女、私を守りたいのよね。私を危険な目に遭わせたくないから、こうやって千花さんを封印しようとしてるのでしょうか?」

「……違うわ。これは、幻想郷を守るためで」

「紫なら、幻想郷を守るためなら躊躇しないじゃない」

「それは……」

紫が数歩後ずさって目を伏せる。

口げんかに負けそうな子供みたいな姿だった。

「……そうね。だったら、躊躇なくやればいいのよ」

「紫……?」

「『弾幕結界』」

「きゃあッ!?!」

突如放たれた雨のような弾丸に、幽々子は反応できず弾幕を全身に浴びてしまった。

激痛と、衣服の焦げる音と匂いが周囲に広がる。

「不意打ち、しかも、この私に攻撃なんて……!」

「相手が誰であろうと容赦しないわ。幻想郷を守るためですもの。多少の犠牲は止むを得ないわ」

「……本気で、言ってるの？」  
「……………そうよ」

無表情で紫が答える。

そして一歩ずつ距離を詰めながら、新たな弾丸をその手に握りしめる。

「ちょ、ちょっとお二人とも！？ 落ち着いてください！」

距離を詰める紫、それに合わせて一歩ずつ退いていく幽々子。  
やがて幽々子の背に蒼狼と千花を封じる結界がコツ、と当たった。  
横目でそれを確認して、迫りくる紫に視線を戻す。

「さ、退きなさい」

「……そうね。じゃあ遠慮なく退かせてもらっわね」

「……………？ どういう……ッ！」

幽々子の手が結界に触れる。

淡い桃色の光が輝くと、強固な四重の壁に包まれていた結界が幽々子の触れた部分から崩れ始めた。

幽々子が蒼狼にそっと目配せすると、千花を背負って蒼狼が飛び出す。

そして幽々子を背負うと、森の闇へと一目散に走り去って行った。

紫は一瞬駆け出そうかとも思ったが止め、その背を見送った。

「……追わなくて、よろしいんですか」  
「……………」

文の言葉に答えず、紫はそっと自分の世界へと戻った。



### 第三十八話 へ 仲違い へ (後書き)

幽「あらあら、久々に見た台本ね」

妖「わ、私の台詞……」

夜「あ？ んなもんね（ピチューン）」

久しぶりに書いた幽々子

でも、俺が今書きたいんわチルノと天子なんや……！

昨日見たもののけ姫のせいで、蒼狼のモデルがモロなんじゃないか  
と思い始めた俺

作者なのに……；

も、もちろん違いますからね！

ご感想、ご意見、お待ちしております！

アクセス数伸びてきてるし、もっというんな人からの感想も欲しい  
な！

基本ネガティブな人間ですけど、感想もらえばDetonation  
nモードに突入しますよッ！

ん、小さな花かい？

とつくの昔にやぎのぬいぐるみにしちまつたな……

元ネタわかる読者いるとスゲエ嬉しいんですがw

### 第三十九話 へ 闇を抜けて

「ねえ、蒼狼さん？」

「何だい、えと……幽々子様だっけか」

「あらあら。どうして貴方まで様付けなのかしら？」

蒼狼の背中の上で幽々子は笑みを浮かべながら言った。

こいつ、どこでも笑ってんな。

何て失礼な言葉は呑み込んで、蒼狼は答えた。

「千花はそうしてたからな。一応俺もそれに準ずるよ」

「二人っきりの時は呼び捨てで構わないって言ったんだけどね。まあ、貴方も呼び捨てで構わないわ」

「そうかい。んじゃ幽々子。これからどこへ向かえばいいんだ？」

里から東に向かって駆けているが、今のところ行く当てはない。紫から逃れるために適当に走りだしただけだ。

「とりあえず、白玉楼までお願いするわ。千花さんも休ませないといけないでしょう？」

「そりゃありがたい。……が、白玉楼ってのはどっちだ？」

「私が指差すから、それに従ってくださいる？」

「ん、了解」

早速指差された方向へ走るとやや開けた平原に出た。

月明かりに照らされた白い野を走り抜けると、また別の森へと入る。途切れ途切れに注ぐ月光を背に走り続けて、どれくらい経っただろうか。

やがて蒼狼達は森を抜け、小高い丘の上に辿り着いた。

「……ほら、あつちよ。冥界の門があるのだけど、貴方わかる？」

「冷たいような気配がする……。あつちか」

「そう。もう少しだから頑張ってね」

「千花は？」

「気を失ってるけど、大丈夫だと思う」

「そうか……。うっし」

丘を滑るように駆け抜けけると、蒼狼が感じた冷たい気配の方へ向かって走り出した。

・  
・  
・

やがて冥界へと辿り着き、白玉楼と思われる屋敷の屋根が目の前に映った。

「見えてきたな」

「……それじゃ、まずは千花さんの部屋に向かってちょうだい。妖夢とか侍女にも一言言わなきゃいけないし、貴方は部屋で待機してて」

「ああ。すぐに姿を消すさ」

屋敷の塀を飛び越え、ちょうど弓道場に着地して幽々子と別れた。

それから自室へ入ると、背に乘せていた千花をそつと降ろした。

まるで眠っているかのように思えるほど、その表情は穏やかだった。

……まさか死んでるんじゃないだろうな。

試しに爪で突っ突いてみた。

「う、……。うん」

「生きてる……。な。っというか、千花が死んだら俺も死んでるだろ

うしな」

押し入れを器用に開けてから薄い掛け布団を咥えると千花に被せる。千花の呼吸に合わせて上下する布団を見つめながら、蒼狼はその傍らに腰を落ち着かせた。

……すると、道場の方から妙な気配が近づいてきた。

「……？ 何だ、人の気配……か、これ？」

妖力を使って姿を消すと、千花の部屋に人影が一つ現れた。

「……あら？ 蒼狼さん？」

「って、幽々子かよ。脅かすんじゃないねえ」

姿を見せると、幽々子はまたしても微かな笑みながら口を開いてきた。

「ごめんなさいね。話をしたら遅れちゃって。侍女たちには、千花さんは私のわがままに付き合ってもらって疲れてるから、しばらくお休みさせるってお話しておいたわ」

「そうか。……で、妖夢には話をしたのか？」

「……うん、同じように話したわ」

「アイツにも、事情を説明した方がいいんじゃないかねえか？」

「どうして……？」

「……気配を消してるが、今アイツ道場のすぐ近くにいます。千花が気になっているのか、お前を気にかけてるのはわからないが」

幽々子がそつと顔を出すと、確かに道場の入り口で妖夢がうろつろしている。

千花を訪ねようか、でも、疲れてるなら明日でも……とか、ぶつく

さ言っていた。

「今日は、もういいんじゃない？ 貴方も疲れてるだろうし、千花さんも、まだ目を覚ましていないわ」

「幽々子がそう言うなら別にいいが。……なあ、幽々子」

「なあに？」

「……すまん。面倒に巻き込みまってさ。あのスキマ妖怪、お前の友達なんだろう？」

幽々子は力強く頷いて答えた。

「ええ。私の数少ない友人の一人よ。でも、どんなに仲の良いお友達だって、たまには喧嘩するでしょう？」

「そりゃ、まあ……な。だけど、今回は事情が違って」

「それに、千花さんも貴方も、今は私の大切な友人よ」

予想外の言葉に言葉を遮られ蒼狼は驚いた表情を作って見せた。面と向かって友達だと言われると、ちよつと照れ臭かったが。

「そ、そうか。友達……ね」

「じゃあ、私も部屋に戻るわね。おやすみなさい」

「……おう。おやすみ」

幽々子が部屋から出ていくと、同時に向こうで何やら話し声が聞こえてきた。

恐らく、妖夢と幽々子が何か話しながら歩いているのだろう。

「……俺もちつと寝るか」

だが、千花の部屋で寝るのは少し狭そうだ。

そつと部屋を抜け出すと、弓道場の隅に腰を落とした。

白い月明かりに照らされながら、蒼狼はゆっくり瞼を閉じる。

明日には、千花は元気になるだろうか。

もし元気になったら、そうしたら……

「……俺、本当にこれでよかったんだろうか」

自分のした行動は、千花を大きなリスクを背負わせてまで救った行動は本当に正しかったのだろうか。

誰に問うても、何処へ問うても、答えは返ってきそうにない。

### 第三十九話 へ 闇を抜けて へ (後書き)

評価ポイント、ありがとうございますッ。

他の読者さんも、感想とかポイントお気軽にどうぞ！

少し先の話ですが、今度は、今度こそはオリジナルを公開する予定です。

それが無理だった場合は、また二次造作かな；

## 第四十話 へ ポーカーフェイス へ

次の日の朝。

蒼狼は道場に近づいてくる気配を感じ目を覚ました。

人と幽霊が混ざったような不安定な気配。

言うまでもなく妖夢だろう。

姿を消して弓道場から顔を覗かせると、道場の真ん中で妖夢が木刀を構え立っていた。

恐らく朝の鍛錬だろう。

真正面を見据え、上段で構えをとると風を切る音が響き渡る。

「……さすがは自慢の孫ってところか。太刀筋はそっくりだし、かなり速いみたいだ」

と、独り言をもらした瞬間、妖夢の視線が弓道場に向けられ、

「やばッ!？」

「誰だ……ッ!」

慌てて首を引つ込める。

姿を消しているというのに、気配を感じ取ったのだろうか。

さすがあの妖忌の孫だ。

侮れない。

「……気のせいかな。今、誰かに見られてたような……。まさか、また天狗？」

天狗…… ああ、あの新聞記者の。  
安心しとけ、一応いない。



ひとしきり稽古を終えた妖夢は手拭いで顔を吹くと道場から出て、

「ん？ そっちは千花の部屋だろ……？」

道場から屋敷に戻るのではなく、何故か妖夢は千花の部屋へと続く廊下へ向かって歩き出した。

「……千花さん、具合はどうですか？」

戸の前で妖夢が千花を呼び掛ける。

当然だが返事が無い。

まだ千花は眠っているのだから。

「なるほど。千花を心配してるってことか」

返事が無いため部屋に入ることもしせず、妖夢は一礼してから千花の部屋の前から去っていった。

「って、幽々子はいつ妖夢に話すんだ？ ……ちょっと行ってみるか」

姿を消したまま池を飛び越え、蒼狼は幽々子の気配を頼りに屋敷へ向かった。

・  
・  
・

「そっなのよねえ。私もちよっと困ってるのよお」

部屋に入って開口一番、幽々子は眉を八の字曲げて困ったような顔を浮かべた。

「話すきっかけがうまく掴めないのよ。いきなり話しても混乱させちゃうし」

「……昨日は何て説明したんだ？」

「私のお使いで遠い遠い里まで買い物に行かせたって言ったけど？」

「……よくそれで納得したなアイツ」

「困ったわねえ……。いざこうなってみると何処から話せばいいのやら……」

「けど、妖夢だって俺のこと調べてただろ。本人を目の前にすれば理解も早いんじゃないか？」

「もうめんどくさいし、貴方が説明してくださらない？」

「めんどくさいからって俺かよ！　しかし、俺だって何をどう説明すればいいのか分かんぞ」

「……困ったわねえ」

扇子をパタパタさせながら幽々子がつぶやく。

その表情にどことなく余裕が見えるのは気のせいなのだろうか。

「ところで、千花さんは目を覚ましたの？」

「いや、まだ寝てるよ。ちゃんと生きてる」

「……もしかして、紫が貴方と千花さんとを分けてしまったから目を覚まさないのかしら」

「恐らくは、無理やり分離させられたダメージのせいだと思う。俺が何とか太刀の姿に戻れば多分目を覚ますとは思うが……」

「戻るの？」

幽々子の問いに蒼狼は首を振った。

「ちよいと妖力が足りないかもしれん。今日は満月だし、もしかしたら試すことが出来るかもな」

「満月だと妖力が回復するの？」

「多少はな。上手く千花という鞘に収まればそれで回復するかもしれない」

「もし失敗したら……？」

「さあ、どうなるかね」

何となく予想は出来ていたが、それを口にするのは止めておいた。蒼狼は腰を上げて部屋の戸を爪で開けようとして、目の前の気配に気づいた。

「……誰だッ」

爪で戸をひつかいて開け放つと、そこに銀の髪の少女が立っていた。

「な……！？ 妖夢！？」

「よ、妖夢、貴女どうして……！」

「妙な気配を感じたので参上しました。……それより、千花さんのお話ですよ。今、幽々子様とその方がお話していたのは」

淡々と、表情を変えずに妖夢が言った。

幽々子と蒼狼は顔を見合わせてから頷き、千花の事、それから蒼狼の事、身に宿る能力の事を洗いざらい話した。

話を聞き終えた妖夢は、相変わらず無表情だった。

「幽々子様、一つお伺いします。……千花さんが目を覚ましたら、その後どうするおつもりですか？」

「そうね……」

ちらと蒼狼を見やってから幽々子は答えた。

「千花さんは、もう私の大切な友達よ。だから出来る限り協力するつもり。だから、このままずっとお屋敷で一緒に暮らそうかなって」  
「……左様ですか」

少し、妖夢の表情が和らいだような気がする。

千花の事を案じ、安堵したのだろうか。

「わかりました。では、失礼します」

「え、ちよつと妖夢？」

「何でしょうか、幽々子様？」

幽々子の方が驚いてしまって、思わずその背中を呼び止めてしまった。

「それだけ？ 私はもっと狼狽うろたえるんじゃないかと心配してたんだけど」

「……平気ですよ。伊達に修行してませんから。では」

丁寧に礼をしてから部屋の戸を閉じそのまま去っていった。  
あまりにも呆気ない妖夢の反応に、幽々子はポカンと呆けてしまった。

「……修行しちゃうと、あんな風に冷たくなっちゃうの？」

「は。んな訳ないだろ。気づかなかったのか？ 妖夢の体震えてたんだぜ」

「え……？ 嘘、全然分からなかった……」

「妖夢もシヨツクなんだろうさ。さて、俺は夜まで一眠りするかな」

もう一度爪で戸を開けると、蒼狼は弓道場へ向かって跳んでいった。  
途中、千花の部屋の前に立つ妖夢を見かけたが、何も言わずに弓道

場の隅で腰を置いて瞳を閉じた。

……そういえば、アイツ俺を見て驚きもしなかったな。

#### 第四十話 へ ポーカーフェイス へ（後書き）

おまけ

妖夢が盗み聞きするシーンにて

妖「話は聞かせてもらった！ 私は魂魄妖夢！

大変だ、白玉楼は狙われているッ！

……ッて、この台本何なんですかッ！？」

夜「ぶ、ブイマッ（ピチューン）」

そういえば、もう少して空想夢の……

いや、何でもないッス

いつも読んでくれてる方々、ありがとうございます。  
感想とか、いつでも気軽にどうぞッ

## 第四十一話 へ 無言のさよなら へ

空に輝く新円の月が蒼狼を照らす。

蒼白い月光を浴びると、蒼の毛並みがいつそう輝いた。

「ふむ。こんなもんかね」

体の妖力を確かめるようにしながら少し体を動かす。

先刻よりかは多少回復しているらしい。

心無し、体も軽い。

「……で、どうしたんだよ。さっきから熱い視線なんか送ってきてよ」

弓道場へ入る戸口の傍にいる妖夢に声をかける。

驚きもせず、戸惑いもせずにこちらへ一歩踏み込んだ。

「本当に、蒼の聖獣だったんですね」

「今頃それが。ああ、そうだよ。お前の調べてた蒼狼信仰の蒼狼さ」

「一つ、訊いてもよろしいですか？」

「おう」

月を見上げたまま口だけで答える。

妖夢は戸口の傍に寄りかかってぼつりと言った。

「……千花さん、目を覚ましますよね？」

「多分、な。俺が千花の体に戻れば元気になるはずだ」

「もし、失敗したら？」

「さあてね」

最悪死ぬかもしれない。

しかし、運が良ければ千花は目を覚まし、俺が死ぬのかもしれない。妖夢の表情が微かに曇った。

さっきまであんなに無表情だったのに。

「千花の事、気になるのか？」

茶化すとか、そういう意味ではなく普通に訊ねた。

「そりゃあ、心配ですよ。急にいなくなって、帰ってくれば目を覚まさないし……」

そのまましゃがみ込むと、妖夢は膝の上に顔を埋めてしまった。震えた声が微かにもれる。

「心配……ですよ」

「……そうか。んじゃ、俺も頑張ってアイツを起こしてくるかね」

腰を上げて廊下を抜けると千花の部屋へと向かう。静かに眠っている千花の傍に座る。

すると、妖夢がそれを追ってやってきた。

「ん？」

「その、ご一緒してもよろしいでしょうか……？」

「……構わねえよ。むしろ助かる」

蒼狼は妖夢を向かい側へ座らせると少し両手を貸せと促した。

「俺が太刀になったら、千花の上にかざしてくれ。それだけでい



いから」

「承知しました」

「……しかし、その堅苦しい口調とかはあんま似てねえんだよな」

「え？ 祖父の事ですか？」

「おう。なんつーか、普通のジジイだった。やたら強かったんだけどさ」

「強かった……ですか」

懐かしむように遠くを見つめる妖夢。  
つとめない。

昔話をしている場合じゃないんだ。

「よし、んじゃ始めるぞ。両手を前に出してくれるか」

「は、はい」

言われた通り、手の平を上にして両手をスツと前に差し出す。

それを確認すると、蒼狼は瞳を閉じて自分の妖力全てを放出し、閃光にも似た鋭い光が蒼狼を包みこむ。

そのまま頭に太刀をイメージする。

妖気が鍛えたあの太刀を思い出す。

蒼く、鋭く、強い太刀を。

「……！ こ、これは……！？」

いつしか蒼狼の姿はかき消えていて、妖夢の手にはいつか見た蒼い太刀が浮かんでいた。

ふわりと落ちるその太刀を受け、その重みに顔をしかめる。

「ッ。けっこう、重い太刀なんだ……」

「聞こえるか、妖夢？ ちっと重いがそのまま我慢しててくれ」

蒼い刀身から蒼狼の声が響く。

「ど、どうするんですか？」

「口で説明するのは難しいんだが……まあ、とりあえずしばらく我慢しててくれ」

すると、太刀から蒼い光が雫のようにポタポタと零れると、千花の体に流れ落ちていった。

こぼれ落ちる雫の一つ一つが、まるで宝石のように美しかった。

雫は少しずつ千花の体を濡らしていくと、一度発光してからその体に吸い込まれていった。

妖夢は太刀の重さに耐えながらその何とも不思議な光景を見つめていた。

「……………綺麗」

零れた雫は、やがてこの部屋までも蒼の光に包んでいく。

ふと、太刀が少し軽くなったような気がして覗いてみると、刀身がうつすらと透けて千花の顔が見えていた。

「安心しろ。もう少しで終わるから」

「え、でも、蒼狼さんは…………？」

「……………」

答えが返って来るよりも先に、蒼の太刀が妖夢の手から消えてしまった。

同時に部屋を包んでいた蒼の光も薄くなり、やがてこれも消えた。

「…………ち、千花さん？」

恐る恐る声をかけてみる。

穏やかな表情のまま、千花は何も答えなかった。

微かに上下する胸の動きを見る限り死んではいないはずだ。

「千花さんッ」

妖夢は思い切って、千花の頬に手を伸ばした。

ほんのりと伝わる温もり。

すると、

「……………つ、冷たい」

「ッ！ 千花さん！」

妖夢の手を、千花が握り返して微笑んだ。

優しいような黒の瞳が妖夢を見つめると、ゆっくりと体を起こした。

それから、部屋を見回してからもう一度妖夢の顔を見つめる。

「……………どうして、そんな泣きそうな顔をしてるの？」

「い、いえ！ あの、これは……………その！」

「……………？ って、わ！？」

突然妖夢が千花に抱きつき、銀の髪をその胸に埋めた。

予期せぬ出来事に、千花はただただ目を丸くするだけだった。

「……………よ、妖夢？」

「ちよつとだけ、このまま……………お願いします」

「……………」

千花は悲しそうな顔をして、震える妖夢の肩を掴んだ。

ハッと顔を上げる妖夢の顔が暗がりでも分かるほどに真っ赤になる。

「ち、ちちち違います!!　そ、そそそそういう行為は、あの、えと、えとえとえと……!？」

「……ごめん」

「……え？」

そのままぐいと妖夢を押し退けると、千花は一瞬ふらつきながらも立ち上がり、部屋の戸に手をかけた。一度、振り返って妖夢を見つめる。

「……今まで、ありがとう」

「え……?　そ、それはどういう意味で」

妖夢の目の前で、部屋の戸が静かに閉ざされた。ポツンと残された妖夢は訳が分からず、部屋を飛び出して千花を追いかけた。

「ち、千花さん!?　ど、どこですか!？」

道場も、弓道場も、屋敷も庭にも、千花の姿は無かった。何処を探しても、千花を見つけることが出来なかった。

「何で……?　何ですか……?　千花さぁんツ!？」

妖夢の声が屋敷に、冥界へと響く。  
返事はなかった。

第四十一話 へ 無言のさよなら へ (後書き)

浮気性というか、何というか。

別のお話を書きたい衝動に駆られています；

この作品が終わらないと別のはやらないぞ！

やるとしたら短編だろうけどね。

七夕の主人公作りたいなあ……

ジラーチ的な女の子で、もちろん能力は『願いを叶える程度の能力』  
うわ、書いてえ……w

## 第四十二話 へ その背を追いかけて へ

「……千花さん、帰ってきた？」

白玉楼の門の前で遠くを見つめる妖夢に、幽々子は自分の傘の中へそっと招き入れた。

その日、幻想郷はしとしと寂しげな雨が降っていた。妖夢はうつむいたまままでその言葉に答えなかった。

「ここにいたら風邪ひいちゃうわ。部屋に戻りなさい」

優しく窘める言葉。

しかしそれに答えることはなく無言のまま。

傘の中で沈黙が流れ、今は降りしきる雨の音だけが聞こえる。

「……妖夢」

幽々子が銀の髪を撫でようとして、ふと妖夢が口を開いた。

「千花さんは、どうして出て行ってしまったのでしょうか」

「それは……さすがに、私にも分からないわ」

「せっかく目を覚ましてくれたのに、どうして……」

ごめん、と。

そして、今までありがとう。

たったの一言だけを妖夢に言い残して、千花は白玉楼を出て行ってしまった。

何故？

何故千花は妖夢に謝ったのだろう。

何故千花は妖夢に礼を述べたのだろうか。

蒼狼の力が戻って目を覚まし、また千花と一緒に稽古したり、屋敷で働けると思っていたのに。

何故、出て行ってしまったのだろうか。

「妖夢」

「……何でしょうか」

主の笑顔が妖夢を覗きこむ。

「待ってても、多分来ないわ。気になるのなら探しに行ったらどう？」

その言葉に、妖夢は顔を上げた。

「し、しかし！ よろしいのですか？」

「うん。私だって心配だし、帰りを待つ女なんてちょっと古いじゃない」

軽くウインクしてから、幽々子は傘を手渡し屋敷の方へ向かって歩き出す。

ふと、足を止めて一度妖夢に振り返るところ付け足した。

「ただし、千花さんと一緒に帰ってこないと屋敷には入れてあげないから。じゃあね」

「あ……は、はいッ！」

ひらひらと手を振る主人に、力いっぱい感謝の気持ちを込めて頭を下げると、屋敷の門がゆっくりと閉ざされた。

「千花さんを探そう。でも、いったいどこから探したらいいのか……」

誰か頼りになりそうな人はいないだろうか。  
とりあえず、

「人里から、探してみよう。誰か見かけた人がいるかもしれない」

幽々子から借りた傘を握りしめ、妖夢は外界へ続く道を走った。

・  
・  
・

「……ねえ、聖獣様」

優しく注ぐ雨に打たれながら、千花はつぶやいた。  
自分の体の、内なる聖獣に向かって。

「千花……」

「あの話、全部本当なんだね。聖獣様が体に戻った時、その時の記憶も戻ったんだ。……僕は、聖獣様に殺されたんだ」

「……俺が憎いか？」

その問いに、千花は首を振った。

「うっん。憎いとか、そうは思ったことないよ。だけど、すごく驚いた」

「……………」

「僕は記憶を失ったんじゃないくて、途切れてたんだよね。だけど、聖獣様の記憶の断片を垣間見て、それが微かに残った自分の記憶だと錯覚してたんだ。まあ、結局同じことなんだけど」



「千花、どうして白玉楼を……」

「……最初、僕はこの力を制御できなかった。だから暴走したまま妖夢さんと出会って助けられたんだ。もし、また暴走したら迷惑をかけちゃうから」

消え入りそうなほど小さな声でぽつぽつと言う千花。  
その頬に雫が流れる。

「せっかく仲良くなった人を、失うなんて嫌だ。だから、もう他人と関わりを持たないようにすれば、誰も失わない。聖獣様が言ってたじゃないか。この能力は自分と第三者が必要だって。他人がいなければ、少なくとも失うのは僕だけだ」

「千花……」

「いっそ、紫さんに封印されてしまった方が、よかったかもしれないね」

「……それ以上言うな」

「……ごめん」

千花は雨の中を歩きだす。

行く当ては、最初から決まっていた。

どうしても、自分の手でやらなくてはいけないことが一つある。  
大したことではないのだけど。

「里のみんなを、弔ってあげないと。唯一の生き残りの、僕の役目だ」

「……千花、少し待て」

蒼狼に呼ばれ、足を止める。

すると、千花の胸から蒼い光が現れると、目の前にあの太刀が突き刺さっていた。

蒼い刀身に虚ろな眼をした千花が映る。

「護身用だ。いつでも使えるよう具現化しておく」

「そういえば、弓、置いてきちゃったんだっけ。じゃあ、しばらく借りるよ」

「借りるも何も、今はお前の力だ。好きに使い」

「……ありがとう」

抜き身の太刀を抜くと、千花は肩に担ぎながらゆっくりと歩きだした。

目指す場所はただ一つ。

自分が生まれ、そして一度死んだ故郷。

前に訪れた時のままでは、みんなが可哀想だ。

生きている自分がやらないと、いずれ物の怪の類になるやもしれない。

それに……

「母さんと凜のお墓参り……しないと」

距離はあるが、陽が落ちる頃には着くかもしれない。

一歩一歩、重い足取りで千花は歩く。

片づけや墓参りが済んだら何をしようか。

いや、それすらも決まっているんじゃないだろうか。

「……一匹狼って、こういう気持ちなのかな」

「……………」

千花の言葉に、蒼狼は答えなかった。

第四十二話 へ その背を追いかけて へ（後書き）

いつも読んでくれる読者様、ありがとうございます。

空想夢の方がいつの間にかまたお気に入り登録件数が増えて嬉しいです。

もう少しで評価ポイントも登録件数もキリが良いんだけどなあ……w  
そこはまあ、気長に待ちます。

もう少しでこのお話も終わるのかな……？

っていうか、俺もキノの旅＋東方を書いてみたいのう……w

浮気性すぎるww

#### 第四十三話 へ 雨天疾駆 へ

里で聞き込みをしていた妖夢だったが、結局、里で千花の姿を見た者は誰一人としていなかった。

歩き疲れて茶屋の席に腰をかけると、先客がこちらに気づきやってきた。

「はあ……」

「何よ。辛気臭い顔しちゃって」

「へ……あ、霊夢さん」

霊夢は団子の串を数本握りしめたまま妖夢の隣に腰掛けた。ずい、と目の前に串が一本差し出される。

「あ、すみません、いただきま」

「ぱく」

「……ええつと」

空を掴む手を引っこめると、一度ため息をしてからお茶を一口飲んだ。

「誰もあげるなんて言っていないわよ。食べたければ自分で買いなさいな」

「いえ、結構です。お腹空いてませんし、食欲もないです」

「ふうん……」

そんな妖夢の様子を見ながら霊夢はもう一本団子を頬張る。沈んだ表情で湯のみを握りしめる妖夢に、霊夢が口を開いた。

「何かあったの？　ずいぶんと深刻そうな顔しちゃってさ」

「霊夢さんは、前に会った千花さんを覚えてますか？」

「ああ、アンタが言った新しい使用人さんでしょ。それが？」

「……その、昨晚白玉楼を出て行ってしまったみたいで、探してるんです」

すると霊夢はははあとか言いながら頷いて言った。

「アンタとこのお姫さんが何かやらかしたわけね。そりゃ出て行きたくなるわ。うんうん」

「……あの、真面目な話なんですけど」

もう少し茶化してやろうかと思ったが、妖夢の真剣な眼差しを受けて霊夢は自重した。

一度咳払いしてから霊夢が再び口を開く。

「ん、でも、出て行くなってあの人に行く当て何かあるの？　他に親しい人とかいる？」

「えと……」

交友関係というか、千花が他の人と話しているところなど見た覚えがない。

……そうだ。

「あの天狗なら何か分かるかも……」

「幻想郷の情報なら何でもございってヤツだし、可能性はあるかもね」

最後の一本を食べ終わると、霊夢は戸口に立てかけてあった傘を取って立ち上がった。

背を向けたまま、妖夢に一言告げる。

「妖夢」

「何でしょうか……？」

「……ううん、何でもない。文ならさっき、寺子屋に向かうのを見たわよ。探してみたら？」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

いちいち丁寧に頭を下げてから、寺子屋の方へと走る妖夢の背中を見て、霊夢は少しだけ笑みを浮かべた。

「何というか……これが青春ってヤツなのかしら。ま、頑張んなさいよ」

「巫女様、お代金の方を……」

「……今の子にツケといて」

・  
・  
・

寺子屋の戸から慧音が出てくると、妖夢が到着したのは同時だった。

血相を変えて現れた妖夢に、慧音は何事かと顔をしかめた。

「あの、天狗の、新聞、記者さんの……」

「文か？　文ならまだ来てないが」

「慧音さん！」

ちょうどいいタイミングで文が空から舞い降りてきた。

専用の黒い雨合羽を何故かカッコつけてから脱ぐと、いつもの白シヤツ姿になる。

慧音の傍に立っている妖夢を見つけて、文も不思議そうな顔をした。

「あやや、妖夢さんこんなところで何をしてらっしゃるんですか？」  
「あの、お聞きしたいことがあって」  
「ふむ。とにかく一度寺子屋に入らぬか。何も雨の降る軒先で話すこともあるまい」

慧音に促され、二人は寺子屋の中の一室へと案内される。  
間もなくして茶が出された。

「それで、あの、慧音先生の用事は」  
「いや、君からで結構だ」  
「で、ではあの、失礼します」  
「私にお聞きたいこと、ですよ。答えられる範囲でお答えしますよ。幻想郷トップシークレットな事はダメですけど」

くつくつと笑う文に対し、妖夢は一度姿勢を正してまっすぐ見据えた。

真剣な眼差しに驚きつつも、文も咳払いして姿勢を正した。

「あの、千花さんの故郷の詳しい場所、わかりますか？」

「千花さん……あ、ああ。蒼狼信仰の里ですか。ええ、もちろん分かりますけど」

「お、教えてください！ あの、今すぐにも行きたいんです！」

グツと身を乗り出す妖夢を見て、文は目をパチパチさせた。  
何か事情があるらしいと感じいた文は懷から簡易な地図を取り出した。

「ここから西にまっすぐ行くと森があります。その森を抜けると大きな門があつて、その先が蒼狼信仰の里になりますよ」

「この地図、お借りしますッ！」

「へ？ あやや、いやちよつと妖夢さんお待ちを……！」

文が手を伸ばしかけた時にはすでに、妖夢は部屋を飛び出て行ってしまうていた。

慧音がクスクスと笑いをこらえている。

「幻想郷最速が聞いて呆れるな。あんな小娘に後れを取るのか？」

慧音の言葉に文は唇を尖らせて反論した。

「い、今のは油断しただけですよー。というか、何であんなに急いでたんでしょうか？」

「さあね。さて、私は私の仕事をしなくては。頼んでいた物は持ってきてくれたか？」

「ええ。これですよ。人間の記した蒼狼信仰の書と、妖怪に伝わる蒼狼信仰の書。両方ちゃんと入手してきました」

二つの古びた書物を手にすると、慧音はフツと笑みをこぼした。

「これでいい。これで、あのスキマ妖怪が隠した歴史を修繕できるな」

「悲しいお話でした。目の前で紫さんが語ってくれた真実は……」

「真実とは、案外そういうものなんじゃないか。知らねばよかったと、よく聞く話だ」

慧音は淡々と言ってから書斎へ移る。

出来る限り、作業をしまおう。

残りは次に満月の時にやればいい。



「……ううん、しっかし気になるなあ」

先刻の妖夢の様子が、文の頭の中で引つかかっていた。

この雨の中を走って行ったというのだろうか。

微かに匂うスクープの匂い。

これを逃す手はない。

荷物をまとめ、雨合羽に袖を通すと、文は妖夢を追いかけて西へと飛び去った。

## 第四十三話 へ 雨天疾駆 へ（後書き）

空想夢の評価ポイントが100越えました！

評価してくださった方々、ありがとうございますッ

どうせなら何か一言欲しかったけど、そこまで求めるのは欲張りですよね；

こちらはそろそろクライマックス……な気がする。

終わりを描くと同時に、次回作のヒロインを誰にしようか考え中です（もちろん二次創作

次はまた女主人公かな。

あとでちよつと活動報告書こうか。

#### 第四十四話 へ 迷い断つ剣 へ

「見つけた……ここが、あの天狗の言っていた大きな門……」

地図通り、里から西へ走り鬱蒼とした森を抜け、妖夢は文に説明された大きな門の前に到着した。

古びた門は所々塗装が剥がれていたり、穴が開いていたりと荒れ放題で、鍵も何もかかっていなかった。

それどころか、門は微かに開いている。

「足跡……つい最近ここを誰かが通った証。千花さん、やっぱりここに來てるのかもしれない」

逸る気持ちを抑え門を越えると、前から異臭が漂ってきて思わず顔を覆う。

ひどい腐敗臭だった。

「これは……」

里に飛び散る、血と、血と、血と……

凄惨な光景に妖夢はややたじろいだ。

あの話通り、里は酷い有様だった。

こんな場所に、果たして本当に千花がいるだろうか。

「奥に、確か社があるはず。そこに行けば何か見つかるかもしれない」

しかし、腐敗臭はするのにその原因となり得る亡骸が一つも見当たらないことに妖夢は微かに眉根を寄せた。

誰かが片付けたのだろうか。  
未だ、雨は降り続けている。

それどころか、白玉楼を出た時は小雨だったのに今ではかなり強く降っている。

傘が無かったら今頃全身びしょ濡れだっただろう。

幽々子の傘に感謝しなくては。

濡れた階段を駆け上ると開けた場所に辿り着いた。

完全に崩壊した社の跡と思われる廃墟と、その奥にぽっかりと空いた空洞。

そして、同時に一つの人影をその目に捉えた。

見覚えのある、長い黒髪を一つにくくった少年。

「千花さん！」

思わず声を張り上げその名を叫んだ。

雨に打たれ、呆然と立ち尽くす背中がゆっくりと振り向いた。

黒の双眸が妖夢を見つけると、微かに見開いた。

……降りしきる雨の勢いが少し増してきた。

妖夢は傘を前に傾げながら千花の下へ走った。

「さ、探しましたよ！ 急にお屋敷を出て行って、どうしちゃったんですか？」

「……………」

妖夢の手が千花に触れようとした瞬間、蒼い光に阻まれ妖夢は後方に吹き飛ばされた。

突然の出来事に反応が遅れ、妖夢は受け身が取れず水たまりに激突した。

「か……ッ!？」

いつの間にか、千花の手に蒼の太刀が握られていた。  
太刀の一閃で吹き飛ばされたと理解するのに妖夢は少々時間がかかった。

「どうして私に攻撃を……」

「僕に、近付いちゃいけない」

「答えに、なつてません……ッ！」

千花がこちらを振り向く。

黒の瞳ではなく、太刀と同じ蒼い瞳をしていた。

「ち、千花さん……！？」

瞳だけではない。

その黒髪すらも蒼く染まっていた。

そして千花を中心に光の奔流が溢れだす。

その姿は、初めて千花にあった時のそれと似ていた。

千花の能力が、いや、蒼狼の能力が発動している。

しかし、それはありえないはず……

「千花さんの、蒼狼の能力は、誰かが傷つけられたときに怒りで……」

「……………」

何も、答えてくれなかった。

ただ太刀の切っ先を妖夢に向け、小さな声で呟くように言った。

「……僕に、近付かないでほしい。君を、他の人を傷つけない」  
「な、何を言って……！」

千花の姿が霞んだ。

常人の目では到底追えないような速さで、千花の太刀が振り下ろされる。

寸でのところで地面を蹴ってそれを回避。

太刀が振り下ろされた場所が抉られ亀裂が走る。

「妖夢、白玉楼に帰ってくれないか。幽々子様にも、よろしく伝えてほしい」

「……千花さん」

（それで、いいのかお前は？）

「……失うのも、無くすのも嫌なんだ」

構え、妖夢の姿を蒼の瞳が見据える。

ひどく、悲しそうな眼をしていた。

「何もしないで、ここを立ち去ってほしい。そうすれば、僕は何もしない。だから……」

「何を……勝手な事を……」

「……妖夢」

震える。

両手が、体が、声が。

その小さな体が、やり切れない感情に突き動かされ震える。

この、苛立つような感情は何だろうか。

怒りか、憤りか。

或いは両方か。

キツと千花を見据え、吠えるようにして叫んだ。

「自分から、逃げないでください!」

「……逃げないで、か」

ほんの少し、千花が微笑んだ。

それは自嘲するような笑みだった。

「確かに僕は逃げてる。だけど、逃げるだけで大切な人を誰も失わないのなら、僕はそっちの方がずっといい……」

太刀を構え直し、グツと脚に力を込める。

「……もう、僕に関わらないで」

「黙りなさい!」

「……ッ!?!」

背と腰の刀を抜くと、妖夢はまっすぐ千花を見据えた。その瞳は揺るがず、まっすぐに。

「貴方が、そこまで臆病な人とは思いませんでした! 誰かを失いたくないから逃げるなんて、臆病者のすることです!」

「……別に僕は、臆病者でも構わない」

「これだけ言っているのにまだそんなことを……!」

強く刀を握りしめ、二刀の構えを取る。

「貴方は、本当は迷ってるんです! だから、私とその迷いを断ちます!」

「……………」

(……俺の時と同じだな)

蒼狼は心の中で懐かしむようにつぶやいた。

千花の心情も分からないでもない。

昔、俺も同じことを考えた。

自分がいなくなればいい、と。

誰かを傷つけたくないのなら、他者との接触を断ち、ずっと自分だけ孤独でいればいい。

そうすれば自分は悲しまないし、誰も関わらないのだから誰も悲しまない。

それはひどく自己中心的な考え。

しかし、千花は結局は人間だ。

本当は千花だってそんなことを心から望んではない。

千花が真に恐れているのは……

「剣術で私に勝てると思いますか、千花さん」

「……僕は、迷ってなんかいない」

太刀を輝かせ、刀身に蒼のオーラを纏わせる。

妖夢が低く姿勢を構え、戦闘態勢に入る。

ジリジリと詰まる二人の距離。

激しく降り注ぐ豪雨。

雷鳴が鳴るのと同時に、二人は地を蹴った。



#### 第四十四話 へ 迷い断つ剣 へ (後書き)

夜「一文字違ったらダイナミック・ゼネラル・ガーディアンだね」  
妖「何を阿呆な事を」

夜「ダイナミックでみよんなガーディアンとかどうよ?」

妖「意味分らないんで死んでください」

夜「き、斬り払(ピチユーン)」

俺は好きですよ親分w

機体はリアル派なんですけどね。

自作のヒュッ バインにガーベラストレート握らせたのはいい思い  
出だ……ん?

全然話が違っじゃないカ。

ちよいとお知らせあるんで今日のあとがきは長めです。

まず一つ

お気に入りユーザーが増えました。

登録してくれた方々、ありがとうございます。

もう一つ

明日、バイトの関係でもしかしたら9時きっかり更新が出来ないか  
もしれないです。

なので、明日は9時以降に更新となります。

……今作、やっぱりいろいろ微妙な部分が目立ちますね；

## 第四十五話 へ 涙一閃 へ

雨は激しさを増しいつしか滝のように降り注いでいる。

そんな雨の中、二つの影が荒れ果てた社の前で何度も何度もぶつかり合っていた。

「はぁッ、はぁッ……！ な、何て桁違いな力……ッ」

「聖獣と祀られていたんだ。まさか、容易く倒れるとも思ってたの？」

息を切らす妖夢に対し、千花は平然とした表情で言った。

その顔に疲れなどは微塵も見えない。

今の一瞬、妖夢は二刀で上段から斬り込んだが、あっさり太刀で捌かれてしまった。

そして体勢を立て直そうとしたその刹那、蒼の一閃が頬をかすめる。それからはほとんど防戦一方で、ろくに攻撃を当てることさえ敵わなかった。

襲いかかる太刀を二刀でギリギリのところで受け流すだけで汗がにじみ出始める。

もつとも、激しく振り続ける雨のせいでどれが汗なのかは分からなかったが。

「剣術だけじゃ、君には勝てないと思う。けど、今の僕にはそれを凌駕する力がある。いつ暴発するかも分からない危険な力だけだね」

「暴発……しない可能性だって、あるじゃないですか！」

「……どうだろうね」

「ッ！」

蒼の太刀が踊り、妖夢の足元を挟む。

恐ろしい力だ。

千花の太刀が直撃したら、恐らくあつという間に粉微塵に碎かれてしまっだろう。

直撃すれば、の話だが。

「……ッ」

迫る太刀をどうにか見切りながら、妖夢はあることに気が付いた。だが確証はないためまだ推測に域を過ぎない。

「……一度、踏み込んでみますか」

大きく退いてから二刀を下段に構え直し、そのまま低い姿勢を維持しながら千花へと疾駆する。

真正面から向かう妖夢に軽く驚愕しつつも、千花は袈裟斬りを放つ。ここだ。

妖夢は千花の目の前で足を止め、その一撃を目の前で見据えた。

轟、と風が薙ぎ凄まじい風圧が襲いかかる。

そして、蒼の太刀は妖夢の足元ギリギリに突き刺さっていた。至近距離でにらみ合う千花は無表情で言った。

「何のつもりだ」

「恐くなって足を止めた。それだけですよ」

「……そう。セツ、えい！」

横薙ぎに払う太刀をバックステップで避け、妖夢は確信した。

この太刀に、殺気は全くない。

それどころか、太刀から恐れを感じる。

これは……

「……どうしたの。刀を一本収めちゃってさ」

千花の言う通り、妖夢は背負っていた方の刀を鞘に納めると、腰に収めていたやや小ぶりの刀だけを右手で構えていた。

「いえ、貴方のお相手ならこれぐらいで十分かと」

「そうか。……それにしても、君は戦闘の時と普段でこんなに変わるんだ。ちょっと驚いた」

「君、だなんて他人行儀ですね。いつものように、妖夢で結構ですよ」

「……他人なんだから、他人の行儀に則るさ」

蒼の太刀が走る。

千花の太刀筋を見切っている妖夢はそれをひらりと躲かわし、あるいは往なし、徐々に千花との距離を詰めていく。その表情に、微かに焦りの色が見え始める。

「く……ッ」

「もう少し、踏み込めれば……！」

「少し、本気を出さないと不味いかな」

千花がトンと蹴って数歩分距離を取ると、太刀を片手で掲げ妖夢に狙いをつける。

すると切っ先に蒼の光が強まり太刀全体を覆った。

「吠えろ」

「な……くッ！」

振り下ろすと同時に、蒼の斬撃が一直線に妖夢へ突進する。凄まじい剣圧が妖夢を直撃し、大きく吹き飛ばされる。

受け身を取ろうとしたが敢え無く地面に倒れ伏せてしまった。

「この……！」

起き上がろうとしたその瞬間、首筋に蒼の刃が突きつけられた。  
見下ろす蒼の瞳は依然として悲しそうな色をしている。

「僕の勝ち、かな」

「……………勝ったのに、どうしてそんな悲しそうな顔をしてるんですか？」

「……………」

答えない。

黙ったまま蒼の瞳がこちらを見据えている。

絞り出すような声音で、千花が言った。

「君は命の恩人だから、殺したくはない。だから、ここで退いてくれると嬉しい」

「……千花さん」

一瞬、蒼の太刀が揺らいだ。

迷いか、躊躇いか。

理由はどうでもいい。

妖夢にとって、その一瞬の隙が絶好の好機だったから。

「これは、真剣勝負ですよ」

刹那、右足で高く蹴り上げ千花の太刀を吹き飛ばし、右手の刀を一気に千花の体に突き立てた。

「が……くふッ」

脇腹を押さえその場に崩れる千花。  
刃を引き、血を払ってから鞘に納める。  
妖夢の手が、震えていた。

「太刀を受けて分かりました。貴方は迷っていた……いえ、恐れていた。本当は、結論を出すのを恐れていた……違いますか、千花さん」

「……………やっぱり、妖夢には、敵わないな」

千花は仰向けに倒れ灰色の空を見上げた。  
空の雫と頬の雫がちや混ぜになって流れ落ちる。  
千花は、泣いていた。

「僕は、聖獣みたいに強くもない、結局はただの人間だから、ね。  
……妖夢って、本当に強いんだね」

「いえ……私は……」  
「……………ごめん」

消え入りそうなほど小さな声で千花が言った。

「さ、帰りましょうよ。……幽々子様が待ってます」  
「……………わかった」

妖夢は千花の体を起こして肩を貸すとゆっくりと歩きだした。  
途中、落ちていた傘を拾い上げ二人で入る。

「……………相合傘なんて久々、かな」  
「こ、こんな時に何言ってるんですか。……………もう」

ほんのり頬を朱に染めながら、妖夢はそっぽ向いて歩く。  
千花は微笑しながら、顔を袖で強引に拭った。

「帰ったら、怒られるのかな？」

「幽々子様が怒るところ、見たことないですけど……」  
「あはは。そっか……なら、安心かな」

激しく注いでいた雨は、いつしか小降りになっていた。  
傘を閉じようとしたとき、千花の手がそつと伸びて傘を掴んだ。

「千花さん怪我してるんだから、無理しちゃダメですよ」

「これくらい平気だって。あの一撃、急所に届いてなかったし」  
「でも……」

「ちよつとでも手伝わせてよ。迷惑かけっぱなしなんて恥ずかしいからさ」

「……わかりました」

千花を背負いながら妖夢が歩き、背負われた千花が傘をさす。  
いつしか雨は止み、空にオレンジ色の晴れ間が見え始めた。

「じゃ、行きますよ。千花さん」

千花の故郷を背にして、二人は白玉楼へ向かって歩きだした。

## 第四十五話 へ 涙一閃 へ (後書き)

やっとバイト終わりました；

いやあ、9時つくらいに終わると思ってたんですが、結局こんな時間；

申し訳ないです……

さて、明日ちよつと報告があります

次回作（二次創作）のヒロインが決定しましたw

ヒントは……そうですね。

次回作のタイトルは「Scarlet Stardust」です。

何と言うバレバレ感……w

でも、まだ未定なので、気まぐれな夜斗はすぐに考えを止めてしま  
うかも……；

では、今日は徹夜でBOです（キリッ



## 第四十六話 へ 思うは故郷 へ

白玉楼の弓道場。

そこで姿勢を正し弓を構える一人の少年の姿があつた。

袖口のゆつたりとした着物に、一つにくくつた長い黒髪。

少年は凜と静まり返る中での的を見据え、矢を放つた。

カンと小気味い音が響いて矢が突き刺さると、少年は額の汗を拭つた。

かれこれ、一時間ぐらいこうして弓の鍛錬をしていた。

「精が出ますね。千花さん」

自分の名を呼ばれ振り返ると、銀の髪の少女が微笑んでいた。

千花も同じく微笑みかえす。

「あ、うん。しばらく弓を使ってなかったから鈍ってるんじゃないかと思つたら心配になっちゃって」

「ふふふ。頑張るのもいいけど、あんまり無理しちゃだめよ?」

「あ、幽々子様……」

いつの間にか、戸口に主の幽々子がやんわりと微笑みながら立っていた。

「少し前に怪我が治つたばかりでしょう? 無理して体を動かしたら、また傷口が開いちゃうわよ?」

「でも、もうほとんど回復してるし……ッ」

「ダ、メ。これは私からの命令よ?」

言いかけた唇を、幽々子の指がそつとなぞる。

思わぬ行動に千花と、何故か妖夢までも顔を真っ赤にしまった。

「あら、どうしたの妖夢ったら？ そんなに顔を紅くして？」

「ゆ、幽々子様！ あの、えと……は、破廉恥です！」

「そう？ 千花さんはどう思う？」

「へ？ ぼ、僕はその……」

「もう、冗談に決まってるでしょ？ 二人してそんな顔しないでちようだい」

「……………」

「……………」

顔を見合わせて苦笑い。

すると幽々子が部屋に戻り、妖夢も道場を出て行くと、再び一人の時間となった。

「……………なあ、千花」

不意に、声が聞こえた。

それは千花の内に潜む者の声だった。

「聖獣様？ どうしたの急に」

「いや……その、せっかく平和な日々を送ってるところ悪いんだがさ。ちよつと大事な話をしようかと思って」

「大事な話？」

千花は弓を収めると、縁側に腰をかけた。

「いつまでも、ここで厄介になっっている訳にはいかないよな」

「うん……そうだね。何となく、言いたいことは分かる」

「だからさ、俺たちの里を復興しないか？」

「復興……?」

内なる声は続ける。

「結局、あの日は死体を片づけただけで終わっちまったし色々中途半端だったろ。それに……」

「それに?」

ややバツの悪そうな声が聞こえてきて、千花は首を傾げた。

「ここは一応冥界なんだ。いくらお前が半人半妖の身とはいえ少なからず影響があるだろうよ。助けてもらったのにまた出て行くってのは無礼を重ねることになっちまうけどな」

「……そっか。聖獣様も帰りたいんだ」

「帰りたいって訳じゃ……ん? 俺も、ってどういうことだ?」

「ん、何でもないよ。じゃ、ちょっと幽々子様のところ行ってくる」

そう言つて千花が立ち上がると、道場の戸をくぐって屋敷へと向かった。

……そんな後ろ姿を見つめる視線に、千花は気づかなかった。

・  
・  
・

「え? 使用人を辞めたい……ですって?」

話を聞き終えた幽々子は呆氣にとられたという表情で千花を見つめた。

「いつまでもここでお世話になっている訳にもいきませんし、それに」

「ついこの前帰ったばかりなのに、急な話ね。……でも、そうね。無理に止めはしないわ」

「すみません……何から何まで勝手ばかりしてしまつて」

「いいのよ。気にしないでちょうだい。じゃあ、出立はいつにするのかしら？」

「出来たら早いうちに。でも、荷物をまとめたり色々と作業が残つてから……三日後くらいがちょうどいいと思つてます」

「三日……そう。何だか寂しくなるわね」

「すみません……」

身を引き、頭を深く下げて謝罪と感謝を込めた礼をする。幽々子も軽く頭を下げて応じた。

「故郷の復興……かあ。大変そうだけど、頑張つてね」

「はい、ありがとうございます」

「たまにはお手紙くれたり、あと、遊びに来てくれると嬉しいわ」

「もちろん、復興が終わればすぐに手紙を出します。必ず」

「ふふ。楽しみにしてるわ」

部屋を出て、自室に戻ると使い慣れた室内を見回した。

もう、数日でこの部屋ともお別れだ。

そうだ、屋敷の皆にも挨拶をしておかなくては。

世話になった侍女達を探し声をかけていく。

だが、肝心の人物が見当たらなかった。

一番世話になった人物なので最後にしようと思っていたのに、どこにも姿が見えなかった。

「……妖夢、何処に行つたんだろ？」

そろそろ日が傾くというのに、一向に姿が見えない。

幽々子に伝えると、くすくす笑いながら彼女は答えた。

「妖夢ったら、しょうがないわね。たぶん、あの子はね……」

第四十六話 へ 思うは故郷 へ (後書き)

うわ、遅れた……

そして、そろそろお話を終わらせます。

無理やり感どころか、いろいろおかしい部分がすごくありますが、そこは作者の技量不足です……

今作は本当に申し訳ないかぎりです……

ちょっと凹んでるんで、今日はこの辺で失礼します

## 第四十七話 へ ちょっと背伸びな k i s s へ

「妖夢、ここにいたんだ」

「え……あ、千花さん？」

桜の木の根元でしゃがんでいた妖夢が顔を上げる。

微かに目元が赤く、妖夢はそれを思い出したのかゴシゴシと擦った。

「す、すみません。ちょっと一人になりたくて」

「そっか。隣、いいかな？」

「ど、どうぞ」

ススツと横にずれると、妖夢の隣に千花も腰掛けた。

「こんな大きな桜の樹があるなんて知らなかったな。幽々子様は特別な桜だって言ってたけど……」

「あの、何かご用でしょうか……」

「ん、ああゴメン。今あいさつ回りしてたところだったんだよ」

「あいさつ回り……ですか？」

二人の間を風が薙ぐ。

黒と銀の髪が向かいあって同じように揺れる。

「妖夢、色々ありがとう。最初から最後までお世話になりっぱなしで、感謝しきれないほど感謝してるよ」

「え……あ、その……ど、どういたしまして」

途切れ途切れの返事だったが、千花は気にせず続ける。

「僕、故郷に帰るよ。帰って里を復興させたいんだ。一人でやるから途方もないほど時間掛かりそうだけど」

「……………」

「終わったら、手紙書くよ。宛先が冥界でも届くよね……………って、どうしたの妖夢？」

微かに聞こえる嗚咽のような声に千花が気づいた。  
よく見れば妖夢の体が震えていた。

「よ、妖夢泣いてるの……………」

「……………な、泣いてません。別に。これっぽっちも、です」

「……………僕が出て行ったら寂しい？」

「当たり前ですッ！」

真っ赤な顔を上げてから妖夢が言った。

「前も勝手に出て行って、せ、せつかく連れ戻したのに！ 故郷のためと聞いたなら、今度は止められないじゃないですか……………」

「妖夢……………」

ポン、と頭を撫でると妖夢の瞳から雫がいつそう溢れた。

「ごめんね。色々と振り回しちゃって。僕が抜けたら、お屋敷の仕事がちよっと増えちゃうけど……………」

「いえ、それは、大丈夫ですッ」

「……………つまり僕はあんまし役に立ってなかったと」

「そうじゃ、なくてッ！」

泣きながらフォローしてくれる妖夢に千花は微笑を浮かべた。



「まあ、一番頼りになるのは妖夢だし僕が抜けても大丈夫か」

さて、と千花は立ち上がり埃を払う。

「本当に、今までありがとう。妖夢に助けてもらえてよかったよ」

「それは、ちよつと返事に困る感謝ですネ……」

「そうかな。僕は正直に思ったことを言っただけだけど」

「あの……出立は何時なんですか？」

「幽々子様には三日後って言ったけど、荷物がまとまったらすぐにも行こうかなって思ってるよ」

「え、じゃあ……」

「早ければ今日の夜にでも出発しようかなって」

「そ、そんな！ 早過ぎますよ！」

「……ごめんね。故郷のこと色々心配なんだ」

「……………」

妖夢は黙ったまま、小さくなっていく千花の背中を見つめていた。  
呆気ない、別れだ。

こんなお別れでいいのだろうか。

……私は、何か言えないのだろうか。

何か、出来ないだろうか。

そう思った瞬間、すでに走っていた。

千花の背中を追いかけて追いかけて、一歩手前まで来て、

「千花さん！」

「え……何、妖」

千花が振り向いて答えようとした瞬間、その言葉が唇に遮られた。

妖夢が、目の前で顔を深紅に染めている。

その瞬間の出来事を理解するのに、千花は少々時間がかかった。

「…………い、あ、えと、今…………」

「し、失礼しますッ！」

そのまま脱兎の如く走り去る妖夢の背中を、千花は呆然と見つめていた。

「ほう…………これはこれは。青春の何とやら」

「わ！？ 聖獣様！ いきなり声を出さないでよ！」

「生きていて正解だったじゃないか。くくく」

「言わずもがな、全部見てたんだよね…………うわ、恥ずかしいな」

「こっちの台詞だ。まったく。さつさと支度しろ。向こうじゃ仕事  
が山ほどあるぞ」

「ああ、うん。っと、その前に、最後に一つだけ」

「んん？ 接吻以外に何かするのか？」

「ち、違うよ！ こっそり文さんに頼んでたことがあってさ」

「…………？」

・  
・  
・

「はいはい！ 三人とももう少し近寄って近寄って！」

「じゃあ、妖夢はここ。私が千花さんの隣に立つから」

「わわ！ 幽々子様何も抱きつかなくても！？」

「だ、ダメですよ幽々子様ったら！？ 千花さんが迷惑してます！」

「そんなことないわよ…………ねえ？」

「もう！ 私が間に入りますッ！」

「あらあら…………」

三人が庭で並ぶと、文は嬉々としながらカメラを構える。

「いいですね。これ、新聞に使ってもいいですか？」

「ゼツタイ、ダメです！」

「あやや……何だか妖夢さんが恐いですねえ……では！」

簡単な合図の後、文がレンズを覗きこみながらシャッターを切った。

そして、妖夢たちが出来あがった写真を受け取る時はすでに、残念ながら千花はもう旅立ってしまった後だった。

第四十七話 へ ちょっと背伸びなkiss へ (後書き)

えー、明日最終回&あとがきです。

いろいろと言いたいことはありますが、今作についてはあとがきで

お気に入り登録、ユーザー登録、ありがとうございます。

このあとがきで何度も失敗作だの何だのぼやいてたのに評価ポイントまでくださってホント嬉しいです。

それと、空想夢もお気に入り登録件数100件になりました。

重ね重ね、ありがとうございます。

## エピローグ

「見事なものね。あの荒れ果てた有様を、たった一人で修繕するなんて」

人々が賑わう里の様子を、八雲紫は小高い丘の上から眺めていた。その傍らには、黒髪の青年が立っていた。

「里だけ直して、あとは僕たちだけで生活しようかと思ってたんだけど、近くで妖怪に襲われてる人を助けてたらこんな風になっちゃって」

「……ま、いいんじゃないの。一人しか生活してない里なんておかしいもの」

「はは、そうだね」

屈託なく笑う青年の横顔に、紫も笑みをこぼした。

あれから十年。

能力が暴走することもなく彼は平穏に生きていた。

彼が成長したからだろうか。

身の丈も、前に見た時に比べたらずいぶん大きくなっているし、体つきもかなり逞しくなっている。

「この十年。色々な事があったよ。何度かこの里に襲撃があったりしたし、けっこう危ない時もあったけど」

「能力で暴走することはなかった……何故かしら」

「さあ。僕にもよく分からないよ。強いて言えば……そうだな。おまじないをしてもらったからかな」

「お呪い？ <sup>まじな</sup> そんなものいつ」

「あ、そういえば。紫さんに頼んでたアレ、ちゃんと届けてくれた

「？」

紫が言葉を遮られ怪訝そうな顔をしたが、すぐに頷いた。

「ええ。少し前に届けたわ。掃除か何かしてる最中で忙しそうだったから直接ではないけれど」

「ありがとう。じゃあ、もうそろそろこっちに来るのかな」

この里を見たら、あの二人はどんな顔をするのだろう。それが少し楽しみだ。

「……ごめんなさいね」

「何が？」

急に謝罪され、思わず目を丸くする千花。  
紫に謝罪されるようなことあっただろうか。

「あの一件、ちょっとやり過ぎたな、って。結局ただの杞憂に終わってしまったし、貴方には本当に迷惑をかけてしまって」

「別に、気にしてないよ。僕も、聖獣様も」

「……そう。それならよかった」

「あ、千花さん」

二人が話をしていると、一人の男が手を振りながら近づいてきた。  
彼は、この里の門番を務めている者だ。

「どうかしたの？」

「千花さんを訪ねてきた人たちが来たもんですから、それを伝えに」

「僕を訪ね……あ、幽々子様と妖夢さんか」

「あら、ここでも敬語なの。相変わらず真面目な方ね」

「幽々子様！」

幽々子は千花の姿を見ると目を見開いて、

「あ、あら？ 貴方って、そんなに背が高かったかしら……？」

「そりゃ、僕だって十年もすれば成長しますよ。幽々子様はお変わりないみたいですわね」

「そうねえ。毎日元気にご飯食べてるもの」

「あはは……変わってないね。本当に。で……」

何故か恥ずかしそうに幽々子の背に隠れる妖夢を見つけると、千花はちよんとしゃがんだ。

「久しぶり。妖夢さん」

「お、お久しぶりですッ。あの、えと、本日もご健勝のこと、あのう」

「何をそんなに緊張してるのよ。手紙を見つけて一番に大騒ぎしてたのは貴女でしょう？」

「そ、それは幽々子様の手紙を何処にしまったか忘れたせいで……！」

「そうやって人のせいにしないの」  
「むう……」

相変わらず主には敵わないらしい。

千花は白玉楼での事を思い出し苦笑した。

「あ……幽々子。これから一緒にお酒でもどう？ ここのお酒美味しいのよ」

「ホント？じゃあ、ご馳走になろうかしら」

「あ！ダメですよ幽々子様！ こんな昼間からお酒なんて……」

「じゃ、あっちのお店ね。早く行きましょ」

「も〜！」

「まあまあ。色々二人で話したいことがあるんだよきつと」

「……ですよね。はあ」

千花と妖夢は二人を見送ってから里を歩いた。

千花は時々里の修繕の話を交えながら社へと向かった。  
ちようど、今は千花の家もある。

「千花さんって、凄いですよね」

不意に、妖夢がそんなことを言いだした。  
何が？ と首を傾げる千花。

「だって、一人でこうして里を元の姿に戻したじゃないですか。前に来た時と同じ場所だとは信じられないくらい、立派です」

「僕一人ってわけじゃないよ。もちろん聖獣様も手伝ってくれたし、助けた人々もみんな手伝ってくれて、やっと出来上がったんだよ」

「この幻想郷に、もう一つ人里が出来たんですね」

「まあ、そういうことだね」

妖夢が千花を見上げる。

白玉楼で一緒に働いていた時は、妖夢より頭一つ分程度大きかった

千花の背丈は、今では二つ分ほど高くなっていた。

視線に気づいた千花が妖夢を振り返る。

吸い込まれそうな黒の瞳に、妖夢は思わず視線を反らした。

「どうかした？」

「あ、いえその……」



もじもじしながらも視線を戻すと、真っ赤な顔の妖夢が言った。

「……もう、背伸びじゃ届きそうにないですね」

「へ？ ……………あ」

言葉の意味を理解した千花も間もなく赤面する。

そして二人して顔を真っ赤にさせて、笑った。

「え、えつとそうだ！ 幽々子様のところ行きましょうか！」

「あ……えと、僕はしばらくここで」

「いいから！ 一緒に行きましょうよ！」

「わ！ ちょっとそんなに強く引つ張らないでも……………！」

強引に袖を引つ張られながら、千花と妖夢は社の階段を滑るようにして下りていった。

……そんな二人の後ろ姿を、一匹の蒼い狼が社の屋根から見つめていた。

「やれやれ。今後あの二人はどうなるんだか……………」

興味があるんだか無いんだか、狼はふわぁと欠伸をして瞳を閉じてしまった。

それはそれは、とっても楽しそうな寝顔だった。

（F i n）

## エピソード（後書き）

あとがきは30分後にッ

## あとがき 　ちよつと背伸びなkiss

このたびは東方二次創作第4弾『ちよつと背伸びなkiss』を読  
んでくださって、ありがとうございます。

今作はだいたい11万文字程度、ちょうど前作の空想夢本編と同じ  
くらいです。

えー、いかがでしたでしょうか？

閲覧者数は前と相変わらずで、俺としてはもう少し伸びてくれると  
嬉しいかなと思ってます。

週のアクセス数ももう少し……だいたい2000くらいは欲しかっ  
たかな；

まあ、今作でそこまで求めるのは野暮と言つか何と言つか……

さて、作者として一言。

本当に申し訳ないです……

今作はちよくちよくぼやいている通り、『失敗作』なんです；

理由は、細かく読んでいる方がいればすぐわかるはずですが、簡単  
な例を一つ挙げる

・文が最初に千花の里を訪れた時と、蒼狼の回想シーンの時間軸が  
合わない

もしかしたら読者の方には気づいていた方がいたかもしれませんが。

今作、実は3話辺りまでのプロットしか書いていません。

そもそも、俺のプロットの書き方が雑なのも原因なのですが、綿密  
なプロットなんてめんどくせえ！　とほとんど勢いだけで書いてい  
ました；

ちようと同じ時期に考えついた海鳴譚も、勢いだけで書き続けよう

かと思いましたが、敢え無く断念。

そのまま書き続けるのも失礼と思ったからです。  
お気に入り登録、評価等してくださった方には、本当に申し訳ないです……

では、一応今作の主人公などの解説をば。

・オリジナル

『夕凧 千花』

シリーズ初の主人公

活動報告を見てくださった方はご存知かもしれませんが、『夕凧』  
というのは夏の季語が元です。

同時に『千花』という名前も夏を入れて『千夏』にしようかと思っ  
ていましたが、止めました。

『夕凧 凜』

本当はもう少しキーキャラになる予定だった妹。

プロット不足というか、勢いだけでは文字通り話になりませんね；

『夕凧 志星』

千花、凜の母親

志星の星を「ホ」と読ませたのは、俺の好きなゲームのキャラより  
拝借したからです

『蒼狼』

書いていて、前作のカホリと全く同じだということに気づいた。  
過去との繋がりがイマイチ

実は、こいつは後付けキャラなんです……；

と、色々ダメな部分が目立つ作品となってしまうましたが、評価

してくださった方々や、いつも感想をくれるお二方、ありがとうございます。

次回作は……早ければ今月中に公開できるのかな。

主人公はまたオリジナルで女の子。

お話のイメージは何となく出来ているので、プロットがしっかり出来ればグダグダにはならない……と、思います。

ええ、今回のあとがきはちょっと少なめで終わろうと思います。

あんまりネガティブな発言しても面白くないので；

最後まで読んでくださった方々、お気に入り登録やユーザー登録、評価ポイント等、本当にありがとうございます。

また、次回作や完結してる作品も、読んでいただけたら嬉しいです。まるで成長していない……

と、言われないよう頑張るヘタレな小説家志望、夜斗をこれからまたよろしくおねがいします。

それでは……

あとがき くちよつと背伸びなkiss (後書き)

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。

次回作はまだ未定ですが、何かあれば活動報告の方でご報告します。  
時々チェックしてみてください。

それでは、またの機会に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5507t/>

---

ちょっと背伸びなk i s s

2011年7月12日22時35分発行